

関西学院大学大学院文学研究科

博士論文

研究演習指導 Olivier Birman 教授

「フランス語の開始アスペクトに関する研究」

2016 年 3 月

関西学院大学大学院 博士課程後期課程

文学研究科 文学言語学専攻

佐々木 幸太

論文の要旨

本論文は、認知言語学の立場から、事行（行為・状態）の開始を示すフランス語表現の働きを使用実態の観察にもとづいて解明するものである。全体は、「第1章 開始アスペクト」、「第2章 *commencer à inf.* で表す事行の開始」、「第3章 *se mettre à inf.* で表す主体の移行と事行の開始」、「第4章 日本語の開始アスペクトマーカ―」、「第5章 *commencer inf.* と *se mettre à inf.* の使い分け」という五つの章から成っている。実態観察のためのコーパスは、独自に収集した小説(752冊)、映画のシナリオ(65作品)、日刊紙 *Le Monde*, *Libération*, 週刊誌 *Le point* などを含んでいる。

第1章では、事行の展開段階を表す文法範疇であるアスペクトに関する日仏の主要な先行研究の記述を綿密に検討し、話し手が事行のアスペクトをどのように捉えてどのアスペクトマーカ―で表すかを左右するのが次の 1)～3) の認識のしかたであることを明らかにしている：1) 視点を置くのが事行の展開の内部か外部か；2) 展開段階が生起の直前、開始、持続、終了、結果状態のどれであるか；3) 事行のタイプが活動型・状態型、持続型・瞬間型、限界型・非限界型、均質型・不均質型のどれであるか。そして、開始アスペクトを表す表現形式が *commencer à/de inf.* と *se mettre à inf.* があることを確認している。

第2章では、フランス語の開始アスペクトマーカ― *commencer à inf.* の働きの解明をめざして、まず、「始める」を表す動詞 *commencer* のおもな用法を概観している。発話例の分析から、<S *commencer* P> の構文の直接目的語で表す対象 P には「時間の流れの中での展開が意識される」という性質が認められることが指摘できる。P が事行である場合は *à inf.* または *de inf.* で表すことが知られているが、他の多くの動詞の場合も視野に収めて発話例を分析した結果、*à inf.* を用いるのは視点を事行の展開の内部に置いて開始アスペクトを表すときであることを明らかにしている。

第3章で論じているのは、動詞 *mettre* を含む表現形式である。*mettre* は、本来「S が O を Z に移す」という移動・移行に関わる事態を表すために <S *mettre* O Z> の構文で用いる動詞であるが、*se mettre à inf.* の形式は事行の開始アスペクトのマーカースとして働く。ここでも多くの発話例の分析にもとづいて、そのように働くのがどのような仕組みによるかの解明に努めている。「始める」対象の事行 P は「Z に移す」の Z にほかならないという事実が出発点となる。そこから、*se mettre à inf.* が「自分自身をあらたなありかたである事行 P に移す、あらたなありかたである事行 P に移る」という主体移動を表すことになり、P の開始を示すアスペクトマーカースとして働くにいたると説明できる。さらにこの章では、Franckel (1989), Saunier (1999) などが指摘する、*se mettre à inf.* の使用にかかるさまざまな制約や「突発的、場違い」などのさまざまな表現効果の由来を探り、「あらたなありかたである事行 P に移る」という要素がそれらの制約や表現効果を生んでいることを指摘している。

第4章では、日本語の代表的な開始アスペクトマーカースと言える「V ハジメル」と「V ダス」のそれぞれと親和性の高いのはどのような動詞であるかを検討し、それを手がかりに両者の使い分けについて考察している。そして、事行の開始を捉える際に、事行の展開を意識するときの始動アスペクトは「V ハジメル」で、事行の生起（のみ）を意識するときの起動アスペクトは「V ダス」でそれぞれ示すことを明らかにしている。

最後の第5章では、それまでの考察を踏まえて、*commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使い分けの解明をめざしている。それぞれと親和性が高いのはどのような動詞であるかをコーパスの約6万5千例について検討し、次のような仮説を提示している。すなわち、*commencer à inf.* も *se mettre à inf.* も開始アスペクトマーカースであるが、前者は事行の展開を意識しつつ始動アスペクトを示す場合に用い、後者は事行の生起（のみ）を意識しつつ起動アスペクトを示す場合に用いる。

序論.....	1
第 1 章 開始アスペクト.....	3
1.1. アスペクト.....	3
1.2. アスペクトにかかわる要素.....	5
1.2.1. 話し手の視点の置き方.....	5
1.2.1.1. 完結アスペクトと不完結アスペクト (aspect perfectif / aspect imperfectif).....	5
1.2.1.2. 完了アスペクトと未完了アスペクト (aspect accompli / aspect inaccompli).....	6
1.2.2. 事行の展開段階 (étape du déroulement d'un procès).....	7
1.2.3. 事行の性質 (type de procès).....	8
1.2.3.1. 活動型の事行と状態型の事行.....	9
1.2.3.2. 持続型の事行と瞬間型の事行.....	10
1.2.3.3. 限界型の事行と非限界型の事行.....	10
1.2.3.4. 均質型の事行と不均質型の事行.....	11
1.2.3.5. 語彙アスペクト.....	12
1.3. 開始アスペクトマーカ―とは.....	14
1.4. この章のまとめ.....	16
第 2 章 commencer à inf. で表す事行の開始.....	18
2.1. 動詞 commencer の主な構文.....	19
2.2. P が名詞句の S commencer P.....	21
2.3. P が不定詞句の S commencer P.....	22
2.3.1. SV à / de inf.....	23
2.3.2. S commencer P (à / de inf.).....	26
2.4. S commencer à inf.....	29
2.5. この章のまとめ.....	33
第 3 章 se mettre à inf. で表す主体の移行と事行の開始.....	34
3.1. mettre のはたらき.....	35
3.1.1. 空間的な Z.....	35

3.1.2. 観念的な Z	39
3.1.2.1. Z = 名詞句	39
3.1.2.2. Z = 不定詞句	44
3.1.3. まとめ	46
3.2. 開始アスペクトマーカ― <i>se mettre à inf.</i>	46
3.2.1. <i>se mettre à inf.</i> と移行	47
3.2.1.1. 現在形の <i>se mettre à inf.</i>	47
3.2.1.2. 否定形の <i>se mettre à inf.</i>	51
3.2.2. <i>se mettre à inf.</i> の表現効果	54
3.2.2.1. Saunier (1999) の記述の検討	55
3.2.2.2. <i>se mettre à inf.</i> の表現効果の由来	57
3.3. S の移行と開始アスペクト	60
3.4. この章のまとめ	65
第 4 章 日本語の開始アスペクトマーカ―	67
4.1. 「V ハジメル」と「V ダス」の使い分け	69
4.1.1. 「V ハジメル」で示す開始アスペクト	69
4.1.2. 「V ダス」で示す開始アスペクト	71
4.2. 分析	73
4.2.1. 「V ハジメル」と親和性が高い動詞	74
4.2.2. 「V ダス」と親和性が高い動詞	77
4.2.3. 「V ハジメル」・「V ダス」と命令・意志の表現	80
4.2.4. 「V ハジメル」・「V ダス」と不測性が高い事行の開始	83
4.3. 開始アスペクトの下位分類	84
4.4. この章のまとめ	85
第 5 章 <i>commencer à inf.</i> と <i>se mettre à inf.</i> の使い分け	87
5.1. <i>commencer à inf.</i> / <i>se mettre à inf.</i> と始動・起動アスペクト	87
5.2. <i>commencer à inf.</i> / <i>se mettre à inf.</i> の使い分け	88
5.2.1. <i>commencer à inf.</i> と親和性が高い動詞	90
5.2.2. <i>se mettre à inf.</i> と親和性が高い動詞	97

5.2.3. まとめ	101
5.3. この章のまとめ	101
結論	103

序論

人は「パンを食べ始める」や「パンを食べ続ける」、「パンを食べ終わる」のように「(パンを) 食べる」という事行の開始, 持続, 終了といった様々な段階を話題にする. フランス語で事行の開始段階を表す代表的な形式は *commencer à inf.* と *se mettre à inf.* である. 小論は, この二つの表現形式の使い分けを明らかにすることを目指す.

実例を観察すると (1) のように *commencer à inf.* と *se mettre à inf.* のどちらも容認される場合もあるが, (2) のように *se mettre à inf.* が容認されにくい場合や, (3) のように *commencer à inf.* が容認されにくい場合がある.

- (1) — Et d'où as-tu sorti cette histoire que les dentistes n'ont jamais mal aux dents ? a dit Papa ; tu me fais rigoler ! Et il {**a commencé / s'est mis**} **à rigoler**.

(Goscinnny, R., 2007, *Les récrés du Petit Nicolas*)

- (2) Dessus, il y avait rangés des bols et de petites assiettes avec du mochi grillé au shôyu, sans doute le cadeau des visiteurs: ma nièce et ma femme étaient en train d'en manger avidement.
— Bonsoir Oncle, a dit Yasuko, nous {**avons commencé / ??nous sommes mis**} **à manger** sans vous attendre.

(Ibuse, M., 1972, *Pluie noire*)

- (3) — Évidemment ! Écoute, je ne vais pas t'apprendre la situation politique du Japon. (….) Ensuite, en tant que progressiste, j'aurais pieds et poings liés.

Arrivé là, je {**?commence / me mets**} **à rire** :

— Nous voilà en plein dans un sujet interdit pour une soirée.

(Maruya, S., 1991, *Rébellions solitaires*)

commencer à inf. と *se mettre à inf.* の意味的な差異に関する先行研究の代表的なものとして Franckel (1989) を挙げることができるが, 記述は非常に短くてあいまいな点があり, 両者の意味的な差異は十分に解明されないままである.

そこで, 小論では, 関連研究の記述や実例の観察を通して両表現形式の使い

分けに関してより正確で詳細な記述を目指す¹。分析対象としたデータは、小説（752冊）、映画のシナリオ（65作品）、日刊紙 *Le Monde*, *Libération*, 週刊誌 *Le Point*, インターネットサイト, そしてインフォーマントの協力²を得て作成した例である。

小論の全体的な構成は、次のとおりである。

第1章では、研究対象である開始アスペクトマーカを定義する。そのために、先行研究の記述を参考にアスペクトやアスペクトにかかわる用語を合わせて定義していく。

第2章では、commencer à inf. を考察の対象とする。そして、commencer à inf. を用いる場合にどのように事行の開始を捉えているかを明らかにするために、commencer à inf. と commencer de inf. の差異について分析する。

第3章では、se mettre à inf. を考察の対象とする。この章では、mettre のはたらきを明らかにし、se mettre à inf. が開始アスペクトマーカとして機能し得る要因を検討する。

第4章では、開始アスペクトのよりよい理解のために、日本語の開始アスペクトマーカを扱う。日本語では、「V ハジメル」と「V ダス」が代表的な形式であるとされている。この章では、日本語の開始アスペクトマーカの使い分けが事行の開始の捉えかたによることを明らかにする。

これらの分析を踏まえて、第5章では、commencer à inf. と se mettre à inf. の使い分けを明らかにする。

¹以下で発話例の前に付ける記号は次のような判断を示すものとする：

*：適合度が極めて低い

??：適合度がかなり低い

?：適合度がやや低い

² インフォーマント調査には Olivier Birmann 教授にご協力いただいた。

第 1 章 開始アスペクト

本章の目的は、研究対象である開始アスペクトと開始アスペクトマーカを定義することである。そのためには、まずアスペクトがどのような文法範疇なのかを明らかにする必要がある。

以下では、1.1. で先行研究の記述を参考にアスペクトがどのような文法範疇かを示し、1.2. で事行の捉え方に応じたアスペクトにかかわるいくつかの要素を定義する。そして、1.3. で開始アスペクトマーカを定義する。

1.1. アスペクト

アスペクトは、「相」とも呼ばれ、テンスと並んで動詞に関する研究の中核をなす文法範疇である。しかし、工藤 (1995) がアスペクトという用語について「両者（テンスとアスペクト）が混合されてきたこともまれではない」と指摘するように、アスペクトの定義は曖昧である。そこで、以下ではアスペクトがどのような文法範疇なのかを明らかにする。

Riegel *et al.* (2006) は、テンス *temps* とアスペクト *aspect* について次のように述べている。

- (1) Le temps (chronologique) : d'un point de vue externe, le procès est situé chronologiquement dans l'une des trois époques (passé, présent ou avenir), selon le rapport entre les deux repères temporels ((...) point d'énonciation, point de l'événement).

(Riegel, M. *et al.*, 2006, *Grammaire méthodique du français* : 291)

- (2) L'aspect : d'un point de vue interne, le procès peut être envisagé en lui-même, "sous l'angle de son déroulement interne" (P. Imbs). En effet, indépendamment de toutes considérations chronologiques, tout processus implique en lui-même du temps, une durée plus ou moins longue pour se développer et se réaliser. On peut concevoir ce déroulement interne de façon globale ou l'analyser dans ses phases successives (de son début à sa fin). (*ibid.*)

そして、工藤 (1995) と井元 (2010) もテンスとアスペクトについて同様に定義している。まず、テンスについて、工藤と井元はそれぞれ (3) と (4) のよ

うに定義している.

- (3) 基本的に、過去、現在、未来のようなく発話時を基準軸とする、出来事の外的な時間的位置の相違>を表し分ける文法範疇である

(工藤, 1995 : iii)

- (4) 一般にテンスとは、動詞で示される事行が時間軸上のどこに位置づけられるかを話し手の位置から示す標識のことを言う (井元, 2010 : 5)

(3), (4) で述べられているように、テンスは事行が生起する時期を、過去・現在・未来のいずれかに位置づける文法範疇である.

次に、アスペクトについて、工藤と井元はそれぞれ(5), (6)のように定義している.

- (5) 時間のなかで展開する出来事を、(ロシア語の完成体のように)一括化して完成的³に捉えるか、(ロシア語の不全体や英語の進行形のように)不完成的に捉えるのか、<出来事の内的時間に対する視点の相違>を表し分ける文法範疇である. (工藤 : iii)
- (6) アスペクトとは、時間軸にそって展開される事行のどの側面に注目するのか、ということを示すものである (井元 : 6)

(5), (6) で述べられているように、アスペクトは事行の展開を話し手がどのように捉えるかを示すための文法範疇である.

そして、事行の展開の捉え方は大きく分けて2通りに分類できる :

①話し手の視点の置き方

②事行の展開段階

①は話し手がどこから事行を捉えるかに関わっている. 具体的には話し手が視点を事行の「外側」と「内側」のどちらに置くか、事行が「完了している時期」と「完了していない時期」のどちらに置くかを示すものである. そして、②は事行のどの展開段階に言及するかが関わっている.

以上のことを踏まえて、小論ではテンスとアスペクトを次のように定義する.

³ 工藤が「完成相」と呼ぶアスペクトは、後述の「完結アスペクト」に相当する.

- (7) テンスとは、時間の中に事行を位置づける文法範疇である。
- (8) アスペクトとは、事行の展開をどのように捉えているかを示す文法範疇である。

1.2. アスペクトにかかわる要素

本節では、アスペクトにかかわる要素を詳しく見ていこう。まず、1.2.1. で話し手の視点の置き方を示すアスペクトを定義し、1.2.2. で事行の展開段階を示すアスペクトを定義する。

また、事行の展開段階を示すアスペクトは動詞が表す事行の性質の捉え方と密接な関係にある。そこで、1.2.3. では事行の性質を定義する。

1.2.1. 話し手の視点の置き方

山田（1984）によれば、従来アスペクトの研究は話し手が視点を事行の外側に置くか、内側に置くかという観点からなされてきた。山田は、視点を事行の外側に置く場合のアスペクトは「完結アスペクト」(aspect perfectif) と呼ばれ、内側に置く場合のアスペクトは「不完結アスペクト」(aspect imperfectif) と呼ばれると説明している。一方、現在のフランス語学においては、通常、アスペクトは事行が完了状態にある時期に視点を置くか未完了状態にある時期に視点を置くかという観点から研究がなされている。そして、前者は「完了アスペクト」(aspect accompli) と呼ばれ、後者は「未完了アスペクト」(aspect inaccompli) と呼ばれる。

話し手の視点の置き方は開始アスペクトマーカの選択にも大きく関わる。そこで、本節では、まず完結アスペクトと不完結アスペクトを定義し、次に完了アスペクトと未完了アスペクトを定義する。

1.2.1.1. 完結アスペクトと不完結アスペクト (aspect perfectif / aspect imperfectif)

事行を完結アスペクトで示す例には (9), (10) のようなものがあり、不完結アスペクトで示す例には (11) のようなものがある。

- (9) Pendant près de trois siècles, le christianisme *lutta* avec le paganisme. (山田, 1984 : 110)
- (10) *J'ai fait un voyage* cette année. (朝倉, 2002 : 375)

- (11) Quand Nicole entra dans la cuisine, son mari *faisait* du café pour elle.

(9) の話し手はほぼ 3 世紀の間キリスト教が異教と戦ったことを話題にしている。また、(10) の話し手は自分が旅行を体験したことについて語っている。いずれの場合も、話し手は *lutter* や *voyager* が表す事行の全体像を外側から捉えている。一方、(11) の話し手はコーヒーを煎れている夫を話題にしている。そして、展開中の事行を内側から捉えている。一般に、過去に言及する場合⁴、完結アスペクトは (9), (10) のように単純過去形や複合過去形で示し、不完結アスペクトは (11) のように半過去形で示すと言われている。

小論では、完結アスペクトと不完結アスペクトについて次のように定義する。

- (12) 完結アスペクトとは、事行の全体像を外側から捉える場合のアスペクトである。
(13) 不完結アスペクトとは、事行を内側から捉える場合のアスペクトである。

1.2.1.2. 完了アスペクトと未完了アスペクト (aspect accompli / aspect inaccompli)

完了アスペクトについて、Riegel *et al.* は次のように述べている。

- (14) L'aspect accompli envisage le procès au-delà de son terme, comme étant réalisé, achevé : le repère T'est situé au-delà de la borne finale (...).

(Riegel, M. et al., 2006, *Grammaire méthodique du français* : 292)

事行の完了アスペクトと未完了アスペクトを示す例として (15), (16) を挙げることができる。

- (15) Il *a écrit* une lettre. (井元: 7)
(16) Il *écrit* une lettre.

⁴ 過去以外の、現在、未来について話す場合は、完結アスペクトと不完結アスペクトを活用形によって示すことができない。

(15) では、動詞を複合形で用いている．そして、助動詞 *avoir* の現在形で視点が現在にあることを示し、*écrire* の過去分詞で事行が完了状態にあることを示している．一方、(16) では、現在形の *écrire* で視点が現在にあり事行が未完了状態にあることを示している．

また、井元 (2010 : 7) は、助動詞を現在分詞におくことでテンスと切り離して事行の完了アスペクトを示すことができると指摘している．

(17) *Ayant écrit* une lettre, il l'a remise à Marie. (井元 : 7)

(17) では、事行 *remettre* が生起したのが過去であることは主節で示しており、「助動詞 *avoir* の現在分詞＋過去分詞」では示していない．このことから、井元は「助動詞＋過去分詞」で事行を完了アスペクトで捉えていることのみを示すことができると述べている．

以上のことから、完了アスペクトと未完了について次のように定義する．

(18) 完了アスペクトとは、完了状態にある事行を捉える場合のアスペクトである．完了アスペクトは動詞の複合形で示す．

(19) 未完了アスペクトとは、未完了状態にある事行を捉える場合のアスペクトである．未完了アスペクトは動詞の単純形で示す．

1.2.2. 事行の展開段階 (étape du déroulement d'un procès)

展開する事行を *P* とすると、*P* にはいくつかの展開段階を認めることができる．図 1 は *P* の展開の流れを示したものである．



図 1 : 事行の展開段階

過去から未来へと流れる時間を *t* , *P* の開始点と終了点をそれぞれ時点 *a* , 時点 *z* とする．事行の展開には、時間の流れに沿った 5 つの段階を認めること

ができる。まず、初めの段階は時点 *a* の直前の段階 (①) である。次の段階は、事行が展開している時点 *a* から時点 *z* に内在する開始段階 (②)、持続段階 (③) そして終了段階 (④) である。そして、最後の段階は時点 *z* の直後の段階 (⑤) である。それぞれの段階に対応する用語は、研究者によって異なる⁵が、われわれは①～⑤のアスペクトをそれぞれ次のように定義する。

①：将前アスペクト (*proximité d'avant*) … 事行が生起する直前の段階

例) *Je suis sur le point de chanter*

②：開始アスペクト (*aspect inchoatif*) … 事行の開始段階

例) *Je {me mets / commence} à chanter*

③：持続アスペクト (*aspect cursif*) … 事行の持続段階

例) *Je suis en train de chanter, je chante encore*

④：終了アスペクト (*aspect terminatif*) … 事行の終了段階

例) *Je {finis / cesse} de chanter*

⑤：結果アスペクト (*aspect résultatif*) … 事行が完了した直後の段階

例) *Je viens de chanter*

また、一般にこれらのアスペクトは *commencer*, *continuer*, *finir* のような動詞で示すとされている。これらの動詞は、アスペクト補助詞 (山田, 1984), *aspectualizer* (*ibid.*), *métaverbe d'aspect* (Réquédat, 1980), *auxiliaire* (Pottier, 1992) や *semi-auxiliaire* (Riegel *et al.*, 2006) などと呼ばれる。小論では、これらを「アスペクトマーカ―」と呼び、次のように定義する。

(20) アスペクトマーカ―とは、事行の段階を示す表現形式である。

1.2.3. 事行の性質 (*type de procès*)

本節では事行が備えている性質を概観する。

事行の性質は下の四つの指標に基づいて区別される：

①活動か状態か

⁵ このことについて、山田は次のように述べている。「同じ術語を用いてもかなり異なった局相を示すものもある。たとえば *effective* や *inceptive* は開始点以後を指すのにも終結点以後を表すのにも用いられている。(…) また、それほど極端でなくとも、指す範囲が微妙にずれている場合もある (局相とは、われわれの用語では「事行の展開段階」に相当する)。(山田：133) このように、各段階の定義や用語の標準化がなされていないというのが現状である。

- ②到達点の有無
- ③時間幅の有無
- ④均質か不均質か

以下では、上の四つの指標に基づいた事行の性質を定義する。

1.2.3.1. 活動型の事行と状態型の事行

事行の性質を区別する際に、まず最初に注目されるのは、動詞が行為や変化が起ることを表すか、状態や性質を表すかということである。

まず、動詞が行為や変化が起ることを表す場合の例として、(21), (22) などがある。

(21) Mon frère **mange** dans la cuisine.

(22) Un homme **est mort** d'un accident de voiture hier.

(21), (22) の話し手は、**manger** で事行主体が食事することを表し、**mourir** で事行主体が死亡することを表している。小論では、行為（または現象）や変化を表す動的な事行を「活動型の事行」と呼ぶ。

活動型の事行は、二つに分けることができる。(21) では事行主体が何をするかが意識されている。そして、**manger** は「食べる」という事行主体の行為を表している。一方、(22) では事行主体の状態が意識されている。そして、**mourir** は事行主体が「死亡状態」になることを表している。小論では、動詞が行為（または現象）を表す場合の事行を「行為型の事行」と呼び、動詞が新しい状態になることを表す場合の事行を「変化型の事行」と呼ぶ。

次に、動詞が状態や性質を表す場合の例として、(23), (24) などがある。

(23) J'**aime** les chats.

(24) Je **suis** grand.

(23), (24) の話し手は **aimer les chats** で事行主体が猫好きであることを表し、**être grand** で事行主体が大きいことを表している。小論では、状態や性質、位置を表す静的な事行を「状態型の事行」と呼ぶ。

活動型の事行と状態型の事行について、次のように定義する。

- (25) 活動型の事行とは、行為や変化といった動的な事行である。活動型の事行には「行為型の事行」と「変化型の事行」がある。
- (26) 状態型の事行とは、状態や性質といった静的な事行である。

1.2.3.2. 持続型の事行と瞬間型の事行

次に、事行の展開が持続的か、瞬間的に注目する。(21) の *manger* が表す事行は時間幅を持って展開する。一方、(22) の *mourir* が表す事行は瞬間的で時間幅を持たない。このように、動詞が表す事行には展開の時間幅を持つものと、展開の時間幅を持たないものがある。

ただし、一つの事行が時間幅を持たなくても、同じ事行が複数回生起すれば、事行の集合を捉えて展開に時間幅を意識できる場合がある。そこで、小論では、動詞の語義ではなく、動詞が表す事行の展開に話し手が時間幅を意識するかに着目する。そして、事行の展開に時間幅があると意識する場合、その事行を「持続型の事行」と呼ぶ。一方、事行の展開に時間幅があると意識しない場合、その事行を「瞬間型の事行」と呼ぶ。

持続型の事行と瞬間型の事行について、次のように定義する。

- (27) 持続型の事行とは、時間幅があると話し手が意識する事行である。
- (28) 瞬間型の事行とは、時間幅があると話し手が意識しない事行である。

1.2.3.3. 限界型の事行と非限界型の事行

事行には到達点がある事行とそうでない事行がある。(22) の *mourir* が表す事行には「事行主体の死」という到達点がある。そして、到達点のある事行は到達点に達したらそれ以上展開しない。一方、(21) の *manger* が表す事行にはそのような到達点はない。そのため、理屈の上では、この事行は永久に展開し続けることができる。

一般に、語義に到達点が含まれる動詞は「限界動詞」(*verbe télique*) と呼ばれ、語義に到達点が含まれない動詞は「非限界動詞」(*verbe atélique*) と呼ばれている。しかし、同じ動詞を用いていても、文脈に応じて話し手が事行の到達点を意識する場合と、そうでない場合がある。

- (29) Pierre *joue* un concerto de Mozart. (山田, 1984 : 75)

- (30) Quand j'ai regardé par la fenêtre il y a un moment, Pierre *jouait* tranquillement. (*ibid.*)

(29) の話し手は、曲の終わりを到達点として意識しているので、この場合の *jouer* は「限界動詞」ということになる。一方、(30) の話し手は *jouer* の到達点を意識していないので、この場合の *jouer* は「非限界動詞」である。このように、「限界動詞」か「非限界動詞」かという区別は、同じ動詞でも文脈によって異なる。そこで、小論では動詞の語義が到達点を含むか否かではなく、動詞が表す事行に到達点があると話し手が意識しているか否かに着目する。そして、話し手が事行に到達点があると意識している場合にその事行を「限界型の事行」と呼ぶ。一方、話し手が事行に到達点がないと意識している場合にその事行を「非限界型の事行」と呼ぶ。

限界型の事行と非限界型の事行について、次のように定義する。

- (31) 限界型の事行とは、到達点があると話し手が意識する事行である。
(32) 非限界型の事行とは、到達点があると話し手が意識しない事行である。

1.2.3.4. 均質型の事行と不均質型の事行

事行には、展開の異なる時点において均質なものとあれば不均質なものもある。

- (33) Mon chat *a dormi* sur mes genoux pendant des heures et des heures.

- (34) *Jean *a construit* sa maison *pendant deux mois*.

(六鹿, 2005 : 139)

(33) の *dormir* で表す事行は、事行の展開のどの時点に注目しても、寝ているか寝ていないかという区別しかない。この場合、事行の展開は均質 (*durée homogène*) であるといえる。一方、(34) の *construire sa maison* で表す事行は、事行の展開の着目する時点によって事行の性質が異なる。この場合、事行の展開は不均質 (*durée hétérogène*) であるといえる。

小論では、展開が均質であると話し手が捉えている事行を「均質型の事行」と呼ぶ。一方、展開が不均質であると話し手が捉えている事行を「不均質型の

事行」と呼ぶ。また、一般に事行が「均質型の事行」か「不均質型の事行」かは、「均質型の事行」が展開する時間幅を示すために用いる *pendant* と共起し得るかに応じて区別できるとされている。

均質型の事行と不均質型の事行について、次のように定義する。

- (35) 均質型の事行とは、展開が均質であると話し手が意識する事行である。どの時点に着目しても事行が展開しているか否かという区別しかない。
- (36) 不均質型の事行とは、展開が不均質であると話し手が意識する事行である。どの時点に着目するかによって展開の度合いが異なる。

1.2.3.5. 語彙アスペクト

上で紹介した事行の性質は、一般に動詞を分類する際に利用される概念である。動詞の分類で最も有名なものに Vendler (1966) の動詞四分類がある。山田は Vendler の分類を (37) のようにまとめている。

動詞の分類については深く立ち入らないが、Vendler の分類には限界があることに留意しておきたい。山田は Vendler の分類が文全体や節を考慮せず個々の動詞だけに着目している点を指摘している。そのため、Vendler の分類では、一つの動詞が多義的であると見なされる場合があると述べている⁶。

⁶ Vendler の分類では *Are you smoking?* の *smoke* は活動動詞だが、*Do you smoke?* の *smoke* は状態動詞であるということになると山田は指摘している。

(37)	基準 \ 分類	状態	活動	完成	達成
	進行形の有無	No	OK	OK	No
	特殊点 ⁷ の有無	ナシ	ナシ	アリ	アリ
	瞬間か延長か	延長	延長	ある程度 の延長	瞬間
	均質性	均質	均質	No	/
	it takes three hours to X	No	No	OK	OK

状態 (state) 動詞 : love, want something, like, dislike, hate, rule or
dominate somebody or something

活動 (activity) 動詞 : run, walk, swim, push or pull something

完成 (accomplishment) 動詞 : paint a picture, make a chair, build a house

達成 (achievement) 動詞 : recognize, realize, lose or find an object, reach the
summit

(山田, 1984 : 80)

同様のことがフランス語の動詞にも言える。(34) で不均質型の事行として取り上げた *construire sa maison* に事行の中断を表す節を添えた (34') を見てみよう。

(34') *Jean a construit sa maison pendant deux mois mais il a dû s'interrompre* faute de moyens.

(34') のように文脈を与えると, *construire sa maison* と *pendant* が共起可能になる。この場合の *construire sa maison* が表す事行は, 均質型の事行であるといえる。このように同じ動詞を用いていても, 不均質型の事行を表す場合もあれば均質型の事行を表す場合もある。

⁷ 山田は到達点のことを「特殊点」と呼んでいる。

小論でも事行の性質に言及するが、動詞を分類するためではない。開始アスペクトマーカ―を分析する上で、事行がどのような性質を持つかを理解することが重要な意味を持つからである。

1.3. 開始アスペクトマーカ―とは

本節では「開始アスペクトマーカ―」を定義することを目指す。

Chevalier *et al.* (1997), Riegel *et al.* (2006) や朝倉 (2002) の記述を参考にすると、開始アスペクトの表現手段として以下の四つの方法をあげることができる。

- ・ 迂言法
- ・ 動詞の活用
- ・ 副詞
- ・ 動詞の語義

Chevalier *et al.* や Riegel *et al.* は、開始アスペクトは迂言法で示すのが一般的であるとしている。(38)-(40) はそのような場合の発話例である。

- (38) Il **a commencé à lire** son journal dans l'ascenseur. Il ne remarque pas la serviette trempée abandonnée dans l'entrée par l'Otarie.

(de Buron, N., 1985, *Qui c'est, ce garçon ?*)

- (39) Ils se turent et il **commença de** parler.

(Scott Card, O., 2001, *La voix des morts*)

- (40) – Ce que je vais faire ? Eh bien, c'est pas compliqué : je **me mettrai à travailler** et serai toujours honnête.

(Charrière, H., 1969, *Papillon*)

(38)-(40) の話し手は、lire, parler, travailler が表す事行の開始アスペクトを、commencer à / de inf. または se mettre à inf. で示している。

次に、動詞の活用形で開始アスペクトを示す場合をみる。朝倉は単純過去形で事行の開始を表現できると指摘している。

- (41) 未完了動詞⁸の単過は時として行為の開始点を示す： A midi, la neige tomba. 「正午に雪が降った」は La neige **commença** à tomber. に相当する(朝倉, 2002 : 376)

また、複合過去形でも同じように事行の開始を表すことができる。

- (42) (話し手が赤子を泣かせないように気をつけている場面で、聞き手の扉の音で泣かせてしまって) Ça y est ! Il **a pleuré** à cause de toi !

(42) の il a pleuré は il a commencé à pleurer に相当するといえる。このことから、複合過去形で開始アスペクトを示す場合があることが分かる。

しかし、単純過去形や複合過去形は、事行が過去に生起したことを表すために用いることが多く、開始アスペクトを示すために用いるのは稀である。そのため、これらを開始アスペクトマーカーと見なすことはできないだろう。

続いて、depuis や à partir de などの副詞句を用いる場合である。

- (43) Il pleut **depuis hier**. (朝倉, 2002 : 167)

- (44) Elle est en forme **depuis qu'elle a cessé de boire**.

(曾我, 1992 : 69)

(43) の話し手は、il pleut が表す事態の開始点が「昨日」であることを depuis hier で示している。そして、(44) の話し手は elle est en forme で表す事態の開始点が「彼女が酒を断つ」という事態が生起した時点であることを depuis qu'elle a cessé de boire で示している。いずれの場合も、話し手は事態の開始点を示しているのであって、事行の開始アスペクトを示しているのではない。このことは、(45) に示すように事行の終了アスペクトを示す表現と共に起こることからも分かる。

- (45) Griffin **avait fini de se baigner** depuis longtemps (…)

(Peters, E., 1990, *Le moineau du sanctuaire*)

⁸ 未完了動詞は、小論の「非限界型の事行」を表す動詞を指す。

(45) の話し手は、*Graffin avait fini de se baigner* で表す事態がいつから生起しているかを示している。このように、事行の開始アスペクトを示すために用いない以上、副詞句を事行の開始アスペクトマーカーストとしては扱うことはできない。

最後に、動詞の接辞などによって開始アスペクトを示す場合をみる。『フランス語学小辞典』(2011) のアクツィオンスアルトの項に次のような記述がある。

- (46) 「たとえば、*dormir* (眠る) は持続的な事態を表すが、この動詞に再帰代名詞と事態の開始局面を表す接頭辞 *en-* のついた *s'endormir* (眠り込む＝眠りに入ること) は、起きている状態から眠っている状態への変化を表す」(髭他, 2011, 『フランス語学小辞典』: 9)

つまり、*s'endormir* で *dormir* の開始アスペクトを示すというのである。確かに、*s'endormir* が生起する時期は、*dormir* が開始する時期と重なっている。しかし、Pottier も指摘するように、*commencer à inf.*, *continuer à inf.*, *finir de inf.* で *s'endormir* の開始アスペクト、持続アスペクト、終了アスペクトを示すことができる (*il commence à s'endormir*, *il est en train de s'endormir*, *il finit de s'endormir*)。こうした理由から、われわれは動詞の接辞などを開始アスペクトマーカーストとは認めない。

以上のことから、開始アスペクトマーカーストについて次のように定義する。

- (47) 開始アスペクトマーカーストとは、事行の開始を示す表現形式である。具体的には *commencer à / de inf.* と *se mettre à inf.* のことである。

1.4. この章のまとめ

本章では、先行研究の記述を参考にしつつ、「開始アスペクト」を定義した。まず、1.1. で「開始アスペクト」が属す文法範疇である「アスペクト」をみた。アスペクトは話し手が事行の展開をどのように捉えているかを示す文法範疇である。次に、1.2. で「話し手の視点の置き方」、「事行の展開段階」、そして「事行の性質」といったアスペクトにかかわる要素を定義した。最後に、1.3. で「開始アスペクトマーカースト」を定義した。

「開始アスペクトマーカースト」とは、事行の開始アスペクトを示す表現形式である。一般に、事行の開始アスペクトは迂言法、動詞の活用形、副詞、動詞の

語義によって示すとされている。小論では, *commencer à / de inf.* と *se mettre à inf.* だけが開始アスペクトマーカであるという立場を取る。

開始アスペクトマーカの選択には, 話し手が開始する事行をどの視点から捉えるか, そして話し手が事行の性質をどのように捉えるかが密接に関わっている。

本研究の目的は, *commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使い分けを明らかにすることであるが, *commencer à inf.* を正しく理解するために, 次章では *commencer à inf.* と *commencer de inf.* をどのように使い分けるかを探ることにする。

第 2 章 commencer à inf. で表す事行の開始

動詞が表す事行の主体を S, 対象を P とする. フランス語では, P を à inf. で表す場合, inf. の事行の開始アスペクトを S commencer à inf. の形式で示すことがある. S commencer à inf. を用いる発話例には (1)-(4) がある.

- (1) (ある事件の捜査の担当になった刑事が) — Passez me prendre demain matin pour qu'on **commence à enquêter** sur cette affaire, dit Regina. (Cornwell, P., 2002, *L'île des chiens*)
- (2) Ce jour-là, assis par terre et avec une chaise pour bureau, entouré des animaux de notre cour, j'**ai commencé à écrire un nouveau livre** qui raconte le quotidien de notre vie. Je l'ai écrit en russe, pour qu'il puisse être publié à l'étranger.
(*Libération*, 2005/03/18 : 4)
- (3) (先に到着した仲間が作業をしているのを指さしながら) Regarde, ils **ont commencé à monter le camp** ; tu n'as pas envie d'y arriver vite pour te sécher et te réchauffer ? »
(Hobb, R., 2005, *L'Assassin royal, tome 12 ; L'homme noir*)
- (4) « Il y a encore de nombreuses séquelles de l'après-indépendance, dont le socialisme et l'arabisation. Mais l'Algérie **commence à bouger**. Dans ce pays, tout est à faire. Dans cinq ans, vous ne reconnaîtrez plus rien... » (*Le Point*, 2002/10/11 : 59)

(1)-(4) の P は, それぞれ enquêter, écrire un nouveau livre, monter le camp, être fatigué である. (1) ではこれから生起する P の開始時期に言及するために, (2) では過去に生起した P の開始時期に言及するために, それぞれ S commencer à inf. を用いている. また, (3) では P の開始段階が完了していることを, (4) では P が開始段階にあることを, S commencer à inf. で表している.

本章の目的は, S commencer à inf. で表す P の開始アスペクトがどのようなものを明らかにすることである. そのために, まず 2.1. では, commencer の構文を概観する. 次に, S commencer P の構文に注目して, 2.2. で P を名詞句で表す場合の commencer のはたらきを扱い, 2.3. で P を不定詞句で表

す場合の *commencer* のはたらきを扱う。そして、2.4. では *S commencer à inf.* を用いる場合に話し手がどのように開始を捉えるかを明らかにする。

2.1. 動詞 *commencer* の主な構文

小論では、*commencer* を他動詞として用いる場合を問題にするが、*commencer* は自動詞としても用いることがある。ここでは、*commencer* の主な構文を概観する。

まず、(5), (6) は、自動詞の *commencer* を用いる場合の発話例である。

(5) La fête va ***commencer***, mes petits ! (Kenyon, S., 2010, *Le cercle des immortels, tome 5 : La descendante d'Apollon*)

(6) Sylvie pensa avec ivresse que la journée ***commençait*** bien.
(Troyat, H., 1980, *Viou*)

(5) の *S* は *la fête* で、(6) の *S* は *la journée* である。いずれの *S* も時間の中で展開する。そして、話し手は *commencer* で *S* が開始段階に至ることや、*S* の開始段階がうまく運ぶことを *S commencer* で表している。

そして、*S* の時間幅を想定することが難しい場合は、*commencer* は容認されにくい。

(7) ?? L'explosion ***a commencé***.

(7) の *S* は爆発で時間幅がほとんど存在しない⁹。

ところが、*S* が時間幅を持つものとして解釈できても、*commencer* が容認されにくい場合がある。

⁹ *P* が時間幅を持たない場合であっても、話し手が *P* に時間幅を感じることができる場合がある。

(i) (スーパースローカメラの映像を再生しながら) Regardez ! ***L'explosion a commencé*** à cet instant !

(ii) Couvrant Énée de mon corps, je rampai avec elle en direction de l'homme bleu. C'est alors que ***les explosions commencèrent*** dans le bosquet juste derrière nous. (Dan, S., 1996, *les voyages d'Endymion tome 2 ; Endymion 2*)

(i) の場面では、話し手が開始と終了の間の時間幅を意識しやすい。また、(ii) の *P* は、複数の *explosions* の集合である。このような場面では、話し手が開始と終了の間の時間幅があると感じ、展開を意識するのが容易である。このように、話し手が *P* に時間幅を感じることができる場合は、*commencer* は容認される。

- (8) (襲撃事件の流れについて語っている場面で) C'est, en effet, à cet instant-là que l'attentat **a commencé**.
- (9) ? Regarde ! L'attentat **a commencé** !

(8) と (9) の S は襲撃で、時間幅をもって展開する。(8) は、話し手が経験した襲撃事件の流れについて語っている場面の発話である。この場合、S がどのように展開するかを話し手が意識するのは自然である。一方、(9) は襲撃現場に立ち会っている場面である。話し手は、聞き手の注意を襲撃に向けようとしている。この場合、襲撃のあることが伝わればよく、展開を意識するには至らないのは自然なことである。

続いて、他動詞の *commencer* を用いる場合を見る。その場合、P は名詞句、または不定詞句で表す。

まず、(10) は P が名詞句の場合の発話例である。

- (10) Ils (=les cheminots) **commencent la grève** dès aujourd'hui, pour défendre l'emploi. (*Libération*, 2005/05/31 : 10)
- (11) Gustave **commence la guerre de Livonie** en 1558, mais il meurt peu après. (http://www.memo.fr/article.asp?ID=PAY_SUE_010)

(10), (11) の P (la grève, la guerre) は時間の中で展開する。話し手は、S が P を開始段階に導くことを S *commencer* P で表している。

次に、(12), (13) は、P を不定詞句で表す場合の発話例である。

- (12) Tandis que le café passait dans le percolateur, Greta **commença à lire**.
(Higgins., M.C., 1991, *Recherche jeune femme aimant danser*)
- (13) — Si, si, vous pouvez regarder, c'est une circulaire.
Le patron **commença de lire** et aussitôt la patronne demande :
— Qu'est-ce que c'est ?
(Clavel, B., 1962, *La grande patience, tome 1 ; la maison des autres*)

(12), (13) では、それぞれ S が lire を開始に導くことを S *commencer* P

で表している．このように，不定詞句で表す場合の P は (12) のように à inf. のこともあれば，(13) のように de inf. のこともある．

2.2. P が名詞句の S commencer P

P を名詞句で表す S commencer P の代表的な発話例には (14)-(16) がある．

- (14) (= 10) Ils (=les cheminots) **commencent la grève** dès aujourd'hui, pour défendre l'emploi.
- (15) Le fait de posséder des pouvoirs lui (le Magicien) interdisait d'avoir jamais plus d'un dollar sur lui. Mais il aurait au moins pu **commencer la journée** avec assez de monnaie pour s'offrir un café. (Lindholm, M., 2010, *Le dernier magicien*)
- (16) Nous voulons **commencer des négociations** immédiatement avec le patronat sur l'organisation du travail. (*Le Monde*, 1998/04/03 : 2)

(14)-(16) の P (la grève, la journée, des négociations) は時間の中で展開する．P の展開を意識すると，開始段階や持続段階といった様々な段階を想定することができる．話し手は P の展開を意識して，S が P を開始段階に導くことを S commencer P で表している．

また，(17), (18) のように P が 本来時間の中で展開しないものであっても，S commencer P を用いることがある．

- (17) François Sagan **a commencé un nouveau livre**, mais elle n'aime pas le ton de l'auteur. (Peeters, 2002 : 183)
- (18) Ce n'est pas encore l'heure de rentrer. Le relieur décide de **commencer un nouveau livre**. (*ibid.* : 176)

本来，livre は本という物体を表すが，換喩 *métonymie* によってその物体にかかわる行為を表すことがある．たとえば，(17) では，「彼女は作者の書き方を好まなかった」と言い添えていることから分かるように，話し手は本に深く結びつく「読む行為」を表している．また，(18) では，S が製本職人であることと先行文脈で「まだ帰宅する時間でない」と言っていることから分かる

ように、本に深く結びつく「製本する行為」を表している。「読む行為」についても「製本する行為」についても、時間の中での展開を意識するのは自然なことであり、話し手は S が P を開始に導くことを *S commencer P* で表している。

また、S が P を構成する要素である場合に *S commencer P* を用いることがある。

- (19) " Bienheureux es-tu, Lecteur, (...)." Cette phrase ***commence Le Grief***, un texte de Marie Le Jars de Gournay, préfacière et éditrice des Essais de Montaigne, et paru avec l'édition de 1595 de ces Essais. (*Le Soir*, 2010/12/30 : 30)
- (20) Le bâtiment de l'hôpital Vladimirski ***commence la rue Kirov*** qui vous conduira à la place Sobornaïa.
(<http://fr.tourismnn.ru/maintour/cultinter/arzamas/excursion>)

(19) の P である *Le Grief* は、複数の文によって構成されている。P の展開を意識すると、*cette phrase* (S) は P の最初の文である。また、(20) の *la rue Kirov* (P) は、車道や歩道、標識、そして様々な物建物によって構成される空間である。そして、*le bâtiment de l'hôpital Vladimirski* (S) から伸びていく P を思い浮かべると、話し手は P に時間の中での展開を意識することができるようになる。そして、S が P の展開に関わる最初の要素であることを表す場合、*S commencer P* を用いる。

以上の分析から、話し手が P の展開を意識する場合に、S が P の展開に関わる最初の要素であることを *S commencer P* で表すことが分かった。P が時間の中で展開する場合、S が P を展開に導くことを *S commencer P* で表す。また、P は本来時間の中で展開しない物であったり、空間的な場所の場合がある。その場合、話し手が P に時間の中での展開を意識することができれば、*commencer* を用いることができる。

2.3. P が不定詞句の *S commencer P*

既に見たように、P を不定詞句で表す場合、*à inf.* か *de inf.* の形式を用いる。両形式のあいだの選択には話し手が P (事行) をどのように捉えているかが大きくかかわっていると考えられる。そこで、2.3.1. で事行に対する視点の

置き方に着目して、動詞を *à inf.* または *de inf.* の形式で用いる場合を分析する。そして、2.3.2. でわれわれの主張が P を *à inf.* で表す場合と *de inf.* で表す場合のいずれにも当てはまることを確認する。

2.3.1. SV *à / de inf.*

事行に対する視点の置き方には、1.2.1. で述べたように、事行の内側に視点を置く場合（不完結アスペクト）と外側に置く場合（完結アスペクト）がある。一般に、過去の事態を不完結アスペクトで捉える場合は半過去形を用い、完結アスペクトで捉える場合は単純過去形、または複合過去形を用いる。そして、話し手が事行を不完結アスペクトで捉える場合は *à inf.* の形式を選択し、完結アスペクトで捉える場合は *de inf.* を選択するようである。

例えば、*écrire un roman* を *rêver* と用いる場合と *songer* と用いる場合、次のような違いがある。

まず、(21) は *songer* と共に用いる場合である

(21) Je songe {*à* / **d*} *écrire un roman.* (Cadiot, 1997 : 72)

(21) では、「事行主体が小説を書いている場面」を思い浮かべていることを *songer à écrire un roman* で表している。ある場面を思い浮かべるとは、事行が展開している様子を想像することである。そのためには、事行の内側に視点を置いて事行の不完結アスペクトを捉えるのが自然である。そして、その場合 *à inf.* を選択する。

次に、(22) は *rêver* を *inf.* と共に用いる場合である。

(22) Je rêve {**à* / *d*} *écrire un roman.* (*ibid.*)

(22) では、事行主体が「小説を書くこと」を夢見ていることを表している。話し手は「本を書くこと」を欲求の対象として捉えている。そのためには、事行の外側に視点を置いて事行の完結アスペクトを捉えるのが自然である。そして、その場合 *de inf.* を選択する。

続いて、*inf.* の事行主体が、文の主動詞の事行主体と異なる場合を見てみよう。

まず、*à inf.* を選択する場合である。

- (23) J'ai autorisé Paul **à partir**.
 (24) J'ai encouragé Paul **à rester**.

(23) は主動詞の事行主体が「Paul が出発する」ことを許可する場面の発話で、(24) は主動詞の事行主体が「その場に残っている」よう Paul を励ます場面での発話である。いずれの場合も、事行対象 (Paul) が inf. の事行の展開を担うことを許可、または励ましている。このように、主動詞の事行対象を inf. の事行の展開と結びつける場合、話し手は inf. の事行の内側に視点を置く。次に、de inf. を選択する場合である。

- (25) J'ai permis à Paul **de partir**.
 (26) J'ai interdit à Paul **de parler**.

(25) は、主動詞の事行主体が「出発すること」を Paul に対して許可する場面の発話である。そして、(26) は主動詞の事行主体が「話すこと」を Paul に対して禁止する場面の発話である。いずれの場合も、inf. の事行を禁止、または許可の対象として見ている。このように、主動詞の事行対象として inf. の事行を捉える場合、話し手は inf. の事行の外側に視点を置いて、その全体像を捉える。

他方、Cadiot (1997) は、主動詞が代名詞 se を伴う場合は、à inf. を選択することが多いことを指摘している。

- (27) décider **de partir** / se décider **à partir** (Cadiot, 1997 : 74)

主動詞が se を伴わない場合、décider de inf. で主動詞の事行主体が partir の実行を決意することを表す。その場合、décider の事行対象として inf. の事行の全体像を捉える。そして、inf. の事行の完結アスペクトを de inf. で示す。一方、主動詞が se を伴う場合、se décider à inf. で「事行主体自身 (se) が partir の展開を担うこと」を決意することを表す。その場合、se を inf. の事行の展開と結びつける。そして、inf. の事行の不完結アスペクトを à inf. で示す。

ただし、代名詞 se を伴う場合でも、à inf. を選択しない場合がある。

(28) Paul se force {à / *de} **travailler**. (ibid. : 75)

(29) Paul s'efforce {*à / de} **travailler**. (ibid.)

(28) では, Paul が **travailler** を行う人物であるよう努めることを **se forcer à travailler** で表している. この場合, 話し手は **travailler** の展開を担う人物として, **travailler** の展開と Paul を結びつける. そして, **à travailler** で **travailler** の不完結アスペクトを示す.

一方, (29) では, Paul が **travailler** に向けた努力を自身に強いていることを **s'efforcer de travailler** で表している. この場合, 話し手は努力の対象として, **travailler** の全体像を捉える. そして, **de travailler** で **travailler** の完結アスペクトを示す.

また, 主動詞で表す事行と à / de inf. で表す事行の時間的前後関係も重要な要素である.

(30) Je commence {à / de } manger un gâteau.

(31) Je continue {à / de } manger un gâteau.

(32) Je finis {*à / de } manger un gâteau.

commencer, **continuer**, **finir** と inf. を用いる場合, **commencer** と **continuer** を à inf. と共に用いることが可能だが, **finir** を à inf. と共に用いることはできない.

(30), (31) の **commencer** と **continuer** は, **manger un gâteau** を展開段階に導く, もしくは継続させることを表す. そして, **commencer** と **continuer** が生起すると, 話し手は事行の内側に視点を移すことになる. その場合, à inf. が容認される¹⁰.

一方, (32) の **finir** は, **manger un gâteau** が生起している段階を抜け出すことを表す. そして, **finir** が生起するということは, 話し手が事行の外側に視点を移すということでもある. そして, その場合, de inf. のみが容認される.

また, Cadiot (1997) は, à inf. について, 次のように指摘している.

(33) À sert à introduire des compléments ayant le statut de descriptions du sujet (en « action »). (Cadiot, 1993 : 95)

¹⁰ また, 開始行為や継続行為の対象として「ケーキを食べること」の全体像を捉える場合もある. その場合, **commencer de inf.** や **continuer de inf.** は容認される.

また、à inf. には「修飾の概念(*la notion de qualification*)」, 「不安定感(*la notion d'instabilité*)」といった特徴が認められるとしている。à inf. で inf. の事行を不完結アスペクトで捉えることが, このような指摘につながるのだろう。そして、de inf. については, 次のように指摘している。

- (34) *l'occurrence de de est liée à un trait sémantico-pragmatique de factivité (ou peut-être de perfectivité), supposé ou alloué à l'événement associé au nom-régime de la préposition.*

(Cadiot, 1997 : 67)

また、de inf. には, 「安定性 (*la notion de stabilité*)」や「既成立・具体性」(*la notion de concrétude d'acquis*)」, 「全体像(*la notion de saisie globale*)」といった特徴が認められるとしている。de inf. で inf. の事行を完結アスペクトで捉えることが, そのような特徴につながるのだろう。

以上の分析と Cadiot の指摘を踏まえ, à inf. と de inf. の選択について次のようなことを主張したい。

- (35) à inf. とは, inf. の事行を不完結アスペクトで捉えることを表す形式である。そして, 主動詞が表す事行が生起することが inf. の事行の展開を意識することに繋がる場合は à inf. を選択する。
- (36) de inf. とは, inf. の事行を完結アスペクトで捉えることを表す形式である。そして, 主動詞が表す事行が生起することが inf. で表す事行の全体像を意識することに繋がる場合は de inf. を選択する。

次節では, われわれの主張が, P を à / de inf. で表す場合の *S commencer P* にも当てはまることを確認する。

2.3.2. *S commencer P (à / de inf.)*

19 世紀の辞書には, *commencer à / de inf.* に関する記述をいくつか認めることができる。例えば, Lafaye (1858) には Cadiot (1997) が引用する次のような記述が見られる。

- (37) On commence *à* faire une action ou une suite d'actions qui n'a pas de terme, qui n'est pas renfermée dans des limites précises, qu'on continuera ou qui se continuera indéfiniment. (Cadiot, 1997 : 81)
- (38) On commence *de* faire une action unique, circonscrite, qui constitue une œuvre fixe, une tâche qui s'achève en plus ou moins de temps, qui a un commencement, un milieu et une fin... (*ibid.*)

このような記述を承けて、Cadiot は *à inf.* と *de inf.* の違いを次のように説明している。

- (39) *A situe l'action dans une série externe, de marque au contraire la clôture de cette même action sur elle-même. (ibid.)*

しかし、Cadiot は *commencer à/de inf.* についてこれ以上言及していない。そこで、以下では、*commencer à inf.* と *commencer de inf.* の発話例を比較して、更に詳細な記述を目指す。

まず、(40), (41)は P を *à inf.* で表す場合の発話例である。

- (40) « Je ne croyais pas revenir si vite ! J'**avais** même **commencé à écrire** un poème. Mais je n'ai pas eu le temps de l'achever !
(*Le Point*, 19/04/2002)
- (41) (=3) (先に到着した仲間が作業をしているのを指さしながら)
Regarde, ils **ont commencé à monter le camp** ; tu n'as pas envie d'y arriver vite pour te sécher et te réchauffer ? »

(40) の P は「詩を書く」という事行である。文の後半で P を中断していることに言及していることから、話し手が P の内側に視点をおいて展開を意識していると考えられる。また、(41) の P は「野営地を設営する」という事行である。発話時に展開中の P の開始に言及する場合、話し手が P の内側に視点をおいて展開を意識するのが自然である。そして、P の内側に視点を置いて開始に言及する場合、S *commencer à inf.* を用いる。

次に、(42), (43) は P を *de inf.* で表す場合の発話例である。

- (42) Je suis né le 21 juin 1952, j'**ai commencé de travailler** en décembre 1969. Je n'ai jamais arrêté de travailler, tous mes trimestres sont validés et cotisés. A quelle date puis-je bénéficier de la retraite anticipée ? (<http://www.notretemps.com/retraite/retraite-anticipée/retraite-anticipée-longue-carrière,i4544/2>)
- (43) (事件の捜査をしている刑事は, Chilton に事件の証拠品となる手紙を見つけたことを告げられ) — Pouvez-vous me le lire sans le manipuler ? » Chilton fit un effort pour se calmer et **commença de lire** : Cher docteur Lecter, Je voulais vous dire à quel point je suis heureux de voir que vous vous intéressez à moi.(...) J'espère que nous pourrions correspondre... » (Harris, T. 1981, *Dragon rouge*)

(42) の P は「働く」という事行である．話し手は，自分の人生の中で働く期間をひとまとまりに捉えている．また，(43) の P は，S が刑事に指示されて行う「手紙を読む」という事行である．この場合，事行の外側に視点を置いて，指示された事行の全体をひとまとまりに捉えるのは自然なことである．このように，話し手が P の外側に視点を置いて開始に言及する場合 S commencer de inf. を用いる．

S commencer de inf. を用いる場合，話し手は事行の外側に視点を置くため，P が内包する段階は意識しない．その場合，話し手は時間の流れを意識して，時間幅を持つ P の開始点を示す．このことは，P が習慣や能力の場合の発話例からも確認することができる．

- (44) (喫煙者同士で，自身が喫煙する習慣を身につけるに至った経緯を語っている) J'**ai commencé {à fumer / ??de fumer}** le mois dernier. En fait, je n'en avais pas vraiment envie, mais je me suis dit soudain que j'allais essayer. (佐々木, 2013a : 274)
- (45) A quel âge un enfant **commence {à parler / *de parler}** ? (<http://forums.futura-sciences.com/sante-medecine-generale/50320-5-a-age-un-enfant-commencer-a-parler.html>)

(44) の P は「たばこを吸う」という S の習慣である．(45) の P は「話す」という S の能力である．そうした P の開始に言及する場合，P が身につ

くまでの段階を意識するのは自然である。しかし、そうした P を身につけてから捨てる（または、失う）までの全体をひとまとまりに捉えるのは不自然である。そして、P の外側に視点を置いて、事行の全体像を捉えるのが不自然な場合は、de inf. が容認されない。

最後に、一般に commencer à inf. と比較すると commencer de inf. は使用頻度が低いとされていることに触れておく¹¹。TLFi は commencer de inf. に関して「話し言葉で用いることはない¹²」と指摘している。これまで見てきたように、de inf. を用いるのは話し手が P の外側に視点を置いて全体像を捉える場合である。たとえば、発話時に P が展開中であれば、P を内側から捉えるのが自然である。また、これから P が起こる場面では、P がどのように展開していくかを意識するのが自然である。しかし、話し言葉で de inf. を用いない理由を明らかにするには更なる調査が必要である。

以上の分析から、à inf. と de inf. の使い分けに関するわれわれの主張は commencer à/de inf. にも当てはまると言える。まず、P の展開を意識する場合、話し手は P の不完結アスペクトを捉える。そして、その場合、S commencer à inf. を用いる。一方、commencer の事行対象として P の全体像を捉える場合、話し手は P の完結アスペクトを捉える。そして、その場合、S commencer de inf. を用いる。

次節では、S commencer à inf. で表す P の開始アスペクトがどのようなものかを明らかにする。

2.4. S commencer à inf

P を à inf. で表す commencer à inf. を用いる発話例には (46)-(48) がある。

(46) (=1) (ある事件の捜査担当になった刑事が) – Passez me prendre demain matin pour qu'on **commence à enquêter** sur cette affaire, dit Regina.

(47) (=2) Ce jour-là, assis par terre et avec une chaise pour bureau, entouré des animaux de notre cour, j'**ai commencé à écrire**

¹¹ コーパス検索の結果、à inf. が 42635 回用いられているのに対して、de inf. は 687 回用いられていた。

¹² Dans l'emploi fam. (*supra* H. Bazin et Simenon) on ne rencontre jamais de.
(*Trésor de la langue française informatisée*)

un nouveau livre qui raconte le quotidien de notre vie. Je
l'ai écrit en russe, pour qu'il puisse être publié à l'étranger.

- (48) Il était 6 heures du matin et j'ai remarqué que les oiseaux ne
chantaient pas. A 6 h 25, notre lit **a commencé à bouger** et tout
s'est mis à trembler. J'ai tout de suite pensé à un raz de marée, j'ai
réveillé mon mari. Puis ça s'est arrêté de bouger et nous sommes
allés à la salle à manger. (*Le Monde*, 2004/12/29 : 3)

(46) は、ある事件の捜査担当になった刑事の発言である。P はこれから起こる「捜査する」という事行である。そのような P についてどのように展開していくかを意識するのは自然なことであり、話し手は P の開始段階に S commencer à inf. で言及する。

(47) は、本を執筆した話し手 (S) の発言である。P は「本を書く」という事行である。話し手は「本の完成」までの展開を意識して、P に開始段階が訪れることを S commencer à inf. で表している。一方、(48) は地震に遭った話し手 (S) の発言である。話し手は、時間の流れに沿って、地震があった朝の様子を説明している。P は「(ベッドが) 動く」という事行である。話し手は時間の中での P の展開を意識して、P に開始段階が訪れることを S commencer à inf. で言及している。

また、習慣や能力を身につけることを S commencer à inf. で表す場合を見る。そのような場合の発話例には(49)-(51) がある。

- (49) (=44) (喫煙者同士で、自身が喫煙する習慣を身につけるに至った経緯を語っている) **J'ai commencé à fumer** le mois dernier.
En fait, je n'en avais pas vraiment envie, mais je me suis
dit soudain que j'allais essayer.

- (50) (=45) A quel âge un enfant **commence à parler** ?

- (51) Par contre étant donné qu'il soit[sic.] de matière lourde et fragile,
il devient dangereux en cas de chute, c'est pourquoi dès que le bébé
commence à boire seul au biberon, il est préférable d'opter
pour le biberon en plastique.

(http://www.enseignons.be/upload/secontaire/puericulture/150407084746Le-choix-du-biberon_matiere-professeur.doc)

(49) の P は喫煙習慣で、(50), (51) の P は能力である。いずれの場合も、話し手は日常的に繰り返される P を時間幅を持って展開する事行として意識することができる。そして、その場合習慣や能力を身につける段階は P の開始段階に他ならない。

さらに、発話時に展開中の P の開始段階に言及するために S commencer à inf. を用いる場合もある。そのような場合の発話例には(52), (53) がある。

- (52) (=3) (先に到着した仲間が作業をしているのを指さしながら)
Regarde, ils **ont commencé à monter le camp** ; tu n'as pas envie d'y arriver vite pour te sécher et te réchauffer ? »

- (53) Cette semaine, j'**ai commencé à repeindre** mon studio.
(Rohmer, É., 1984, *Les nuits de la pleine lune*)

(52) の P は発話時に展開中の「野営地を設営する」という事行である。話し手は、P の展開していることを意識していて、発話時に P の開始段階は完了状態にある。また、(53) の P は「ワンルームマンションの壁を塗り直す」という事行である。話し手は、展開している P の開始段階が訪れたのは今週で、発話時に P の開始段階は完了状態にある。通常、発話時に展開中の P の開始段階に言及する場合、(52) や (53) のように複合過去形で S commencer à inf. を用いる。

また、P の展開が開始段階にあることを S commencer à inf. で表す場合がある。(54)-(55) はその場合の発話例である。

- (54) « Il y a encore de nombreuses séquelles de l'après-indépendance, dont le socialisme et l'arabisation. Mais l'Algérie **commence à bouger**. Dans ce pays, tout est à faire. Dans cinq ans, vous ne reconnaîtrez plus rien... » (*Le Point*, 2002/10/11 : 59)
- (55) (Julien が炉に火をくべたところに、Maurice が挨拶にやってきた場面で) — Salut, petite tête, dit-il, tu as déjà allumé le four ?
— Oui, tu vois, ça **commence à ronfler**.
(Clavel, B., 1962, *La grande patience, tome 1 ; la maison des autres*)

(54) では戦争が終わったあとのアルジェリア (S) を話題にしている。P は「(再興に向けて) 動く」という事行である。発話時に国は荒れ果てていて、復興に向けた動きは本格化していない。また、(55) では炉 (S) が点火してあるかを話題にしている。P は「うなるような音を立てる」という事行である。発話時で S は音を立てている。しかし、Maurice が点火作業が済んでいるかを確認していることから、まだ本来の大きな音を立てていないと考えられる。いずれの P も、電源は入っているが起動中でまだ使うことができないパソコンのような段階にある。そして、P が本格的に展開する段階に入る前の開始段階にあることを表す場合は、S commencer à inf. を現在形で用いる。

また、過去のある時期に P が開始段階にあったことを S commencer à inf. で表す場合もある。

(56) En décembre 1983, Albert King se rendit dans une petite station de télévision de Toronto afin d'y enregistrer un concert en compagnie d'un jeune guitariste dont on **commençait à parler** : Stevie Ray Vaughan. (*Le Point*, 1999/12/17 : 201)

(56) では、1983 年にアルバート・キングの収録があった時に居合わせた若いギタリスト (S) を話題にしている。P は「話題にする」という事行である。アルバート・キングの収録があった時、S は話題の人物というほどのものではなかった。そして、過去のある時期に P が開始段階にあったことを表す場合は、S commencer à inf. を半過去形で用いる。

以上の分析を踏まえると、S commencer à inf. で示す開始アスペクトは次のように示すことができる。

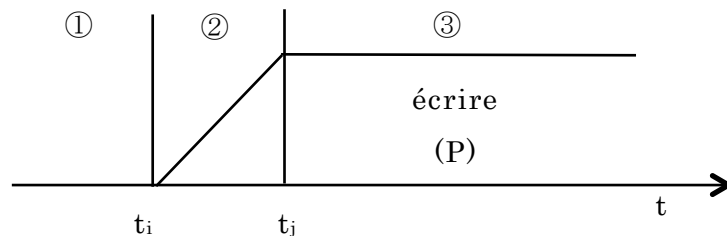


図 4 : je commence à écrire

時間の流れを t , *écrire* (P) の開始前のアスペクトを①, P に内在する開始アスペクトを②, それ以降のアスペクトを③とする. さらに, P の開始点を t_i とし, ②と③の境を便宜上 t_j と呼ぶことにする. 話し手が P の内側に視点を置いて P の展開を意識すると, P に内在する①～③のアスペクトを意識することができるようになる. そして, それらのアスペクトの内, 開始アスペクトを示す場合に *S commencer à inf.* を用いるのである.

2.5. この章のまとめ

本章では, *commencer* の基本的なはたらきや, *S commencer à inf.* と *S commencer de inf.* の差異の考察を通して, *S commencer à inf.* で表す P の開始アスペクトがどのようなものを明らかにした.

まず, 2.1. では, *commencer* の主な構文を観察した. そして, *S commencer P* という構文には P を名詞句で表す場合と, 不定詞句 (*à / de inf.*) で表す場合があることを見た. 2.2. で P を名詞句で表す場合の *S commencer P* を分析した. その結果, 話し手は P の展開を意識して *S commencer P* で P の開始に言及することが分かった. 2.3. で P を不定詞句で表す場合の *S commencer P* を分析した. そして, P を不定詞句で表す場合, *inf.* の事行の不完結アスペクトを捉える場合は *à inf.* を選択し, *inf.* の事行の完結アスペクトを捉える場合は *de inf.* を選択することを明らかにした.

最後に 2.4. で, *S commencer à inf.* を用いる場合に話し手がどのように P の開始を捉えるかを分析した. *S commencer à inf.* を用いる場合, 話し手は P の内側に視点を置き P に内在するアスペクトの内, 開始アスペクトを示すのである.

第3章 se mettre à inf. で表す主体の移行と事行の開始

mettre が表す事行の主体を S, 対象を O とする. そして, O の新しいありかた¹³を Z とする. フランス語では, S が O を Z に移すことを mettre を用いて表すことがある.

- (1) Voulez-vous **mettre du sucre dans votre café**? (佐々木, 2012 : 97)
- (2) Il ne faut jamais **mettre son chat en colère**. (*ibid.*)
- (3) Louisette descend et tend son maillot mouillé à Henri. Il **le met à sécher** devant le feu. (Rohmer, E., 1983, *Pauline à la plage*)

Z を (1) や (2) のように位置や状態を表す名詞句で表す場合もあれば, (3) のように不定詞句で表す場合もある.

また, O が S と同一の場合は, 代名詞 se で表す.

- (4) A la quatorzième minute, une averse telle tomba sur le terrain que la plupart des joueurs coururent **se mettre à l'abri**.
(Goscinnny, R., 1963, *Les récrés du Petit Nicolas*)
- (5) Je voudrais rentrer en ville avant le coucher du soleil, et dormir un peu avant de **me mettre au travail**, dis-je.
(Murakami, H., 1992, *La Fin des temps*)
- (6) – Ce que je vais faire ? Eh bien, c'est pas compliqué : je **me mettrai à travailler** et serai toujours honnête.
(Charrière, H., 1969, *Papillon*)

本章の目的は, se mettre à inf. が開始アスペクトマーカ―として働く仕組みを明らかにすることである. そのために, 3.1. で mettre が, S が O を Z に移すことを表すために用いる動詞であることを述べる. そして, 3.2. で se mettre à inf. が開始アスペクトマーカ―として働く仕組みを明らかにする.

¹³ O のありかたとは, O がどのように存在していると意識されているかを表すものである. 空間領域であれば O のありかたは O の位置であり, 時間領域であれば O のありかたは O が属す時期である. そして, 観念領域であれば O のありかたは O の状態である.

3.1. mettre のはたらき

一般に, *mettre* の基本義は空間領域における *O* の移動であるとされている¹⁴. そこで, 3.1.1. で *O* の空間領域でのありかたに言及する場合の *mettre* を分析する. 次に 3.1.2. で *O* の観念領域でのありかたに言及する場合の *mettre* を分析する.

3.1.1. 空間的な *Z*

空間領域での *O* は, 物のことも生物のこともある. また, *S* と同一のこともある. 以下では, それぞれの場合を順に扱う.

まず, *O* が物の場合である. *O* が物の場合の発話例には, (7)-(9) がある.

- (7) (Jayne は, 混乱して拳銃を構えている話し手をなだめようとしている) Elle s'est éloignée de moi, est entrée dans le bureau, **a mis le pistolet au coffre** et l'a refermé.

(Easton, E. B., 2010, *Lunar Park*)

- (8) " Tu **as mis des bougies sur la table** ? Richard eut un petit rire embarrassé.

– Tu trouves que ça fait trop romantique ?

(Hamilton, L.K, 2003, *Anita Blake, tome 4 ; Lunatic Café*)

- (9) Quelle est la meilleure façon de garder un homme au lit ? **Mettre la télévision dans la chambre à coucher.**

(<http://www.humour.com/blagues/quelle-est-la-meilleure-facon-de-garder-un-homme-au.htm>)

空間領域では, *Z* は *O* の位置である. そして, (7), (8), (9) ではそれぞれ「金庫内」, 「テーブル上」, 「寝室内」である. いずれの場合も, *S* がきっかけとなって, それまで *Z* になかった *O* を *Z* にあるようにすることを *mettre* で表している¹⁵.

そして, *mettre* には, *poser* や *placer* といった動詞とは異なる特徴がある.

- (10) J'ai {**mis / placé / posé**} **le sucre** sur la table. (小熊, 2009 : 13)

¹⁴ Saunier (1996) は, コーパスを分析した結果, *O* の空間移動を表すために *mettre* を用いる発話例が 33,8% で最も多いとしている.

¹⁵ 話し手の関心は *Z* に *O* が存在することである. そのため, *de* などの前置詞を用いて *O* の元の位置を表すことはできない.

- (11) J'ai {*mis* / **placé* / **posé*} *du sucre* dans mon café. (*ibid.*)
- (12) Pour répondre au téléphone, Claude *a posé le bouquet sur le guéridon*. (Saunier, 1999 : 267)
- (13) Pour répondre au téléphone, Claude *a mis le bouquet sur le guéridon*. (*ibid.*)

(10) のように砂糖をテーブルの上に移しても形状が変わることはない。砂糖の形状に変化がない場合, *mettre*, *poser* そして *placer* のいずれも容認できる。しかし, (11) のように, 砂糖をコーヒーに入れることで形状が変化する場合は, *poser* や *placer* は容認されない。しかし, そのような場合でも, 砂糖 (O) がコーヒーの中 (Z) にあれば *mettre* は容認される。

また, (12), (13) は, Claude (S) が花束 (O) を小さな円卓 (Z) に置くことを *poser* または *mettre* で表している。手元にある花束 (O) を小さな円卓 (Z) に移すことを表す場合は *poser* を用いる。一方, 小さな円卓の上 (Z) にない花束 (O) を Z にあるようにすることを表す場合は *mettre* を用いる。

このように, 話し手の関心は O が Z にあるか否かにある。そのため, 話し手が Z を意識しない場合, *mettre* は容認されない。

- (14) *Pose ton sac* ! (Saunier, 1999 : 263)
- (15) ?? *Mets ton sac* ! (*ibid.*)

(14), (15) は, 話し手が聞き手 (S) に鞆 (O) を手放すよう促す場面での発話である。そして, 鞆が手元を離れればよく Z を意識しない場合, *poser* は容認されるが *mettre* は容認されない^{16 17}。

また, O が本来の価値を発揮する場所が決まっている場合がある。

- (16) J'ai *mis* {*le chapeau* / *la montre*}. (佐々木, 2012 : 98)

¹⁶ また, あらかじめ鞆を置く場所 (Z) が定められている場合は, *mettre* の容認度は下がらない。その場合, 鞆を手放すことではなく, Z にない鞆を Z にあるようにすることを表す。

¹⁷ また, 話し手は, O のありかたを意識していれば, Z がどこであることを把握できている必要はない。

(i) Je ne trouve pas mon stylo, je *l'ai* pourtant *mis quelque part*. (染谷, 2005 : 319)
O の話し手 (S) は, ペン (O) をどこに置いた場所を忘れてしまっている。このような場合でも, Z を新しい位置として意識していれば, O が Z にあるようにすることを *mettre* で表すことができる。

(17) ? *J'ai mis {le chapeau sur la tête / la montre au bras}*.

(*ibid.* : 99)

(16) の O は、帽子や腕時計である．帽子は頭の上，腕時計は腕に装着することで本来の価値を発揮する．その場合，(17) のように装着する場所を Z として添えると逆に不自然な発話になる．

そして，Z が自明でも *mettre* が容認されないことがある．

(18) * *J'ai mis mon sac à main.* (*ibid.*)

(19) * *J'ai mis un parapluie.* (*ibid.*)

ハンドバッグや傘は S が持ち続けなければならない．そして，Z が自明でも O が Z にあり続けるために S が関与し続ける必要がある場合，*mettre* は容認されない．

続いて，O が生物の場合を扱う．該当する発話例には (20), (21) などがある．

(20) Puis, sans rien dire, elle *mit le chat dehors* et ferma la porte d'accès au poste de pilotage.

(Werber, B., 2008, *Le papillon des étoiles*)

(21) Moi, toujours, complètement saoule dans son appartement. Lui, protecteur, *me mettant au lit*, veillant sur moi pendant des heures après que je me fus endormie.

(Mead, R., 2009, *Succubus, tome 1 ; Succubus Blues*)

(20) では，彼女 (S) が猫 (O) を持ち上げるなどして外 (Z) に出すことを *mettre* で表している．(21) では，泥酔して一人で歩けない話し手 (O) を，背負うなどしてベッドまで運ぶことを *mettre* で表している．O が生物の場合，O は自ら別の場所に移ることができる．しかし，(20), (21) の S は，物を移すようにして，O が Z にいることを実現している．このように S が O の居場所を制御するのが自然な場合でなければ *mettre* の容認度が下がる．このことがよく分かる発話例として，O が聞き手の(22), (23) を見てみよう．

(22) (言うことを聞かない子供に) *Ecoute, si tu continues comme ça, je vais **te mettre dehors**!* (佐々木 : 99)

(23) (父親を煙たく思っている娘が) ?? *Papa, si tu continues, je vais **te mettre dehors**!* (*ibid.* : 100)

通常、親の決定が子供の居場所を変えることはあっても、その逆は考えづらい。そのため、mettre は (22) のように S が親で O が子の場合には容認されるが、(23) のように S が子で O が親の場合には容認されない¹⁸。

最後に、O が S と同一の場合である。その場合、(24)-(26) のように O を se で表す。

(24) (=4) *A la quatorzième minute, une averse telle tomba sur le terrain que la plupart des joueurs coururent **se mettre à l'abri**.*

(25) *Une heure plus tard, tandis que Bond était dans le couloir, Bruno vint soudain **se mettre à côté de lui**.*

(Fleming, I., 1958, *Bons baisers de Russie*)

(26) (Léa は食堂で座る場所を探している)

Léa: Je peux **me mettre ici**?

Blanche: Ah, mais bien sûr! (Rohmer, E., 1987, *L'ami de mon amie*)

(24)-(26) で、aller などの移動動詞を用いると、S がある場所から別の場所に移ることを表す発話となる。一方、mettre を用いると、雨宿りできる場所 ((24)), Bond の隣 ((25)), またはここ ((26)) に、S (O) がいるようになることを表す発話となる。

以上、空間領域での移行を表す mettre を分析した。話し手は O のありかたを意識して、はじめ Z にない O を Z に移すことを mettre で表す。そのため、O が元の場所を離れることに話し手の意識が向いている場合、mettre は容認されない。また、O が Z にあり続けるために S が関与し続ける必要がある場合、mettre は容認されない。そして、O が生物で S と異なる場合は、S

¹⁸ ただし、親 (O) が自力で移ることが難しく、子が親のありかたを決定する立場を決定する立場にある状況も考えられる。その場合、S の決定が O を Z に移すのは自然で、mettre が容認される。

が O の居場所を制御するのが自然な場合でなければ *mettre* の容認度は低い。

3.1.2. 観念的な Z

観念領域では、Z を名詞句で表す場合と不定詞句で表す場合がある。まず、3.1.2.1. で Z を名詞句で表す場合を扱い、3.1.2.2. で Z を不定詞句で表す場合を扱う。

3.1.2.1. Z = 名詞句

空間領域での O の位置によっては、O に備わっている価値が変化することがある。そのような場合の発話例には、(27)-(30) がある。

- (27) Autour de moi, des gens se passionnaient pour leur petit déjeuner, mettaient du sucre dans leur café, du beurre sur leurs toasts, maniaient couteaux et fourchettes pour découper leurs œufs au bacon. (Murakami, H., 1995, *Danse, danse, danse*)
- (28) Il refuse de ***mettre ses filles à l'école***, préférant faire venir une maîtresse dans les caravanes. (*Le Monde*, 2004/12/25)
- (29) (話し手は住んでいる家が広すぎるので手放そうとしている) Je vais la vendre, chercher un endroit plus petit, ***mettre le bébé dans une garderie*** l'année prochaine. Il y en a une formidable en ville. (Higgins., M.C., 1991, *Recherche jeune femme aimant danser*)
- (30) (話し手は、違法行為を取り締まる立場にある父親が、実は隠れて悪事を働いていることを告白している) S'il devait faire une perquisition dans sa propre maison, il serait obligé de ***se mettre lui-même en prison***. (Rowling, J. K., 1999, *Harry Potter, tome 2 ; Harry Potter et chambre des secrets*)

(27) では、コーヒーの中に砂糖を入れることやトーストの上にバターを塗ることを *mettre* で表している。コーヒーの中 (Z) での砂糖 (O) は、「甘みを与える存在」であり、トーストの上 (Z) でのバター (O) は「風味を与える存在」である。また、(28), (29) の O は「娘たち」と「幼児」で、Z は「学校」, 「保育園」である。学校での娘たちのありかたは「児童」で、保育園にいる幼児の

ありかたは、「保育園児」である。(30)のOは、話し手の父親(S)で、Zは「刑務所」である。刑務所での父親のありかたは「囚人」である。いずれの場合も、ZはOのありかたを意識させる場所であると言える。

そして、空間移動を伴わなくても、SがOを新しい状態(Z)にすることを *mettre* で表すことがある。そのような場合の発話例には、(31)-(32)がある。

- (31) A quatre mois du passage à l'an 2000, les professionnels de la finance commencent à prendre leurs précautions. Non qu'ils croient à un risque de crise systémique : les banques, les institutions et la majorité des entreprises *ont* déjà *mis leurs ordinateurs à jour*, de telle sorte qu'ils ne confondent pas l'année 2000 avec l'année 1900. (*Le Monde*, 1999/09/08 : 18)
- (32) Vous tapez votre texte et si par exemple vous voulez *mettre le titre en gras* il vous suffit de sélectionner le titre et de cliquer sur le bouton (...) (<http://www.actilog.fr/content/view/7/2/>)
- (33) (パソコンがハッキングされて)(...) il est avéré que le mot de passe permettant de *mettre l'ordinateur en fonction* a été "cassé" pendant le week-end concerné. (*Le Monde*, 1997/04/26 : 11)

Zは(31)ではパソコンの「最新状態」、(32)ではタイトル文字の「太い状態」、(33)ではパソコンの「作動状態」である。

また、Oが備えている本来の価値を発揮させることを *mettre* で表す場合、Zを添えると容認度が下がる。

- (34) *J'ai mis {la télévision / la clim}*. (佐々木 : 103)
- (35) ?? *J'ai mis {la télévision / la clim} en marche*. (*ibid.*)

(34)のOは、テレビやエアコンである。テレビやエアコンの本来のありかた(Z)は、家電製品としての用途を果たす状態である。そして、家電製品としてのありかたが自明の場合、Zを添えると容認度が下がる。ただし、Oに備わっている本来の価値が自明でも、Sの関与がなければOが用途を果たさない場合、*mettre* は容認されない。

(36) ?? *J'ai mis {l'ordinateur / l'aspirateur}*.(ibid.)

(37) *J'ai mis {l'ordinateur / l'aspirateur} en marche.* (ibid.)

テレビやエアコンは、起動させればその用途を果たす。一方、パソコンや掃除機は、起動させるだけでなく、S が関与し続けなければその用途を果たさない。ただし、そのような機器でも、(37) のように Z を添えて、S の関与を必要としない「作動状態」(Z) に移すことに言及するのであれば *mettre* は容認される。

他方、Saunier (1999) は、本来結びつかない O と Z が結びつくことを *mettre* で表すとしている。そのため、「観念的に近い関係」にあるリンゴとコンポートのような O と Z を話題にする場合は、*mettre* の容認度が低いと指摘する。たしかに、聞き手にコンポートを作るよう促す (38) の場面では、*mettre* の容認度が下がる。

(38) ?? *Mets les pommes en compote !*

しかし、容認度が低いのは、Saunier が述べる理由によるのではない¹⁹。一般に、O を材料にして Z を作り出すことを表す場面では、O のありかたを意識しない。そして、その場合 *mettre* は容認されない。しかし、リンゴとコンポートが O と Z でも *mettre* が容認される場合がある。

(39) Faire cuire doucement les morceaux de pommes dans la casserole en remuant de temps en temps. Lorsque les morceaux sont cuits, *les mettre en compote* avec une fourchette.

(<https://www.potagercity.fr/recettes/mini-tartelettes-aux-pommes-148>)

(39) では、O をコンポート状にすることを表している。話し手はリンゴ (O) のありかたを意識して、O がコンポート状というありかた (Z) に移ることを

¹⁹ Saunier は、O が *dos* で Z が *compote* の場合には容認度が下がらないことを紹介した上で次のように説明している (Saunier は、*mettre* の事行対象を Y としている) : (...) pour que *mettre* apparaisse, il faut que Y n'ait pas vocation à être repéré par Z. Le seul rapport entre *dos* et *compote* est d'ordre circonstanciel, par différence avec *pomme* et *compote* qui sont en rapport sur le plan notionnel. (Saunier, 1999 : 269)

表している。そして、その場合 *mettre* は容認される。

次に O が生物の場合である。O が生物の場合に *mettre* を用いる発話には、(40)-(44) がある。

- (40) La pauvre enfant, on l'a mise malgré elle dans une situation compliquée, difficile !
– Vous voulez dire que c'est moi qui ***l'ai mise dans cette situation***, monsieur Nonomiya ?
(Maruya, S., 1991, *Rébellions solitaires*)
- (41) (...) François Hollande n'a cessé d'essuyer les attaques depuis sa désignation comme candidat du PS à l'élection présidentielle. Pourtant, chaque nouvelle pique semble ***le mettre en joie***.
(<http://www.lefigaro.fr/politique/2012/01/30/01002-20120130ARTFIG00683-hollande-renvoie-a-la-droite-son-proces-en-arrogance.php>)
- (42) Je me rappelle ton père au même âge. Pendant deux semaines, il s'est battu chaque jour. Et une fois, il ***a mis son père dans une telle colère*** qu'il a dû se réfugier en haut d'un arbre...
(Buckley, M., 2007, *Les Soeurs Grimm, tome 2 ; Drôles de suspects*)
- (43) Remarquez, l'officier me l'a rendue ma montre. (...). Après, ils ***nous ont mis au travail***, et pardon, pas de la moitié de travail, dix, douze et quatorze heures par jour, et puis pour la nourriture... je vous jure, c'était pire que chez les Frisés.
(Ikor, R., 1966, *Les eaux mêlées*)
- (44) Mes parents ***m'ont mis au sport*** pour que je m'endurcisse et que je devienne un homme ! (*Le Monde*, 2003/12/26)

(40)-(42) の Z は O の社会的立場や心理的状态である。(40) の話し手は、S が彼女(O) を「難しい状況」(Z) に追いやることを *mettre* で表している。(41), (42) の S はそれぞれの O を「喜んでいる状態」(Z) と「怒っている状態」(Z) に移している。

一方、(43), (44) の Z は O の行為状态である。この場合、O が最低限の主体性を持って行為に取りかからなければ Z への移行は起こらない。そのため、

機械にスイッチをいれるのと同じようにして生物 (O) を Z に移すことを表す *mettre* を用いる。実際、(43) の士官 (S) は話し手 (O) に長時間労働を強いている。そして、(44) の両親は話し手 (O) にスポーツをさせている。

次に、O が S と同一の場合である。そのような場合の発話例には、(45)-(49) がある。

- (45) (...) je n'aurais jamais cru que je raconterais un jour cette histoire. Ma femme m'avait dit de ne pas le faire ; que personne ne me croirait, et que je ne ferais que **me mettre dans une situation fausse**. (King, S., 2010, *Juste avant le crépuscule*)
- (46) « **Mettez-vous en rang** que je vous compte, en colonnes par 5, allons, alignez-vous, cela fait 28, en principe vous êtes 31, il en manque 3. (Anouilh, J., 1948, *Ardèle ou la Marguerite*)
- (47) (=5) Je voudrais rentrer en ville avant le coucher du soleil, et dormir un peu avant de **me mettre au travail**, dis-je.
- (48) Pour eux, les problèmes d'autonomisation, de socialisation, sont réglés. Ils sont prêts à **se mettre**, le cas échéant, **à la recherche d'un emploi**. (*Le Monde*, 1998/03/25)
- (49) A toutes fins utiles, il **s'est** déjà **mis à la rédaction d'un livre**, prévu pour la rentrée. (*Le Monde*, 1999/07/31)

(45), (46) は Z が社会的立場や体勢の場合である。(45) の Z は「誤解されている状態」である。話し手 (S) は、日頃から自分の体験談を他人に話さないように注意されている。そして、過去の体験を話すことで、S (O) が Z に移ることを *se mettre* で表している。(46) の Z は「整列状態」である。そして、生徒たち (S) が列を作ることで、S (O) が Z に移ることを *se mettre* で表している。

また、(47)-(49) は、Z が行為状態の場合である。(47) の Z は「工作中」というありかたである。そして、仕事に取りかかることで、S (O) が Z に移ることを *mettre* で表している。また、(48) の Z は「就職活動中」というありかたで、(49) の Z は「執筆中」というありかたである。そして、それぞれの S が Z に取りかかると、S (O) は Z に移る。

3.1.2.2. Z = 不定詞句

話し手は「事行が展開中²⁰」というありかたを問題にする場合がある。その場合の Z は inf. が表す事行であるといえる。以下では、第 5 章で commencer à inf. と se mettre à inf. を比較する際の便宜を考え、S mettre O Z の Z を不定詞句で表す場合については、S mettre O P と表記する。

まず、(50)-(52) は、S mettre O P の O が物の場合の発話例である。

- (50) (=3) Louissette descend et tend son maillot mouillé à Henri. Il **le met à sécher** devant le feu.
- (51) Sans désespérer, Josette **mettait de l'eau à chauffer**, et lavait au savon noir le carrelage de la boutique.
- (Dutourd, J., 1952, *Au Bon Beurre*)
- (52) Adrien sortit de sa besace un lapin et ils **le mirent à rôtir** sur une broche improvisée. (Werber, B., 2006, *Le papillon des étoiles*)

(50) の Henri (S) は Louissette のシャツ (O) を火の前に干す。そして、火の前に干した後、シャツは乾いていく。話し手は、シャツ (O) が「乾く」という事行が展開中というありかた（以下、「乾く」というありかた）(P) に移ることを mettre で表している。そして、(51) の Josette (S) が鍋を火にかけるなどすると、水 (O) は温まっていく。また、(52) の Adrien (S) がウサギ (O) を道具にかけることでウサギが焼けていく。そして、それぞれの O が「温まる」というありかた (P)、または「焼ける」というありかた (P) に移ることを mettre で表している。

また、小熊 (2009) は S の関与度が低い (53) の動詞句に比べて、S の関与度が高い (54) の動詞句は容認度が低いと指摘している。

- (53) mettre le linge à tremper, mettre la viande à rôtir, mettre les pommes de terre à mijoter (小熊, 2009 : 22)
- (54) ?mettre la viande à griller, ?mettre les pommes de terre à sauter

²⁰ 大鹿 (1982) は、動詞を用いて主体のありかたを表す場合の例として「太郎が絵をかいている」と「電車が走っている」を挙げている。この場合、「かく」と「はしる」で「私たちの意識における「太郎」の、「電車」のあり方を言っている」とし、「太郎が（電車が）そのようにある」「太郎が（電車が）ある動きの過程中的のものとしてある」ことを表していると説明している。

(*ibid.*)

3.1.1. で指摘したように、O が P に移った後も S が関与し続ける必要がある場合は、mettre は容認されない。そして、mettre が容認される (53) の O は、Z に移った後、S が関与しなくても P にあり続ける。一方、mettre が容認されない (54) の O は、P に移った後も、S が関与し続ける必要がある。このように、新しいありかたを à inf. で表す場合も、S の関与なしに O が P にあり続けるのが難しい場合は mettre は容認されない。

また、O が生物の場合は S mettre O P は容認されにくい。

- (55) *Claude **met Camille {à faire la cuisine / à laver la vaisselle}**. (Saunier, 1999 : 259)

O が物の場合、S がきっかけを与えれば inf. の事行が生起して、O は P に移る。一方、O が生物の場合、O が最低限の主体性を持って事行を生起させなければ O は P に移らない。そのため、O が生物の場合は、mettre の容認度が下がる。

ただし、*Le Grand Robert 2011* にもあるように、O が人でも mettre を用いる場合がある。

- (56) Quand les enfants sont trop jeunes, souvent allaités par sa mère, on **les met à dormir dans la brouette** ou si l'environnement le permet, à même le champ, sur une couverture.

(Quinquis, J., 2007, *Finistère 1900-1925*)

(56) の乳児 (O) が「(手押し車の中で) 寝る」ことを親 (S) が決めている。そして、親がそのような決定をすれば、O の意志とは関係なく O は P に移ることになる。

そして、O が S と同一の場合、se mettre à inf. を用いる。

- (57) (=6) – Ce que je vais faire ? Eh bien, c'est pas compliqué : je **me mettrai à travailler** et serai toujours honnête.

(58) Elle **se mit à marcher plus vite**, c'était ce moment où, dans les films, on cadre sur l'héroïne.

(Foenkinos, D., 2004, *Le potentiel érotique de ma femme*)

(59) Ernest, en voulant parler de lui, **se mit à bégayer**. (*ibid.*)

(57) の P は「働く」というありかたである．そして、「働く」という事行に取りかかると，S (O) は P に移る．また，(58), (59) の P は，それぞれ「より早く歩く」，「口ごもる」というありかたである．いずれの場合も，S が inf. の事行に取りかかるなどして，S (O) が P に移ることを *se mettre à inf.* で表している．

3.1.3. まとめ

本節では，*mettre* のはたらきを検討した．

mettre は，S が O を Z に移すことを表すために用いる動詞である．発話の主眼は，はじめ Z にない O を Z にあるようにすることを述べる点にある．そのため，Z を意識するのが不自然な場合，*mettre* は容認されない．

je mets du sucre dans le café を例にとると，時間の流れに沿った O のありかたの推移は図 1 のように示される．

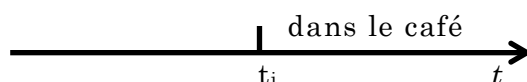


図 1 : Je mets du sucre dans le café

時間の流れを t ，*mettre* の事行が起こる時点を t_i とする．Z はコーヒーの中である． t_i 以前の段階では，Z に O はない．そして， t_i で S が砂糖 (O) をコーヒー (Z) に入れると， t_i 以降は S が関与しなくても O は Z にあり続けるようになる．

また，Z は空間領域では O の位置であり，観念領域では O の状態である．そして，Z が「事行が展開中」のこともあり，そのような Z は *à inf.* で表す．

3.2. 開始アスペクトマーカ－ *se mettre à inf.*

本節では，O の P への移行を表す *se mettre à inf.* が開始アスペクトマー

カーとして機能し得る要因を検討し、どのような開始アスペクトを示すかを明らかにする。

3.2.1. で Franckel が容認度が下がるとしている現在形の *se mettre à inf.* と否定形の *se mettre à inf.* の実例を分析する。そして、いずれの場合も O の P への移行に言及する場合は *se mettre à inf.* が容認されることを示す。3.2.2. で *se mettre à inf.* を用いる場合に生じるとされる表現効果が O の P への移行に言及することに起因していることを指摘する。そして、3.2.3. で *se mettre à inf.* で O の P への移行を表すことが P の開始アスペクトマーカーとして働くことに繋がることを明らかにする。

3.2.1. *se mettre à inf.* と移行

本節では、3.2.1.1. で *se mettre à inf.* を現在形で用いる場合の発話例を分析し、3.2.1.2. で *se mettre à inf.* を否定形で用いる場合の発話例を分析する。

3.2.1.1. 現在形の *se mettre à inf.*

現在形の *se mettre à inf.* を用いる主な場合として、次の三つが考えられる：

- ・ O の P への移行がこれから起こる場合；
- ・ O の P への移行に話し手が立ち会っている場合；
- ・ O の P への移行が繰り返し起こる場合。

このほかにも、Franckel が指摘する *si* や *quand* などをもとなう場合や、小説の地の文や映画のシナリオのト書きの場合をあげることができる。

まず、O の移行がこれから起こる場合である。

Franckel は、主語が一人称で、*inf.* の事行が発話行為の場で生起する場面では、事行主体の予測・意図とは無関係に時間の中で事行が出現する場合に *se mettre à inf.* を用いるとしている。しかし、事行主体が意図的に事行を生起させる場合でも (60) のように *se mettre à inf.* が容認される場合がある。

(60) J'ai lancé ma blague, ça m'a fait du bien. Et maintenant, je **me mets à étudier sérieusement**. (佐々木, 2014a : 17)

(60) の先行文脈で、話し手 (S=O) が「ジョークを言う」という別のありかたにあったことに言及している。さらに、*et maintenant* によって、S (O) がそれまでとは異なるありかたに移ることを示唆している。このように、S (O) が

新しいありかた (P) に移ることに話し手の意識が向かうのが自然な場面では、これから O の P への移行が起こることを *se mettre à inf.* で表すことができる。

また、Franckel が指摘するように *se mettre à inf.* は、*inf.* の事行が生起する場が発話行為の場から隔たっていれば容認されるわけではない。そのことを裏付けるのが (61) である。

(61) Je viens de l'acheter le livre du Dr.Dukan. Je {*commence* / ?*me mets*} *à le lire ce soir.* (*ibid.* : 19)

(61) の P は「読む」というありかたである。通常、本を購入した直後の場面では、S (O) のありかたよりも、「読む」という事行の開始に話し手の意識が向かうのが自然である。そして、その場合 *se mettre à inf.* の容認度が下がる。しかし、似たような場面でも、(61') のように話し手が O のありかたに言及する姿勢であれば容認度は下がらない。

(61') Je viens de l'acheter le livre du Dr. Dukan. Et maintenant, je *me mets* tranquillement *à le lire* dans mon fauteuil. (*ibid.* : 20)

(61') では、局面の変化を示唆する *et maintenant*、移行時の主体の状態を示す *tranquillement*、読書中の O の空間的位置を表す *dans mon fauteuil* が、O のありかたに言及する姿勢であることを示している。

また、事行が生起する場が発話行為の場から隔たっている場合は、O のありかたを意識しやすくなる。(62) はそのような場合の発話例で、話し手は事行の開始ではなく O (=S) のありかたに言及している。

(62) (話し手が数学の問題を Maple で解いたところ、自力で解くよう求められて) Là, j'ai tellement envie d'aller me coucher et j'ai préféré résoudre cela avec un petit programme Maple. Mais c'est promis, dès demain, je *me mets à chercher une solution raisonnée.* (<http://www.ilemaths.net/sujet-enigmo-76-a-la-recherche-d-impair-251586.html>)

(62) の P は「計算をして答えを探る」というありかたである。話し手 (S) は、はじめ Maple を用いて問題を解いており、S (O) は P にない。そして、明日以降、S (O) が P に移ることを *se mettre à inf.* で表している。

次に、O の移行に話し手が立ち会っている場合を考察する。(63), (64) は、そのような場合の発話例で容認される。

(63) — Comment peux-tu être sûre de ce que tu avances ? Tu ne l'as jamais rencontré. Et je me suis mise en colère.

— Voilà que tu *te mets à parler comme un imbécile*.

(Piké, C., 2000, *Tapis rouge*)

(64) — (….) Je vais tout de suite tirer cette affaire au clair et nous pourrons quitter cette ville pourrie.

— Tiens donc, tu *te mets à faire des manières*, toi aussi ?

(Edding, D., 1994, *Chant V de la Mallorée la sibylle de kell*)

(63), (64) で、話し手は O が P に移りつつあるという事態を捉えている。そして、(63) では、その事態を聞き手に提示し (*voilà que*), (64) では予想していなかった (*tiens donc*) 事態の捉え方が妥当であるかどうか聞き手に確認を求めている。いずれも、それまでとは異なる O (=S) の新しいありかたを聞き手に提示するための発話である。このように、*voilà que* のような語句によって発話行為の場と事行が生起する場が隔てられることが、O の P への移行を捉えるのに役立っていると考えられる。

同じことは、*si* と *quand* を含む発話にも当てはまる。

(65) (未来の乗用車のシステムについて解説している) Un signal sonore retentit si le conducteur *se met à somnoler* (…)

(*Le Monde*, 1999/07/29 : 12)

(66) Il est très créatif, quand il *se met à faire de la paperasse*.

(King, S., 1991, *Bazaar*)

(67) (墓地の近くで少年たちが集まってたばこを吸ったり、ワインを飲んだりしている。そして少年たちの内の一人が見張りをしている) Si quelqu'un s'approche, le guetteur *se met à siffler une chanson connue* en restant tranquillement assis.

(Kristof, A., 1986, *Le grand cahier*)

(68) (皆が寝室に向かった時, 話し手がどのようになるかを述べる場面で)

Mais quand vous êtes tous montés vous coucher, je **me mets à penser** et c'est abominable.

(Anouilh, J., 1950, *La Répétition ou l'amour puni*)

(65) は 運転手 (O) の「居眠りをする」というありかたへの移行を想定している場面での発話であり, (66) は彼 (O) が創造的に振る舞うのが P に移るときであることを表す発話である。そして, (67) と (68) は, それぞれ *si* 節と *quand* 節の事態がある状況で, 監視役 (O) が「口笛を吹く」というありかたに, または話し手 (O) が「あれこれ考える」というありかたに移ることを表している。一般に, 話し手が仮定節や時況節を導く接続詞 *si* や *quand* を用いるのはある状況を設定する場合であり, それは, しばしば O の P への移行が見られるのがどのような状況であるかを問題にする場合であり, O のありかたに言及する場合である。(65)-(68) に共通するのは, 話し手の意識が O のありかたに向いているという点である。

続いて, O の移行が習慣的に繰り返される場合を考察する。

(69) (話し手が自分の飼い猫を紹介していて) La nuit, il est très calme.

Mais tous les matins, vers 7 heures, il **se met à miauler**, week-end compris. (佐々木, 2014a : 21)

(70) Depuis quelques jours déjà, un piaf **se met à chanter** à 5 heures du matin sous ma fenêtre. (*ibid.*)

(69) では, 先行文脈で飼い猫 (O) の「夜はおとなしい」という P 以外のありかたを話題にした上で, 毎朝 7 時ごろに「鳴く」というありかたに移ることを表している。そして, (70) では, スズメ (O) について, 毎朝 5 時に「囀る」というありかたに移ることを表している。そして, このような移行が習慣的に繰り返されることに言及する場合も, *se mettre à inf.* を現在形で用いる。

最後に小説の地の文や映画のシナリオのト書きである。小説の地の文では, しばしば現在形を用いることがある。そして, その場合, O を P に移すことを (71) のように *se mettre à inf.* を用いて表すことができる。

- (71) — Evidemment ! Ecoute, je ne vais pas t'apprendre la situation politique du Japon. (...) Ensuite, en tant que progressiste, j'aurais pieds et poings liés.

Arrivé là, je **me mets à rire** :

— Nous voilà en plein dans un sujet interdit pour une soirée.

(Maruya, S., 1991, *Rébellions solitaires*)

また、映画のシナリオのト書きは、現在形で書くのが原則である。その場合、O の Z への移行を表す場合に (72) のように現在形の *se mettre à inf.* を用いるのは、ジャンルの要請によるものと言える。

- (72) Un passant : Ça y est, il pleut ! (Ils s'arrêtent, surpris par la pluie)
Stéphane : Oui, je crois que...

Ils **se mettent à courir** ; la pluie tombe de plus belle.

(Sautet, C., 1992, *Un Coeur en hiver*)

以上、現在形の *se mettre à inf.* を用いることができる五つの場合について、容認される理由を発話例の分析に基づいて明らかにした。O のありかたの変化を意識するには、O の状態の推移を客観的な視点から捉える必要がある。

Franckel が指摘する発話行為の場と *inf.* の事行が生起する場とが隔たっている場面で *se mettre à inf.* が用いやすくなるという事実は、そのことによって説明される。

3.2.1.2. 否定形の *se mettre à inf.*

既に述べたように、Franckel は *se mettre à inf.* を否定文で用いることは不可能であるとしている。実際にそのような例は少ない。また、(73) のように、*inf.* の事行が開始しないことを表すために、*ne pas se mettre à inf.* を用いるのは難しい。

- (73) ? Claude **ne s'est pas mis(e) à rédiger son texte.**

(Saunier, 1999 : 278)

- (74) Claude **ne s'est pas encore mise à rédiger son texte.** (*ibid.*)

- (75) Claude **ne s'est toujours pas mise à rédiger son texte.** (*ibid.*)

(73) で, inf. の事行が開始しないことを述べるのであれば, commencer à inf. を用いるのが普通である²¹. しかし (74) や (75) のように, encore や toujours を添えると自然な発話となる. se mettre à inf. を否定文で用いる用例として (76)-(79) がある.

- (76) (話し手と Patrick は 10 歳の少年である. 話し手は, Patrick が泣くことなど考えられないと主張する中で, 自分が海に落ちた時のことを話している.) Quand j'ai bu la tasse plusieurs fois de suite et que j'arrivais plus à nager, Patrick **ne s'est pas mis à pleurer**. Il a plongé et c'est tout...

(Ferrant, P., 1994, *Les petits arrangements avec les morts*)

- (77) (俳優である話し手が, 同じ店を月に 6 回訪れる理由を説明している) Parce que c'est intime. **Personne ne se met à hurler** quand j'arrive. Les employés **ne se mettent pas à chuchoter entre eux**. Même les clients sont habitués à voir des célébrités, et ils ne me fixent pas sans arrêt.

(Murakami, H., 1995, *Danse, danse, danse*)

- (78) Howard Hawks avait déclaré avoir réalisé Rio Bravo avec l'idée de faire le contraire de High Noon.

" Pour moi un bon shérif ne **se mettait pas à courir la ville**, comme un poulet dont on a coupé la tête, en demandant de l'aide. "

(*Le Monde*, 1999/08/23 : 34)

- (79) J'éprouvai de la honte pour ce vieillard branlant qui scrutait la reine avec un sourire las. Kettricken **ne se mit pas à hurler** et elle ne s'effondra pas non plus en larmes : elle se contenta de faire demi-tour et de s'éloigner lentement.

(Hobb, R., 1997, *La reine solitaire*)

(76) では, 話し手が海に落ちた時の Patrick (O) の様子を話題にしている. 友人が海に落ちて溺れれば, 10 歳の子供は泣いてしまうのが普通である. 話し手は, 否定形の se mettre à inf. で, 通常想定されるありかた (P) への移行が

²¹ commencer à inf. を用いる場合は, 話し手は「読む」という事行の展開を意識する. そして, その開始段階が訪れることを否定する.

起こらないことを表している。また、(77) では、俳優がレストランに現れた時の客や従業員の様子を話題にしている。俳優がレストランに入れば、客 (O) が大声をあげたり、従業員 (O) が小声で話し合ったりすることが予想できる。話し手は、否定形の *se mettre à inf.* で、あるレストランではそのようなありかたへの移行が起こらないことを表している。そして、(78) は助けを求めて走り回った *High Noon* に登場する保安官に対する皮肉である。話し手にとって保安官 (O) は、何が起きても「(助けてを求めて) 町中を走り回る」というありかた (P) には移らないものである。そして、そのことを否定形の *se mettre à inf.* で表している。さらに、(79) は無礼な態度を取られた *Kettricken* の対応である。この場合、*Kettricken* (O) が「怒鳴る」というありかた (P) に移るのは自然なことである。そして、話し手は O が P に移らないことを否定形の *se mettre à inf.* で表している。

また、*se mettre à inf.* を否定命令文で用いる場合もある。*se mettre à inf.* を否定命令文で用いるのは、*inf.* の事行を禁止する場合ではなく、O に P への移行を禁止する場合である。

- (80) (襲われそうになったらどう対処すべきかを説明している場面で) ***Ne vous mettez jamais à courir, ne criez pas. Si vous voulez survivre, appliquez-vous à imiter les légumes.***

(Brussolo, S., 2001, *Peggy Sue et les fantômes, tome 2 ; Le Sommeil du démon*)

- (81) (匿名の手紙のせいで女優が自殺する。女優の友人で行方不明の Sanny がファンに向けて手紙を書いている。) ***Sammy leur répondait:***

– ***Ne te mets pas à fouiller là-dedans. Cela ne servirait qu'à te bouleverser.*** (Higgins., M.C., 1988, *Ne pleure pas ma belle*)

(80) では、襲われそうになった時の聞き手 (O) の様子に言及している。通常、襲われそうになったら逃げるために「走る」というありかたに移るものである。しかし、話し手はそのようなありかたへの移行を禁じ、野菜の真似をするよう指示している。また、(81) では、歌手が行方不明になった時の熱狂的なファン (O) の様子に言及している。そのような場合、熱狂的なファンは事件に首をつっこむことが想定できる。そのような場面で *se mettre à inf.* を否定形で

用いることで、聞き手であるファンに「事件に首を突っ込む状態」に移ることを禁じる。

同じ理由で、条件節で *ne pas se mettre à inf.* を用いることがある。

(82) (台所の果物を物色する Lazuli について) — *Tant qu'il(=Lazuli) ne se met pas à voler, je n'ai rien contre ces activités.* (Robillard, A., 2011, *Les Héritiers d'Enkidiev, tome 2 ; Nouveau Monde*)

(83) "Il y a quand même encore de bons chocolatiers, s'ils *ne se mettent pas à faire n'importe quoi !*"

(*Le Monde*, 1997/12/29 : 8)

(82) で、Lazuli (O) は台所に侵入しているが、O が盗みを働かなければ話し手は O を放っておくつもりでいる。そして、O のありかたを意識して、「盗む」というありかた (P) に移らないことを否定形の *se mettre à inf.* で表している。(83)の場合も、チョコレート職人が減ってきたことを話題にしている。そして、O のありかたを意識して、「めちゃくちゃなことをする」というありかたに移らないことを否定形の *se mettre à inf.* で表している。

以上、否定形の *se mettre à inf.* を用いる場合を分析した。そして、本来想定されるありかたに O が移らないことを *se mettre à inf.* の否定形で表すことが分かった。さらに、移行を禁止する場合にも *se mettre à inf.* を否定形で用いることが分かった。

3.2.2. *se mettre à inf.* の表現効果

Saunier (1999:280) は、*se mettre à inf.* を用いると次のような表現効果が生じると指摘している：

A) *soudaineté : inf.* の事行は突発的である；

B) *incongruité : inf.* の事行は場違いまたは好ましくない；

C) « *pour de bon* »: *inf.* の事行は「やっと実現」という感じをともしよう。

Saunier は、特に A) と B) の場合に *se mettre à inf.* を用いやすいと指摘している。しかし、C) に関しては詳しい記述をしておらず、A)-C) のような表現効果が生じる理由を十分に説明しているとは言えない。

本節では、3.2.2.1. で実例の観察に基づいて Saunier の記述の妥当性を検

討する．そして，3.2.2.2. で A)-C) の表現効果が O の移行に言及することにより起因することを明らかにする．

3.2.2.1. Saunier (1999) の記述の検討

Saunier (1999 : 280) は，*se mettre à inf.* を用いると *inf.* の事行が突発的に開始するという表現効果が頻繁に生じるとしている．

コーパス内で事行の突発性を表す副詞と，徐々に開始することを表す副詞が，*se mettre à inf.*, *commencer à inf.* とそれぞれ共起する頻度は (84) に示す通りである．

(84)		<i>se mettre à inf.</i>	<i>commencer à inf.</i>
	soudain,	142 回	3 回
	brusquement	33 回	2 回
	peu à peu	12 回	15 回

(84) から，*soudain* や *brusquement* は，*se mettre à inf.* と共に用いることが多いことが分かる．このことから，事行が突発的に開始する場面では *se mettre à inf.* を用いる傾向にあるといえる．

しかし，*peu à peu* については，*se mettre à inf.* と *commencer à inf.* の間には，有意な差が存在しないことが分かる．

- (85) (認知症の女性の一人娘について) *Au fil des ans, Claude Breton-Fèvre, qui est fille unique, **se met** peu à peu **à vivre au rythme de sa mère** : elle téléphone tous les matins pour vérifier que tout va bien, vient déjeuner à midi, rappelle une nouvelle fois le soir. Le week-end, elle passe de plus en plus de temps à Palaiseau. (Le Monde, 2009/09/21 : 3)*

(85) から，*inf.* の事行が緩やかに開始する場合であっても *se mettre à inf.* を用いることができることが分かる．

以上の調査からも，確かに事行が突発的に開始する場合に *se mettre à inf.* を用いる傾向は認められるといえる．しかし，事行が緩やかに開始する場合であっても *se mettre à inf.* を用いることができる．このことから，必ず

しも A) の表現効果が生まれるとは限らないことが分かる。

次に、場違いな事行や好ましくない事行が開始する場合である。

- (86) Maurice était furieux. Il hocha la tête, puis **se mit** soudain **à rire**.
(Clavel, B., 1998, *La Grande patience, tome 1 ; La Maison des autres*)

(86) では、Maurice (S) は当初怒り狂っており、**rire** は場違いな事行であるといえる。

また、S が物の場合は、inf. の事行が場違いな（または好ましくない）事行でなければ **se mettre à inf.** を用いることができないと Saunier は指摘する。たとえば、(87) の場合、石 (O) が溝に滑り落ちることが好ましくないため **se mettre à inf.** が容認されると説明している。

- (87) Sous l'effet de l'explosion, les pierres **se sont mises à glisser au bas du fossé**. (Saunier, 1999 : 276)

ところが、実例を観察すると、事行が場違いな場合や好ましくない場合でなくとも、**se mettre à inf.** を用いることは可能であることが分かる。

- (88) (Tronie は、お湯を沸かそうとして、水に高温に熱した石を放り込んでいる) Tronie retirait celles qui s'étaient refroidies, en ajouta d'autres brûlantes, jusqu'au moment où l'eau **se mit à bouillir**. Elle plongea alors dedans la pâte faite de graines de tournesol.
(Auel, J.M., 1985, *Les enfants de la Terre : les chasseurs des mammouths*)

(88) は、お湯を沸かそうとしている場面での発話で **bouillir** は場違いな事行や、好ましくない事行であるとは言えない。

以上、**se mettre à inf.** を用いることで、inf. の事行が場違いまたは好ましくないものであるという表現効果が生じるかを検討した。確かに (86) や (87) では、B) の表現効果が生じるといえる。しかしながら、(88) のように、inf. の事行が場違いではない場合もある。このように、必ずしも B) の表現効果が常に生じるとは限らないことが分かる。

最後に、C) は、A) と B) とは異なり期待されている事行が開始する場面で *se mettre à inf.* を用いる場合である。Saunier (1996, 1999) は、*enfin* と用いる P は、名詞句か代名詞 *y* で表すとしている。しかし、それ以上の記述はない。

実例を観察すると、*se mettre à inf.* と *enfin* を用いる実例を見つけることができる。

- (89) (気が張っていて泣くことができなかった *je* がようやく落ち着いて)
Il me caressa la joue avec tendresse, puis le cou. Sa main remonta sur ma nuque. C'était doux. Je ***me mis*** enfin à ***sangloter***.

(Izzo, J-C, 2001, *Total Kéhops*)

- (90) (衰弱した仲間に薬を飲ませるためにお湯を沸かしていて) L'eau ***se mit*** enfin à ***bouillir***. Ayla versa au creux de sa paume une petite quantité de feuilles séchées de digitale, en aspergea la surface de l'eau. (Auel, J.M., 2008, *Les enfants de la Terre, tome 3 ; les chasseurs de mammouth*)

(89) や (90) はいずれも開始が期待されている事行が開始する場面で、*se mettre à inf.* を用いている。

以上のことから、*se mettre à inf.* を用いる場合、C) の表現効果が生じる場合もあることが分かった。

3.2.2.2. *se mettre à inf.* の表現効果の由来

まず、*inf.* の事行が突発的であるという表現効果が生まれる要因を検討する。(91) と (92) は *inf.* の事行が突発的に開始する場合の発話例である。

- (91) Jeanne ne céda point, répétant: « Alors qu'on aille la chercher chez elle. » Et déjà elle s'irritait quand le docteur entra. On lui dit tout pour qu'il jugeât. Mais Jeanne soudain ***se mit à pleurer***, éternuée outre mesure, criant presque: « Je veux voir Rosalie: je veux la voir ! » (de Maupassant, G., 1883, *Une Vie*)
- (92) « J'étais sur la plage en train de lire, a rapporté une Française de Bangkok en vacances à Phuket, quand une mère de famille, une

Thaïlandaise, a commencé à rassembler ses enfants. «Je n'ai jamais vu cela», m'a-t-elle dit en me faisant remarquer que l'eau se retirait. Puis elle a paniqué. L'eau, tout à coup, **se mettait à remonter**.

(*Le Monde*, 2004/12/28 : 2)

(91) では Jeanne が突然それまでとは異なる「泣く」というありかたに移ることを表している。また、(92) では 水が突然「上がる」というありかたに移ることを表している。いずれの場合も、S の P への移行に言及することは局面の変化を表すのに役立っている。se mettre à inf. が A) の場合と相性がよいのは、そのためである。

次に、場違いな事行という表現効果を見る。se mettre à inf.を用いる場合、B) の表現効果が生じるのも、O の P への移行が問題になるためである。

(93) (独身の男性が認知症の母親に会いに行ったときのことを父親に報告している。) Elle était calme... et assez normale au début. Mais après elle **s'est mise à parler de ma femme**.

(Foenkinos, D., 2011, *Les souvenirs*)

(94) (Pavel の妻が妊娠したことを知った Christine は、Pavel の妻の面倒を見ることを決意する) Elle lui faisait la lecture du journal (...) et alors que chez elle, elle ne touchait jamais au moindre ustensile, **se mit à cuisiner**, (...).

(Guenassia, J.-M., 2012, *La vie rêvée d'Ernesto G.*)

(93) の話し手にとって parler de ma femme は好ましくない事行であると言える。また、(94) の cuisiner は調理器具に触れたこともない Christine にとって場違いな事行である。このような場合、O が P に移ることを問題にするのが自然である。そのため、inf. の事行を好ましくない、または場違いな事行として述べる場面と se mettre à inf.は相性がよいのである。se mettre à inf.を用いて、B) の表現効果が生じるのもそのためであろう。

最後に、想定されている事行が、なかなか開始しないような場面で、se mettre à inf.を用いる場合である。

- (95) (=90) (衰弱した仲間に薬を飲ませるためにお湯を沸かしていて)
 L'eau **se mit** enfin **à bouillir**. Ayla versa au creux de sa
 paume une petite quantité de feuilles séchées de digitale,
 en aspergea la surface de l'eau.
- (96) Je suis tellement bien avec lui que j'ai l'impression que c'est tout
 mon corps qui en est bouleversé, que je **me suis** enfin **mise à**
vivre. (Elle, 2008/01/07)

(95) の話し手は水が沸騰することを期待している。このような場面では、水のありかたを意識して、「沸騰する」というありかた (P) に移ることに言及するのが自然である。(96) の話し手は、自分について生きているという実感を持っていない。そして、そのような S のありかたを意識していれば、「生きる」という期待していたありかた (P) に移ることに言及するのは自然なことである。このように、inf. の事行がなかなか実現しないような場面で O が P に移るか否かを問題にすることがある。その場合、C) の表現効果が生じる。

しかし、A)-C) の表現効果はいつも生じるとは言えない。

- (97) (=85) Au fil des ans, Claude Breton-Fèvre, qui est fille unique, **se met** peu à peu **à vivre au rythme de sa mère** : elle
 téléphone tous les matins pour vérifier que tout va bien,
 vient déjeuner à midi, rappelle une nouvelle fois le soir. Le
 week-end, elle passe de plus en plus de temps à Palaiseau.
- (98) (=88) (Tronie は、お湯を沸かそうとして、水に高温に熱した石を
 放り込んでいる) Tronie retira celles qui s'étaient refroidies,
 en ajouta d'autres brûlantes, jusqu'au moment où l'eau **se**
mit à bouillir. Elle plongea alors dedans la pâte faite de
 graines de tournesol.

(97)では、O が「母親のリズムで生きる」というありかた (P) に移ることを、(98) では、O が「沸騰する」というありかた (P) に移ることを *se mettre à inf.* で表している。いずれの場合も、A)~C) の表現効果は生じない。このように、話し手が O の P への移行を問題にしているのであれば、P は突発的、場違いでなくてもよいし、「やっと実現」という感じをともなう事行でなくてもよい。

3.3. S の移行と開始アスペクト

本節では、*se mettre à inf.* が事行の開始アスペクトを示す仕組みを明らかにする。

se mettre à inf. について、Franckel(1989) は「話し手の予測や意図といった主観とは無関係に事行が出現することを表すために用いるアオリストな表現である²²」としている。そして、現在形の *se mettre à inf.* は容認度が低く、(99)や (100) のような場合でなければ容認されないとしている。

(99) Je sens que je ***me mets à être désagréable***.

(Franckel, 1989 : 142)

(100) Quand tu ***te mets à être désagréable comme ça***, toute discussion devient impossible. (*ibid.*)

Franckel は、(99), (100) の容認度が高いのは、*je sens que* または *quand* を用いることで、発話行為の場と *inf.* の事行が生起する場との間に主観的な隔たりが生まれるためであると説明している。そのため、S が話し手の場合、*se mettre à inf.* の容認度は下がるという。また、*inf.* の事行が時間の中で生起しない否定形では *se mettre à inf.* を用いないと指摘している²³。

しかし、実例を観察すると、話し手が意図して事行を生起させる場合であっても、(101) のように *se mettre à inf.* が容認される場合があることが分かる。

(101) (=60) J'ai lancé ma blague, ça m'a fait du bien. Et maintenant, je ***me mets à étudier sérieusement***.

また、話し手以外が事行を生起させる場合であっても (102) のように容認度が下がる場合がある。

(102) ? Cette situation ***se met à embêter Marie*** (Saunier, 1999 :275)

²² P, dans *se mettre à P*, ne se construit qu'à travers son ancrage dans le temps. Il échappe à toute construction subjective. *Se mettre à P* marque la survenue de P, indépendamment de toute anticipation.

²³ La négation de *se mettre à P* (=Inf) n'a aucun statut, en raison du fonctionnement aoristique de *se mettre à*. P n'a de statut qu'à travers la positivité que lui confère *se mettre à* par actualisation sur la classe des t. (Franckel, 1989 : 144)

そして、実例を観察すると (103) のように 否定形の *se mettre à inf.* が容認される場合もあることが分かる。

- (103) (=76) (話し手と Patrick は 10 歳の少年である。話し手は, Patrick が泣くことなど考えられないと主張する中で, 自分が海に落ちた時のことを話している。) *Quand j'ai bu la tasse plusieurs fois de suite et que j'arrivais plus à nager, Patrick ne s'est pas mis à pleurer. Il a plongé et c'est tout...*

以上のことから, *se mettre à inf.* を用いるのは, 発話行為の場と *inf.* の事行が生起する場との間に主観的な隔たりがある場合に, 話し手の予測や意図とは無関係に事行が出現することを表すためであるとする Franckel の記述は十分であるとは言えない。

他方, Saunier は *se mettre à inf.* について, O と本来結びつくはずのない *inf.* の事行が結びつくことを表すために用いる表現であると説く。そして, (104)-(107) などの例を挙げて, *inf.* の事行は話し手にとって想定外の事行, 好ましくない事行, または場違いな事行であると説明している。

- (104) ?Voilà que je *me mets à comprendre, à respirer mieux.*
(Saunier, 1999 : 278)
- (105) Voilà que je *me mets à tout comprendre* sans effort / à *comprendre* même les assassins. (*ibid.*)
- (106) ?? Ça *se met à poser problème*, le départ de Dupont. (*ibid.* :275)
- (107) Si ça *se met à déconner*, il faut appeler le machiniste.
(*ibid.* : 276)

Saunier は, S が話し手の場合 *voilà que* を添えても容認されない場合の例として (104) を挙げている。しかし, *voilà que* を添えて容認されない場合でも, (105) のように P を想定外とみなすのが自然な場合は問題なく容認されるとしている。また, S が無生物の場合は, *se mettre à inf.* の容認度が下がるとして (106) の例を挙げている。しかし, その場合でも, (107) のように P が話し手にとって想定外の事行, 場違いな事行, または好ましくない事行であ

れば容認されるとしている。

しかし、(104) の容認度が (105) と比べて低いのは inf. の事行が場違いな事行であったり、想定外の事行であったりするためではない。(104) のように「理解する」という事行が開始する場面では、理解の度合いがどのように推移していくかを意識するのが自然である。そのため、O が P に移ることに言及するだけでは不十分である。一方、(105) では *sans effort* を添えて理解の仕方を示している。その場合は、「難なく理解する」というありかた (P) に移ることに言及すれば十分である。

また、事行が好ましくないため (107) が容認されるのであれば、(106) の容認度は下がらないはずである。(106) の O は「Dupont の出発」である。この場合、O が新しいありかたに移ることを意識するのは不自然である。一方、(107) の O は何かの装置であると考えられる。この場合、O が「正常に動作しない」というありかたに移ることを意識するのは自然である。

さらに、inf. の事行が話し手にとって想定外である場合に *se mettre à inf.* を用いるとする Saunier の主張は、Saunier 自身が挙げる次の発話例が容認されることとも矛盾している。

(108) " Après un temps, le vieux redresse le buste, et **se met à parler**, sans hâte, hâchant ses phrases, les yeux au loin. "

(Saunier, 1999 : 280)

(109) " Quand je lui demande d'aller à nouveau à Nancy, Lando, comme prévu, **se met à râler**." (*ibid.*)

Saunier は、inf. の事行が想定外でなくても (108), (109) の発話例は容認されると指摘しているが、その理由を Saunier は述べていない。また、話し手が意志的に開始する事行や話し手にとって好ましい事行が開始する場面でも S が別のありかたに移ることを意識するのは珍しいことではない。

(110) (=62) (話し手が数学の問題を Maple で解いたところ、自力で解くよう求められて) *Là, j'ai tellement envie d'aller me coucher et j'ai préféré résoudre cela avec un petit programme Maple. Mais c'est promis, dès demain, je **me mets à chercher** une solution raisonnée.*

(111) (=90) (弱り切った仲間に薬を飲ませるためにお湯を沸かしていて)

L'eau **se mit** enfin **à bouillir**. Ayla versa au creux de sa paume une petite quantité de feuilles séchées de digitale, en aspergea la surface de l'eau.

(110) の *chercher une solution raisonnée* は話し手が意志的に取りかかる事行である。そして、(111) の *bouillir* は期待された事行である。いずれの場合も、*se mettre à inf.* は容認される。

以上のことから、*se mettre à inf.* を用いるのは、O が本来結びつくはずのない事行と結びつくことを表すためであるとする Saunier の記述も十分であるとは言えない。

われわれは、*se mettre à inf.* を用いるのは、O の P への移行を表すためであると考え。たとえば、(110) の話し手は自身 (O) のありかたを改めることを表している。また、(111) の水 (O) のありかたを意識して、期待される「沸騰する」というありかた (P) に移ることを表している。このように、*se mettre à inf.* の容認度は、話し手が O のありかたに言及するのが自然であるか否かに左右される。そして、*se mettre à inf.* が開始アスペクトマーカースとして働くのもこのことに起因している。

開始アスペクトを示すとされる *se mettre à inf.* を用いる発話例には (112)-(115) などがある。

(112) « Tu joues à la poupée ? » elle m'a demandé Louiset, et puis elle **s'est mise à rire**. (Goscinn, R. 1960, *Le Petit Nicolas*)

(113) (ある女性に興味を示していた男たちが食卓についた後) Les hommes **s'étaient mis à manger et à boire**, ne pensant plus à elle. (Follett, K., 1992, *Les Piliers de la terre*)

(114) (=93) (独身の男性が認知症の母親に会いに行ったときのことを父親に報告している。) Elle était calme... et assez normale au début. Mais après elle **s'est mise à parler de sa femme**.

(115) (=6) – Ce que je vais faire ? Eh bien, c'est pas compliqué : je **mettrai à travailler** et serai toujours honnête.

(112) は、Louiset (S) が笑いだす場面についての発話である。話し手は、

それまで笑っていなかった S (O) が「笑う」というありかた (P) に移ることに *se mettre à inf.* で言及している。そして、S (O) が P に移る時点は、「笑う」という事行が開始する時点に他ならない。そのため、S (O) の P への移行に言及すると、「笑う」という事行の開始アスペクトを示すことに繋がる。

(113) では、それまで女性に見とれていた S (O) が「食べる」と「飲む」というありかた (P) に移る。また、(114) では、はじめ正常だった S (O) が「妻の話をする」というありかた (P) に移る。そして、(115) では、発話時ではまじめに働いていない S (O) が「まじめに働くこと」というありかた (P) に移る。いずれの場合も、S (O) が P に移る時点は *inf.* の事行が開始する時点でもある。

また、非人称構文で *se mettre à inf.* を用いる場合もある。

(116) Le ciel s'obscurcit encore et il ***se met soudain à pleuvoir.***

(Werber, B., 2009, *Le miroir de Cassandre*)

(117) Plus tard, il ***se mit à neiger***, au début, puis à grêler comme d'habitude tandis que le vent se levait. (Arnaud, G.-J., 1981, *La compagnie des glaces, tome4 ; les chasseurs des glaces*)

(118) Mais la nuit est tombée, et il ***s'est mis à faire sacrément froid***, cet hiver-là était plus froid qu'un boisseau de tétons de sorcières, (...) (Dan, S., 1995, *Nuit d'été*)

(116)-(118) の話し手は特定の O を想定しているのではなく、場面の様子を意識している。P は、(116) では「雨が降る」というありかた、(117) では「雪が降る」というありかた、(118) 「とてつもなく寒い」というありかたである。そして、特定の O を想定せずに場面の様子が P に移ることを表す場合は、非人称構文で *se mettre à inf.* を用いる。

また、P への移行後、S (O) が P にあり続けるのが自然でなければ *se mettre à inf.* は容認されない。

(119) *Jean ***s'est mis à mourir.***

(120) (容疑者たちが全員逮捕されたことについて) C'était l'idéal et puis, ils ***se sont mis à mourir*** les uns après les autres..."

(*Le Monde*, 1997/10/14 : 12)

(119), (120) の P は「死ぬ」というありかたである．しかし、「死ぬ」という事行は時間幅を持たない．そのため， inf. の事行が生起しても， O は P にあり続けることができない．ただし，(120) のように O が複数の場合，一人また一人と死亡していくという事行としてひとまとまりに捉えれば， S がきっかけを与えた後 O は P にあり続けることができる．そのような場合は se mettre à inf. が容認される．

以上のことから， O の P への移行と inf. の事行の開始アспектについて図 2 のように示すことができる．

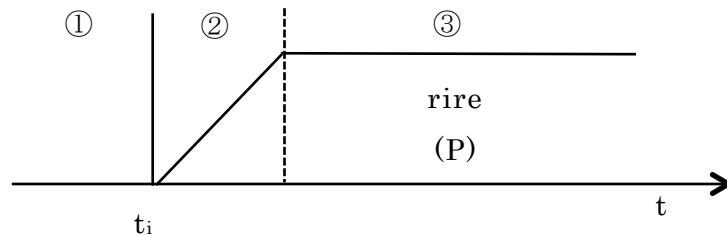


図 2 : elle s'est mise à rire

図 2 は，(112) の *elle s'est mise à rire* という場合に O のありかたがどのように推移するかを図示したものである．時間の流れを t とし， $S(O)$ が P に移る時点を t_i とする． O が P に移る時点を t_i とする．① は事行が生起する直前の段階，② は事行の開始段階，③ は事行の持続段階である． P は「笑う」という事行が展開中のありかたである． $S(O)$ の P への移行が起きる t_i は，「笑う」という事行の開始点でもある．

このように， $S(O)$ の P への移行に言及するということは， inf. の事行の開始アспектを示すことに他ならないと言える．

3.4. この章のまとめ

本章では， se mettre à inf. が開始アспектマーカースとして働く要因を明らかにした．

まず，3.1. で mettre が S が O を Z に移すことを表す表現であることを確認した． Z は空間領域では O の空間的な位置で，観念領域では O の状態である．また， à inf. で「事行が展開中」というありかたを表す場合もある．

3.2. では， se mettre à inf. が開始アспектを示す仕組みを明らかにした．

Franckel (1989) は、*se mettre* について「話し手の主観とは無関係に事行が出現することを表すために用いるアオリストな表現である」と述べている。そのため、現在形の *se mettre à inf.* や否定形の *se mettre à inf.* は容認されないとしている。また、Saunier は *se mettre à inf.* を用いると、*inf.* の事行が突発的、場違い、また「やっと実現」という感じをともなう事行であるという表現効果が生じることを指摘している。

実例の観察に基づいて、3.2.1. では、O の P への移行に言及する場合、現在形や否定形の *se mettre à inf.* が容認されることを明らかにした。そして、3.2.2. では、Saunier が指摘するような表現効果が生じるのは O の P への移行に言及することと関係があることを明らかにした。

そして、3.3. では *se mettre à inf.* が開始アスペクトマーカースとしてではなく仕組みを明らかにした。O の P への移行に言及することは、*inf.* の事行の開始を伝えることに他ならない。そのため、*se mettre à inf.* は開始アスペクトマーカースとしてではなくるのである。

次章では、*commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使い分けをよりよく理解するために、日本語のアスペクトマーカース「V ハジメル」と「V ダス」を分析する。そして、両表現形式の使い分け明らかにし、開始アスペクトマーカースが二つに下位分類されることを示す。

第4章 日本語の開始アスペクトマーカ―

本章では、日本語の開始アスペクトマーカ―について統語的複合動詞²⁴「V ハジメル」と「V ダス」の使い分けについて論じる。

動詞を「V ハジメル」または「V ダス」で用いる発話例には (1), (2) のようなものがある。

- (1) しかし弥生時代から急激に人口が**増えはじめ**、平安末期には約七〇〇万人に増えている。(上原春男, 2002, 『創造の原理』)
- (2) 先ほど私が、一昨年末あたりからまた**ふえ出した**と申し上げたのは、外国人登録法違反事件ではございませんで、密入国そのものでございます。密入国の事案が、摘発数の増大ということを通じて、その背後にかなりの復活と申しますか、かなりの増加が、再増加があるのではないかということを疑わしめる状況になっているということでございます。(「国会会議録」, 1987/09/10)

森田 (1977) は、「V ハジメル」は「V オウル」に対応する表現形式であると述べ、事行の開始を表すために用いるとしている。そして「V ダス」は、「無の状態、表れていない状態のものが自ずと顕在化し、動作・状態の変化として形をなすという気分が強い。“開始”よりは“新たな事態の成立”の意識が強い」としている。さらに、「V ダス」について「人間行為に使われても意志性がない」と述べている。

また、姫野 (1977, 1999) は、「V ハジメル」または「V ダス」を用いる場合には、それぞれ次のような傾向があると指摘している。

- 1) 「V ハジメル」を選択するのは：
 - ・開始の意識が強い場合；
 - ・意志的表現と共に用いる場合。
- 2) 「V ダス」を選択するのは：
 - ・前項動詞で感情の動きを表す場合 (例：「怒る」や「照れる」など)；

²⁴複数の動詞を用いて構成する動詞句は「複合動詞」と呼ばれる。影山 (1993) 以降、複合動詞は、「食べはじめる」や「食べだす」のように後項の動詞 (以下後項動詞) に文法的機能があるものを「統語的複合動詞」として、「走り回る」や「食べ歩く」のように後項の動詞に文法的役割がない複合動詞と区別する。

- ・前項動詞で音が自然に発生することを表す場合（例：「電話が鳴る」や「音が響く」など）；
- ・前項動詞で表す自然現象が現実化直前にあることを表す場合；
- ・即興性や、エネルギーの爆発等を強調する場合；
- ・不測性を強調する場合。

また、今井（1992）は「V ダス」を用いる場合、「話者は命題が表現する事態を知覚するだけであり、事態に対する制御力を持っていない」と述べている。そして、「V ダス」は命令文や話し手の意志を表す文脈に適合しないと述べている²⁵。

このように、先行研究は、「V ハジメル」で前項動詞が表す事行の展開が開始することを表し、「V ダス」で前項動詞が表す事行が出現することを表すとしている。そして、「V ダス」と親和性が高い動詞が存在することを指摘している。しかし、それが何に起因するのかを十分に説明していない。さらに、実例を観察すると「V ハジメル」と親和性が高い動詞も存在することが分かる。

さらに、今井が「V ダス」が容認されないと指摘する命令文や話し手の意志を表す発話で「V ダス」を用いる場合がある。

- (3) 「いいですか先生、**怒り出さないでくださいよ**」と何度も言い含めて彫刻を見てもらう。（大泉実成，1994，『水木しげるの大冒険』）
- (4) （話し手は、耕作放棄を出さないための農作業を実戦する NPO 法人の設立当時の状況を説明している）考えてばかりいないで**動き出そう**！ そんな思いから、平成 11 年に「棚田フットワーク」を設立しました。中山間地域振興を担当していたころ、机上で「あーだこーだ」言っただけで進展しないことが分かったんです。山間部の生産現場の疲弊は肌身に感じていました。実際に行動することで、むらが元気になる。その「元気」を作りたい。（十日町市役所総務課広報広聴係編，2008/12/10，『市報とおかまち「だんだん」』）
- (5) 何か自分で商売を始めたくてお金を貯め始め、150 万貯まりました。そろそろ**動き出したい**のですが、何をやるかを考えていませんでした。

²⁵ 今井は、命令文や話し手の意志を表す文脈以外に、使役文でも「V ダス」は容認されにくいとしている。しかし、「生徒に本を読み始めさせる」のような使役文では、「V ハジメル」の容認度も高いとは言えない。そのため、小論では、使役文で用いる「V ハジメル」と「V ダス」は考察の対象にはしない。

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11397474
1)

(3) では、「怒る」という行為を禁じる発話で「V ダス」を用いているが容認される。同様に、(4), (5) は話し手の意志を表明する場面で「V ダス」を用いているが容認される。

本節では、「V ハジメル」と「V ダス」のはたらきをより詳細に記述することを目指す。まず、4.1. で「V ハジメル」または「V ダス」を用いる場合に、話し手が事行の開始をどのように捉えているかを明らかにする。4.2. では「V ハジメル」、または「V ダス」と親和性が高い動詞や、それぞれの形式と親和性が高い文脈での発話を扱う。そして、親和性の高さが事行の開始の捉え方が異なることに起因していることを明らかにする。そして、4.3. では開始アスペクトが二つに下位分類されることを示す。

なお、本章では、発話例の分析に国立国語研究所と Lago 言語研究所が開発した NINJAL-LWP for BCCWJ のデータを主に利用した²⁶。

4.1. 「V ハジメル」と「V ダス」の使い分け

本節では「V ハジメル」と「V ダス」について、両表現形式を用いる場合に話し手が事行の開始をどのように捉えているかを明らかにする。

4.1.1. 「V ハジメル」で示す開始アスペクト

本節では、「V ハジメル」を用いる場合を扱う。

まず、本動詞「始める」のはたらきを見てみよう。「始める」を用いる発話例には (6), (7) のようなものがある。

- (6) パソコンと 1 日中にらめっこの仕事を**始めました**.すると 2 ヶ月後に右目だけ近視になってしまいました.

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13648232
3)

- (7) 統計についての勉強を始めたいと思っています. しかしながら、本当に初心者のため、高校レベルの教科書から勉強を**始めています**.

²⁶ ただし、必要に応じてインターネット検索やその他書籍の実例も参考にした。

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12381444
2)

(6), (7) では「仕事」, または「(統計についての) 勉強」に着手することを「始める」で表している。「仕事」や「勉強」は時間の中で時間幅を持って展開する。そして, 話し手は展開の開始段階に「始める」で言及している。

そして, 事行の開始に言及する場合は, 動詞を「V ハジメル」で表す。動詞を「V ハジメル」で用いる発話例には (8), (9) がある。

- (8) シドニィ・シェルダンの本は麻薬である。**読みはじめる**と止まらなくなる。だから決して, 忙しいときには**読むべき**ではない。

(鷲沢萌, 1991, 『町へ出よ, キスをしよう』)

- (9) パンは主食ではないので, 食べすぎてお腹がいっぱいにならないように, オードブルが終わり, スープが出された後から**食べ始め**, デザートの前に食べ終わります。(上月マリア, 2003, 『礼儀と作法』)

(8), (9) では, 「読む」や「(パンを) 食べる」という事行の開始に「V ハジメル」で言及している。「読む」や「食べる」といった事行は時間幅を持って展開する。そして, 話し手は事行の展開を意識して, 展開が開始段階に至ることを「V ハジメル」で表している。

また, 事行に時間幅を想定するのが難しい場合は, 「V ハジメル」が容認されない。

- (10) *太郎が**死に始めた**。

- (11) しかし, 七日目。孵化仔魚たちは突然**死にはじめた**。

(林宏樹, 2008, 『世界初! マグロ完全養殖一混乱に富んだ 32 年の軌跡』)

(10) では, 太郎の死に言及している。そして, 太郎の死は瞬間的で時間幅を持たない。そのため, 話し手が事行の展開を意識するのは不自然である。その場合, 「V ハジメル」が容認されない。一方, (11) では, 仔魚たちの死に言及している。そして, 複数の仔魚が死んでいく様子を意識すると「死ぬ」に時間幅を想定することができる。そのため, 事行の展開を意識するのが自然になる。その場合, 「V ハジメル」が容認される。

以上のことから、「V ハジメル」は事行の展開を意識して、展開の開始に言及する場合に用いる形式であるといえる。

4.1.2. 「V ダス」で示す開始アスペクト

本節では、「V ダス」を扱う。

まず、本動詞「出す」のはたらきを見てみよう。森田（1977）は「中にある事物を外側へ、表面のほうへ移し現れるようにする」ことを「出す」で表すとしている。「出す」を用いる発話には、(12) や (13) のようなものがある。

- (12) うちの猫も二時ぐらいから凄いで鳴き続けるので夜寝るときは外に出すようにしました。

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q134798738)

- (13) スキンヘッドの頭に橙色の帽子をかぶり、足には黄色いゴム長をはいているが、上半身はTシャツ一枚だ。肌を**出して**いても蚊が寄りつかぬ奇妙な体質だと自慢していたのは、どうやら本当らしかった。

(帚木蓬生, 2005, 『エンブリオ』)

(12) では、猫を外に追いやることに言及している。そして、猫の位置を内から外に移すことを「出す」で表している。また、(13) では、肌を露出している人物を話題にしている。そして、肌を外気に触れるようにすることを「出す」で表している。いずれの場合も、「猫」と「肌」が外の世界にいる、もしくは外の世界に接することで「(外の世界に) ある」と見なせるようになっている。このように、事行の主体が対象を「外の世界にある」ようにすることを「出す」で表している。

また、事行対象が抽象物の場合に「出す」を用いることがある。

- (14) 「また来たの？」勇気を**出して**値段をたずねる。「ハ、ハウマッチ？」

(西牟田靖, 2001, 『世界殴られ紀行』)

- (15) やっと、劇団の会計も、このところ黒字を**出す**ようになっていたのである。(赤川次郎, 1998, 『三毛猫ホームズのクリスマス』)

(14) は値段を聞こうとしている場面での発話である。「値段をたずねる」と

いう行為は、事行主体にとって勇気がなければ実現しない行為である。臆病な気持ちを心の内にとどめ、勇ましい気持ちを表面化させることを「出す」で表している。(15)では、劇団の会計を話題にしている。劇団の収入と支出の差額を計算すると、「黒字」または「赤字」という結果が現れる。そして、計算の結果「黒字」という結果が現れるようにすることを「出す」で表している。いずれの場合も、話し手は事行対象があるか否かを意識していて、事行対象の出現に「出す」で言及している。

そして、事行の出現に言及する場合は動詞を「V ダス」で用いる。そのような場合の発話例には(16)や(17)のようなものがある。

(16) 本はずっと大好きだったけど、二日で462ページいっき読みなんてこれまでなかったわね！ お話が全部終わって結末を知るまで、ハリー・ポッターの本は**読みだしたら**止まらないわ、ぜったい。(ビル・アドラー編, 和爾桃子訳, 2002, 『大好きなハリー・ポッターへ』)

(17) もともと肉はあまり食べず、魚や貝・海藻類を食べていた日本人が肉をたくさん**食べだした**のは、一九六〇年代以降のことで、いまだに増え続けています。近年になって、肉や肉の加工品の多食が生活習慣病の要因だと認識されだしたのですが、それでも肉の消費は増えていますし、魚は減っています。

(魚柄仁之助, 2002, 『うおつか流ぜい肉リストラ術』)

(16)の話し手は「ハリー・ポッターの本を読む」という事行に取りかかるとどうなるかに言及している。そして、(17)の話し手は「肉をあまり食べない時期」と「肉をたくさん食べる時期」を対比している。そして、いずれの場合も、話し手は事行が生起しているか否かを意識して、事行の開始を「V ダス」で表している

また、「V ハジメル」同様、動詞が表す事行が時間幅を持たない場合は「V ダス」が容認されない。

(18) * 太郎が死に出した。

(19) 問題の猿たちは、レストン施設に収容されて数日のうちに**死にだした**。(スティーヴン モース, 1999, 『突発出現ウイルス—続々と出現している新たな病原ウイルスの発生メカニズムと防疫対策を探る』)

(18), (19) では、「死ぬ」という事行の開始に「V ダス」で言及している．太郎の死に言及する場合は，事行は瞬間的で時間幅を持たない．一方，複数の猿たちの死に言及する場合は，事行は時間幅を持って展開すると考えることができる．そして，その場合は，「V ダス」が容認される．

以上のことから，「V ダス」は「展開状態にある事行」の生起のみを意識して事行の開始に言及する場合に用いる形式であるといえる．

4.2. 分析

佐々木(2011) では，国立国語研究所の現代日本語書き言葉均衡コーパス(2009 年度版) を用いて，「V ハジメル」と「V ダス」の使用回数を調査した²⁷．その結果，「V ハジメル」を選択した動詞は異なり語数 974 語（述べ語数 3319 語），「V ダス」を選択した動詞は異なり語数 297 語（述べ語数 2219 語）あった．この結果は，一部の動詞が「V ハジメル」で優先的に用いることを示している．具体的には，主体変化動詞や語彙的複合動詞，そして「住む」や「暮らす」といった動詞は「V ハジメル」で用いられる傾向が見られる．

また，用いられた回数をグラフで示すと次のようになる．

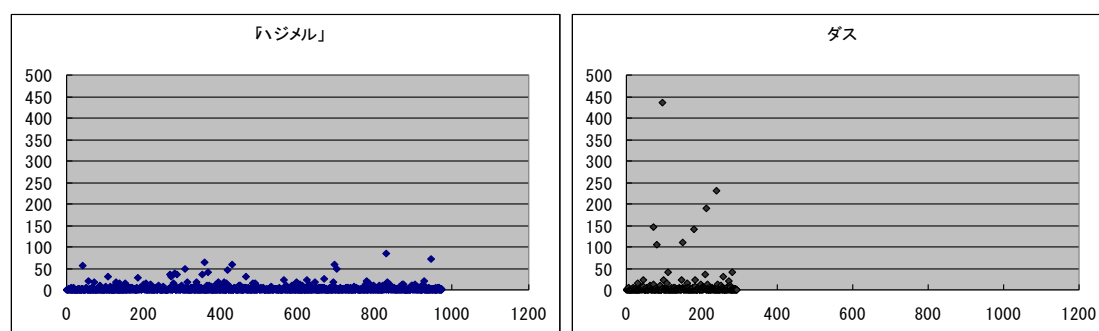


図 1：動詞の使用回数（佐々木, 2011：38）

図 1 の X 軸で前項動詞の種類，Y 軸で前項動詞が「V ハジメル」または「V ダス」で用いられた回数をそれぞれ示している．図 1 は，「V ダス」と親和性が高い動詞があることを示している²⁸．先行研究が指摘する感情の表出に関する動詞，天候に関する動詞，音に関する動詞は「V ダス」で用いる傾向にある．

²⁷ 佐々木(2011) の分析は，書籍のみを分析対象とし，ブログなどは分析対象から外した．

²⁸ 動詞が「V ハジメル」，または「V ダス」で用いられた回数の標準偏差を算出すると，「V ハジメル」は 7，「V ダス」は 34 という結果が得られた．

他方、先行研究は「V ハジメル」が命令形や話し手の意志を表す場面と相性がよいことを指摘している。そして、「V ダス」が不測性が高い事行の開始に言及する場面と相性がよいことを指摘している。

われわれは、これらの傾向が事行の展開と生起のどちらを意識するかに起因していると考え、そのことを明らかにするため、以下では 4.2.1. で「V ハジメル」と親和性が高い動詞、4.2.2. で「V ダス」と親和性が高い動詞をそれぞれ分析する。4.2.3. では「V ハジメル」と親和性が高いとされる命令、使役、意志を表す場合の発話を分析する。4.2.4. では「V ダス」と親和性が高いとされる不測性の高い事行が開始する場面での発話を分析する。

4.2.1. 「V ハジメル」と親和性が高い動詞

本節では、「V ハジメル」と親和性が高い主体変化動詞、語彙的複合動詞、そして「暮らす」や「住む」を扱う。

まず、前項動詞が主体変化動詞の場合である²⁹。佐々木（2011）の調査で、主体変化動詞が「V ハジメル」または「V ダス」で用いられた回数は、それぞれ「V ハジメル」が 701 回、「V ダス」が 124 回だった。

主体変化動詞を「V ハジメル」で用いる発話例には、(20), (21) のようなものがある。

- (20) 隣家のやぶが借りられなくなり、狭い自宅の庭だけになって過密になったせいもあってか、結局この株は、樹齢十二年ほど経ったのち、上部から**腐り始め**、そのまま枯れてしまった。

(山本武臣, 1997, 『あじさいになった男』)

- (21) (=1) しかし弥生時代から急激に人口が**増えはじめ**、平安末期には約七〇〇万人に増えている。(上原春男, 2002, 『創造の原理』)

(20) では、株の様子を時間の流れに沿って追っている。この場合、話し手が「腐る」という事行の展開を意識することは自然なことである。また、(21) では、弥生時代から平安末期にかけて日本の人口がどのように推移するかに言及している。このような場合、人口の増加に展開を意識するのは自然なことである。

²⁹佐々木（2011）の分析では、主体変化動詞で表す事行の開始に言及する際、「V ハジメル」が用いられたのが 701 回であったのに対して、「V ダス」が用いられていたのは 124 回だった。

しかし、主体変化動詞を「V ダス」で用いる場合もある。その場合の発話例には、(22), (23) がある。

- (22) パフィオに限らず、どの洋ランでも水苔が**腐り出す**と、それにつれて根腐れするため、植えかえを行う必要がある。

(江尻光一, 1991, 『洋ラン栽培コツとタブー』)

- (23) (=2) 先ほど私が、一昨年末あたりからまた**ふえ出した**と申し上げたのは、外国人登録法違反事件ではございませんで、密入国そのものでございます。密入国の事案が、摘発数の増大ということを通じて、その背後にかなりの復活と申しますか、かなりの増加が、再増加があるのではないかと疑わしめる状況になっているということでございます。

(22) では、腐敗現象が発生すると何が起こるかに言及している。また、(23) は密入国者数の増加を疑っている大臣の発言である。いずれの場合も、事行の生起のみが伝わればよく、話し手が事行の展開を意識する必要はない。

次に語彙的複合動詞の「V ハジメル」と「V ダス」を扱う³⁰。語彙的複合動詞を「V ハジメル」、または「V ダス」で用いる発話例には次のようなものがある。

- (24) 私は、さっそく包丁を持ってきて、まず長椅子から、布という布を全部**切り取り始めました**。(黒柳朝, 1982, 『チョッちゃんが行くわよ』)
- (25) すぐ間近に迫っていた修道士たちが不意に立ち止まって、あたりをキョロキョロ**見回しだした**。フィリップは身じろぎもせず目だけで、その様子を見ていた。(森詠, 1996, 『戦場特派員』)

姫野 (2001) は、語彙的複合動詞には前項動詞の展開のしかたを後項動詞で表すといった特徴があることを指摘している³¹。実際、(24) の「(布を) 切り

³⁰佐々木(2011)の分析によれば、語彙的複合動詞は「V ハジメル」で116回用いられていたのに対して、「V ダス」で用いられたのは9回であった。

³¹語彙的複合動詞の特徴を姫野(2001)は次のようにまとめている：

- ① 複合動詞は、同一の主語、目的語で構成される、単一の事象を表す。すなわち、対立概念ではなく、類似概念を並立させている。
- ② 二つの動詞は、時間的前後関係を示す場合が多い。
- ③ 「泣き叫ぶ」のように、前項動詞と後項動詞で表す事行が類似する場合、前項動

取る」は、布をただ切るのではなく、布を長いすから取り外すように切ることである。そして、このように前項動詞の展開のしかたを後項動詞で示すことは、事行の展開を意識させやすくする方向で働いていると考えられる。

一方、(25) では、「修道士たちが追跡する場面」から「修道士たちがあたりを見回す場面」への切り替わりに「V ダス」で言及している。二つの場面は事行の生起によって区別される場面である。このような場合、事行の生起が伝われば場面の切り替えを表現することができる。

最後に、「住む」や「暮らす」のように、「生活すること」を表すために用いる動詞を扱う。「住む」と「暮らす」を「V ハジメル」で用いる発話例には次のようなものがある。

(26) 世田谷に**住み始めて**からの磯野家には長い間電話がつかない。

(東京サザエさん学会, 1993, 『磯野家の謎』)

(27) 私は、彼と**暮らし始めて**以来、徐々に、子供に、あるいは、小さな動物に似て来ている。(山田詠美, 1997, 『24・7』)

文の後半で「長い間電話がつかない」と述べていることから分かるように、(26) の話し手は「住む」という事行の展開を意識している。また、(27) の話し手は「(彼と) 暮らす」という事行がどのように展開するかを文の後半で述べている。

佐々木 (2011) の調査では、「住む」の「V ハジメル」は 17 回、「暮らす」の「V ハジメル」は 19 回用いられているのを確認したが、「住む」と「暮らす」も「V ダス」は確認できなかった。しかし、その後の調査で「暮らす」を「V ダス」で用いる (28) のような発話例が見つかった。

(28) 隆一は春生と**暮らしだす**前も、きっと一人で飼い猫を相手に「どうしよう」を毎日繰り返していたのだろう。(小林蒼, 2003, 『みだらな絆』)

(28) では春生と暮らす隆一とそれ以前の隆一を比較している。話し手は事行が生起している段階と生起する前の段階を対比している。したがって、事行の生起のみを意識していると言える。

詞よりも後項動詞の方が程度が甚だしいことが多い。

④ 前項動詞で動きを表し、後項動詞で変化やその結果を表すことが多い。

まず、主体変化動詞が表す事行の開始に言及するとき、新しい状態に向かう事行主体の変化を話し手が意識するのは自然なことである。また、語彙的複合動詞は前項動詞がどのように展開するかを後項動詞で表す動詞である。そのため、話し手の意識が事行の展開に向かいやすい。そして、「住む」や「暮らす」とは、「食べる」、「起きる」など日常生活のさまざまな活動の集合である。ただし、個々の活動は「住む」や「暮らす」とは言えない。そのため、これらの動詞が表す事行が開始する場面では、事行の生起に言及するだけでなく、事行の展開を意識するものである。

以上のことから、「V ハジメル」と親和性が高い動詞は、事行の展開を意識するのが自然な動詞であると言える。しかし、事行の生起のみを意識するのが自然な場合もあって、その場合は「V ダス」も容認されることが分かった。

4.2.2. 「V ダス」と親和性が高い動詞

本節では、「V ダス」と親和性が高いとされる前項動詞を扱う。姫野(1977, 1999)によれば、該当する動詞には以下のようなものがある：

- ・人間の感情に関する動詞
- ・天候に関する動詞
- ・音に関する動詞

まず、人間の感情に関する動詞を扱う³²。人間の感情に関する動詞を「V ダス」で用いる発話例には (29), (30) のようなものがある。

- (29) 少し間があった。社長が**笑い出した**。人を馬鹿にしたような笑いで、よく出来た人間なら、決してしない笑い方である。

(赤川次郎, 1988, 『三毛猫ホームズの騒霊騒動』)

- (30) 栗子はあれ以来、結婚の話がタブーになってしまっている伸との、どこことなく行き詰まった感のある状況を何とかして早く打破しなければと思った。けれど、一度喧嘩をして以来、栗子は彼が**怒り出す**ことを警戒していた。とにかく、今が忙しいのならば、もう少し時機を見て、上手に切り出さなければいけないと思う。

(乃南アサ, 2003, 『パラダイス・サーティ』)

³² 佐々木(2011)の分析では、「笑う」は「V ハジメル」で4回、「V ダス」で110回用いられ、「怒る」は「V ハジメル」で2回、「V ダス」35回用いられていた。

(29) は、社長が笑う場面についての発話である。続きの文で、話し手は社長の笑い方について「人を馬鹿にしたような笑い」、「よくできた人間なら、決してしない笑い方」と言及している。この場合、「笑う」という事行の生起のみが伝われば十分である。また、(30) は、栗子が「怒る」という事行が生起することを警戒している場面での発話である。この場合、事行がどのように展開していくかを意識する必要がない。このように、「怒る」や「笑う」で感情の表出を表す場合、事行主体がどのような感情を抱いているかが伝われば十分なことが多い。そして、事行の生起のみが伝われば十分な場合は、動詞を「V ダス」で用いる。

しかし、事行主体の感情の表出に言及する場合でも、事行の展開を意識する場合がある。

- (31) よほどおかしかったのだろう、しだいに胸を波打たせて**笑い始めた**。彼女は両腕で自分の胸を抱きしめ、身体を上下にゆすって激しく**笑いだした**。(川上健一, 2001, 『翼はいつまでも』)

(31) では、はじめの文では「笑う」を「V ハジメル」で用い、次の文では「V ダス」で用いている。まず、はじめの文では、「しだいに胸を打たせて」という表現で「笑う」という事行がどのように展開していくかに言及している。このように、事行の展開を意識する場合は、動詞を「V ハジメル」で用いる。一方、次の文では、「胸を上下にゆすって笑う」という笑い方をしていることに言及している。このように、どのような笑い方をしているかが伝われば十分であるような場合は、事行の生起のみを意識して動詞を「V ダス」で用いる。

次に、自然現象に関する動詞である³³。自然現象に関する動詞を「V ダス」で用いる発話例には(32), (33) のようなものがある。

- (32) 今にも**雨が降りだし**そうな天気だ。ジトツとしめった、生暖かい空気が、町中にたちこめている。(三田誠広, 1977, 『僕って何』)

- (33) 頭の芯が絞り込むように痛む。五日前に雨が**降り出した**時からそうなのだ。どんよりした頭痛が、貼りついて離れない。

(原田宗典, 1986, 『優しくって少しばか』)

³³ 佐々木(2011)の分析では「降る」は「V ハジメル」で17回用いられ、「V ダス」の形で42回用いられていた。

(32) は雨が降るか降らないかという場面についての発話である。発話時に雨は降っていないが、「ジトッとしめった、生暖かい空気が、町中にたちこめている」という表現から事行の生起を予感していることが伺える。このような場面では、話が事行の展開よりも事行の生起を意識するのが自然である。また、(33) では、頭痛の原因が雨降り現象にあることを述べている。この場合、頭痛の原因である雨降り現象の生起を意識できれば十分である。このように、事行の生起を意識すれば十分であるような場合は、動詞を「V ダス」で用いる。一般に、天候に言及する場合、どのような天気かが伝われば十分で、事行がどのように展開していくかを意識する必要はない。

しかし、事行の展開を意識する場合もあって、その場合は動詞を「V ハジメル」で用いる。

- (34) **降り始め**、たちまち豪雨になった。中庭は水びたしとなり、入鹿の屍は半ば水に浸かった。(三田誠広, 2002, 『炎の女帝持統天皇』)

(34) では、「たちまち豪雨になった」、「中庭は水浸しとなり」といった表現で「雨降り現象」がどのように展開するかを話題にしている。このように、事行の展開を話題にしようとする場合は、展開の開始を「V ハジメル」で表すことができる。

最後に、音に関する動詞である³⁴。音に関する動詞を「V ダス」で用いる例には次のようなものがある。

- (35) 電話が突然**鳴り出す**と、河合勝三はギクッとして、一瞬、心臓の縮むような思いをした。(赤川次郎, 1990, 『親しき仲にも殺意あり』)

(35) は、河合勝三が電話の呼び出し音に驚く場面での発話である。この場合、驚くという事行の原因である「鳴る」という事行の生起が伝われば十分である。通常、電話が鳴るのは周囲の人たちの注意喚起を促すためなので、事行の生起が伝われば十分であることが多い。

しかし、事行の展開を意識する場合もあって、その場合は「V ハジメル」を用いる。

³⁴ 佐々木(2011)の分析では「鳴る」は「V ハジメル」で13回用いられ、「V ダス」の形で30回用いられていた。

- (36) 百円玉を投入し、まず実家の番号を押す。 間を置かず耳の奥で**鳴り始めた**呼出音を、息を詰めて聞く。 五回…十回…二十回までやりすごして、受話器を掛ける。(原田宗典, 1993, 『どこにもない短編集』)

(36) は実家に電話をかける場面についての発話である。後続の文で「鳴る」という事行がどの程度展開するかを述べていることから分かるように、話し手は事行の展開を意識している。このように、事行の展開を意識する場合は、展開の開始を「V ハジメル」で表す。

以上、「V ダス」と親和性が高い動詞を用いる発話例を分析した。まず、感情の表出に関する動詞は、事行主体がどのような感情を抱いているかが伝われば十分な場合が多い。天候に言及する場合、新しい天候が伝わればよい。そして、音の発生に関する動詞は、周囲の人たちに注意喚起を促すために電話やベルなどが鳴ることを表す場合が多い。

以上のことから、「V ダス」と親和性が高い動詞は、事行の生起のみを意識するのが自然な動詞であると言える。しかし、「V ダス」と親和性が高い動詞が表す事行の展開を意識するのが自然な場合もある。その場合は、「V ハジメル」で展開の開始を表すことができる。

4.2.3. 「V ハジメル」・「V ダス」と命令・意志の表現

姫野と今井は「V ハジメル」を命令・意志の表現³⁵と共に用いることはできるが、「V ダス」はそれらの表現と共に用いることができないとしている。

まずは、事行を促す場面で、「V ハジメル」を用いる発話例をみてみよう。そのような場合の発話例には (37) がある。

- (37) 「今日、須田先生は用務員室で召し上がるからいいの。あなたたちだけで**{食べ始めなさい / ??食べ出しなさい}**。」
(皆川鎮枝, 2002, 『兵隊山の人びと一幻の特設高等科国民学校』)

(37) では、聞き手に食べるよう促す場面での発話である。そして、話し手が事行の展開を意識していれば、展開の開始段階に着手するよう聞き手に促すの

³⁵ 今井は、命令や意志の表現の他にも、使役表現とも「V ダス」を用いないと述べている。しかし、使役表現は、「V ダス」だけでなく、「V ハジメル」でも容認されにくい。そのため、小論では使役表現は取り扱わない。

は自然である。しかし、食べるよう促す場面では、事行が生起していればよいという姿勢で発話するのは不自然である。そのため、(37)に「V ハジメル」は適合するが、「V ダス」は適合しない。

次に、話し手の意志を表す文脈で「V ハジメル」を用いる場合である。そのような場合の発話例には (38) や (39) がある。

- (38) ボトルズに「私も職を {探し始めよう / ?探しだそう} と思うのですが…」とかまをかけてみたら、「君には残ってもらいたいから、そんなことはするな」と言われたので、ひとまず安心した。

(照屋純, 2004, 『大学病院が倒産する日』)

- (39) 北海道・宗谷岬をスタート、故郷の沖縄・那覇市をゴールにという気持ちちは以前から持っていた。三月一〇日が六五歳の誕生日なので、できればその日から {歩き始めたい / ?歩きだしたい}。そこで、まず一応の日程を作成した。(石川文洋, 2004, 『日本縦断徒歩の旅』)

(38) で、話し手は職を探そうとしていることを聞き手に伝えようとしている。このような場面では、就職に向けた「探す」の展開を意識して、その開始志向するのは自然なことである。しかし、話し手の目的が事行を生起させることにあるとは考えにくい。そのため、このような場面では、「V ダス」は容認されない。

また、(39) の話し手は、北海道から沖縄まで徒歩で旅をする計画をしている。この場合、旅を計画している話し手にとって、「歩く」という事行の展開を意識して、その開始段階に着手することを望むのは自然なことである。しかし、話し手が事行の展開を意識せずに、事行の生起を望むとは考えにくい。そのため、このような場面では、「V ダス」は容認されない。

しかし、実例を観察すると、事行を促す場面や話し手の意志を表す場面で「V ダス」を用いる発話も確認できる。

- (40) (=3) 「いいですか先生、怒り出さないでくださいよ」と何度も言い含めて彫刻を見てもらう。

(40) では、「怒る」ことを拒む場面での発話である。通常、「怒る」のような人間の感情に関する事行は、事行主体がどのような感情を持っているかが伝わ

ればよい場合が多い。その場合は、事行の生起のみを意識すればよく、「V ダス」が容認される。

次に、(41), (42) は、話し手が自分の意志を表す場面で「V ダス」を用いる場合の発話例である。

- (41) (=4) (話し手は、耕作放棄を出さないための NPO 法人を設立した当時のことを説明している) 考えてばかりいないで**動き出そう**！ そんな思いから、平成 11 年に「棚田フットワーク」を設立しました。中山間地域振興を担当していたころ、机上で「あーだこーだ」言っただけで進展しないことが分かったんです。山間部の生産現場の疲弊は肌身に感じていました。実際に行動することで、むらが元気になる。その「元気」を作りたい。
- (42) (=5) (話し手は、何をするかを決めずに貯金をしていたことに気づいたことを告白している) 何か自分で商売を始めたくてお金を貯め始め、150 万貯まりました。そろそろ**動き出したい**のですが、何をやるかを考えていませんでした。

(41) の話し手は NPO として何の活動もできない状況を抜け出そうとしている。この場合、「動く」という事行が生起して新しい局面に移ることができればよく、事行の展開は話し手の意識にない。また、「実際に行動することでむらが元気になる」という表現からも話し手が意識しているのが事行の生起であって、展開ではないことが分かる。このような場面では、「V ダス」が容認される。

また、(42) の話し手は目標を立てないまま、事行に取りかかろうとしている。この場合、事行がない状況を抜け出すことしか考えていない。そのためには、事行があればそれでよく、展開を意識する必要がない。そして、事行の生起を志向するのが自然な場合は、「V ダス」が容認される³⁶。

以上、事行を促す場面や話し手の意志を表す場面で「V ハジメル」と「V ダス」を用いる発話例を分析した。そのような場面では、話し手が事行の展開を意識するのは自然で「V ハジメル」が容認される。一方、事行の生起のみを意

³⁶ われわれの調査では、生起のみを意識して事行の開始を志向することを表す場面で「V ダス」を選択する動詞は「動く」のみだった。「動く」とは、趣旨に沿った行動を取ることである。そして、趣旨に沿った何らかの行動を取っていれば、「動いている」と言える。「V ダス」が容認されるのも、そのような語彙的な特徴によると考えられる。

識するのは不自然で「V ダス」が容認されにくい。しかし、事行の生起のみを意識するのが自然な場合もあり、その場合は「V ダス」も容認されることが分かった。

4.2.4. 「V ハジメル」・「V ダス」と不測性が高い事行の開始

姫野(1997)は、「不測性を強調する場合は、「だす」のほうが適している」(姫野：98)と述べている。

不測性が高い事行が開始する場面に、動詞の「V ダス」で言及する発話例には(43)がある。

- (43) (話し手がナタポンとその子供と一緒に食事にやってきた場面で) クィティオを注文し待っていると二人前しか持って来ない。ナタポンはそのひとつをわたしに寄こし、残りのひとつを子供にやるのかと思っていたらいきなり自分で**食べた**した。

(熊澤文夫, 2003, 『メーサイ夜話』)

(43) では、ナタポンが、クィティオを予想に反して食べる場面を表している。このように、話し手は「食べる」という事行の予想外の生起を表そうとして「V ダス」を用いている。

しかし、不測性が高い事行に言及する場合でも「V ハジメル」が容認されることがある。(44)はその例である。

- (44) 患者の希望で覚醒状態で手術を行う予定であったので、酸素をマスクで投与しながら S p O₂, P E T C O₂, 血圧, 脈拍などをモニターした。約 20 分ぐらい経過したときに患者は何の前ぶれもなく突然**痙攣し始めた**。古典的な局所麻酔薬中毒であると判断した。

(釘宮豊城, 宮崎東洋編, 2002, 『麻酔・ペインクリニックと医療事故』)

(44) の話し手は手術の時の様子に言及している。そして、話し手は患者の容態がどのように推移するかを意識してる。このような場面では、「痙攣する」という事行が持続型で事行に展開があることがはっきり意識されやすい。そのため、開始する事行の不測性が高くても、「V ハジメル」は容認される。

以上、不測性が高い事行の開始に言及する場合の発話例を分析した。そのよ

うな場合、話し手の意識が事行の生起に向かうのが自然であることが分かった。しかし、話し手の意識が事行の展開に向かうのが自然な場合もあり、その場合は「V ハジメル」が容認されることが分かった。

4.3. 開始アスペクトの下位分類

以上の分析から、日本語の開始アスペクトは事行の展開を意識する場合と、事行の生起のみを意識する場合に下位分類できそうだ。

まず、開始する事行を P とすると、事行の展開を意識する場合の開始アスペクトは次のように説明される。

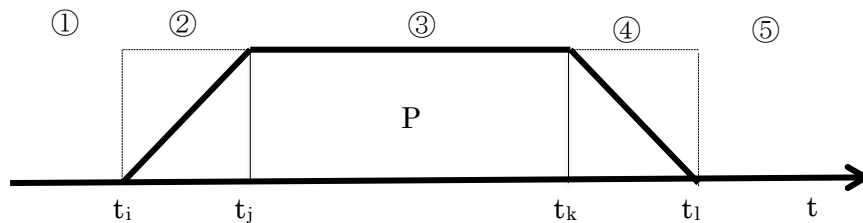


図 1：事行の展開を意識する場合の開始アスペクト

t を時間の流れ、 t_i, t_l をそれぞれ P の開始点と終了点とする。そして、 t_i 以前を P の開始前の段階 (①)、 t_i から t_j までを P の開始段階 (②)、 t_j から t_k を P の持続段階 (③)、 t_k から t_l を P の終了段階 (④)、 t_l 以後を終了後の段階 (⑤) とする。 P の展開を意識するとき、話し手は②、③、④の段階を区別する。そして、開始に言及する場合は、②～④の内②の段階を示す。小論では、そのような場合の開始アスペクトを「始動アスペクト」と呼び、次のように定義する。

- (45) 始動アスペクトとは、 P の展開を意識する場合の開始アスペクトである。日本語では「V ハジメル」で示す。

一方、事行の生起を意識する場合の開始アスペクトは次のように説明される。

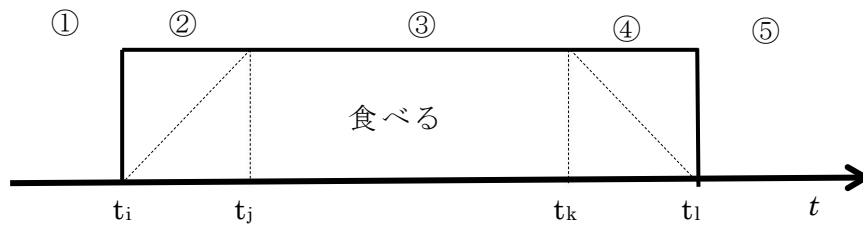


図 2：事行の生起を意識する場合

図 2 の記号は図 1 と同じである．事行の生起のみを意識して開始に言及するとき，話し手は事行がない段階（①）と事行がある t_i 以降の段階を区別する．そして，その場合②～④の段階の区別は背景化し，いずれの段階も「事行あり」の段階として意識される．小論では，事行の生起のみを意識する場合の開始アスペクトを「起動アスペクト」と呼び，次のように定義する．

- (46) 起動アスペクトとは，事行の生起のみを意識する場合の開始アスペクトである．日本語では「V ダス」で示す．

4.4. この章のまとめ

本章では，日本語の開始アスペクトを示すために用いるとされる統語的複合動詞「V ハジメル」と「V ダス」を分析した．

4.1. では，「V ハジメル」と「V ダス」を用いる場合に，事行の開始を話し手がどのように捉えているかを明らかにした．「V ハジメル」を用いる場合，話し手は事行の展開を意識する．一方，「V ダス」を用いる場合，話し手は事行の生起のみを意識する．

4.2. では，实例を観察して，事行の展開を意識するか，事行の生起を意識するかによって「V ハジメル」と「V ダス」を使い分けることを確認した．まず，4.2.1. では「V ハジメル」と親和性が高い動詞を扱った．そして，「V ハジメル」と親和性が高い動詞は，事行の展開を意識するのが自然な動詞であることを確認した．一方，4.2.2. では「V ダス」と親和性が高い動詞を扱った．そして，「V ダス」と親和性が高い動詞は，事行の生起のみを意識するのが自然な動詞であることを確認した．また，4.2.3. では，先行研究が指摘する，「V ハジメル」と親和性が高いとされる場面での発話例を分析した．そして，それらの場面では，事行の展開を意識するのは自然だが，事行の生起のみを意識するのは不自然な場面であることを示した．さらに，4.2.4. では，先行研究が「V ダ

ス」と親和性が高いとする不測性が高い事行の開始に言及する場合の発話例を扱った。そして、そのような場合、話し手の意識が事行の生起に向かうのが自然であることが分かった。

4.3. では、開始アспектについて、事行の展開を意識する場合の始動アспектと生起のみを意識する場合の起動アспектの二つに大別でき、それぞれ「V ハジメル」と「V ダス」で表すことを示した。

第 5 章 commencer inf. と se mettre à inf. の使い分け

本章の目的は、commencer à inf. と se mettre à inf. の使い分けを明らかにすることである。

commencer à inf. または se mettre à inf. の主体を S とし、開始する事行を P とする。

第 4 章で見たように、日本語の事行の開始アスペクトは始動アスペクトと起動アスペクトに下位分類することができる。フランス語の開始アスペクトも同じように下位分類することができ、commencer à inf. と se mettre à inf. は、P の始動アスペクトを示すか、起動アスペクトを示すかによって使い分けると考えられる。

このような見通しに立って、5.1. で commencer à inf. と se mettre à inf. が示す開始アスペクトに関する仮説を提案する。5.2. でそれぞれの表現形式と親和性が高い動詞を分析し、われわれの仮説が妥当であることを示す。

5.1. commencer à inf. / se mettre à inf. と始動・起動アスペクト

第 2 章で見たように、commencer à inf. は話し手が P の内側に視点を置いて、展開の開始を表す表現である。このことから、commencer à inf. は P の始動アスペクトを示す開始アスペクトマーカであると言える。

一方、第 3 章で見たように、se mettre à inf. は S が新しいありかたである P に移ることを表す表現形式である。se mettre à inf. を用いる場合、S が P に移ることが分かればよいので、P については展開を意識する必要がない。

また、se mettre à inf. を用いる場合に生じるとされる表現効果も、話し手が se mettre à inf. を用いるのが P の生起を意識する場合であることを示している。突発的な事行や場違いな事行の開始に言及する場合、S の P への移行が伝わればよい。また、期待する事行が開始しない場面では、S が期待するありかた P に移るか否かが問題になる。いずれの場合も、P の生起が分かればよく、P の展開を意識する必要はない。これらのことから、se mettre à inf. は P の起動アスペクトを示す開始アスペクトマーカであると言える。

以上のことから、フランス語の開始アスペクトも始動アスペクトと起動アスペクトに下位分類することが可能で、そのことが commencer à inf. と se mettre à inf. の使い分けに関与していると考えられる。そして、次のような仮説を立てることができる。

- (1) *commencer à inf.* は P の始動アスペクトを示す開始アスペクトマーカである。
- (2) *se mettre à inf.* は P の起動アスペクトを示す開始アスペクトマーカである。

次節では、(1) と (2) の仮説が妥当であることを示すために、*commencer à inf.* と *se mettre à inf.* のそれぞれと親和性が高い動詞を分析する。そして、*commencer à inf.* と親和性が高い動詞は展開を意識するのが自然な動詞で、*se mettre à inf.* と親和性が高い動詞は生起のみを意識するのが自然な動詞であることを指摘する。

5.2. *commencer à inf.* / *se mettre à inf.* の使い分け

われわれのコーパス³⁷では、*commencer à inf.* は 42.635 回、*se mettre à inf.* は 21.834 回用いられている。*commencer à inf.* または *se mettre à inf.* に用いられている動詞の総数は 2.685 である。

(3) は、*commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使用頻度を比較して、*commencer à inf.* の形式で用いられていた回数が多い動詞である。

³⁷ 分析の対象は、収集したさまざまなジャンルの小説 752 冊、デジタルアーカイブ版 *Le Monde* (1996 - 2004 年版)、*Le Monde diplomatique*, *Le Point*, *Libération*, そして 65 作品分の映画や劇のシナリオである。

(3)

動詞	commencer à inf. (回)	se mettre à inf.(回)	動詞	commencer à inf. (回)	se mettre à inf.(回)
faire	2098	410	porter	284	29
être	1317	11	dire	292	38
avoir	971	36	perdre	253	15
prendre	841	38	trouver	241	3
travailler	755	80	poser	256	24
comprendre	633	5	sortir	248	21
sentir	471	9	descendre	272	59
demander	367	15	apparaître	221	9
mettre	349	3	croire	253	51
inquiéter	330	2	intéresser	201	6
devenir	330	6	monter	224	38
voir	333	25	donner	208	36

(3) から，事行の開始に言及する際，次のような動詞は **commencer à inf.** と親和性が高いと言える³⁸：

- ・ être や avoir のような状態に関する動詞；
- ・ descendre, apparaître, monter のような変化に関する動詞；
- ・ comprendre, voir, sentir, trouver, croire のような認知や思考に関する動詞．

一方，(4) は **se mettre à inf.** が用いられていた回数が多い動詞である．

³⁸ commencer à inf. と親和性が高い動詞には，faire や prendre のような多義的な動詞や，s'inquiéter や se demander, s'intéresser のような代名動詞がある．しかし，faire と prendre のような基本動詞は，用法が多く基本義が把握しづらい．そのため，これらの動詞を扱うにはより慎重に議論をする必要がある．また，代名動詞が se mettre à inf. と相性がよくないことを理解するためには代名動詞の働きを考慮する必要がある．そこで，小論では取り扱わないものとする．

(4)

動詞	commencer à inf. (回)	se mettre à inf.(回)	動詞	commencer à inf. (回)	se mettre à inf.(回)
rire	41	1486	battre	162	290
pleurer	59	874	briller	32	148
courir	149	798	vibrer	22	127
hurler	38	628	tousser	18	113
trembler	114	618	clignoter	10	96
crier	70	424	gémir	16	101
chanter	102	295	couler	86	166
danser	61	248	arpenter	38	117
sonner	23	197	aboyer	9	86
marcher	118	266	tourner	249	325
sourire	23	160	tournoyer	8	82
sangloter	7	142	pousser	95	157

(4) から，次のような動詞は **se mettre à inf.** と親和性が高いことが分かる：

- ・ **rire, pleurer, hurler** のように感情の表出に関する動詞；
- ・ **sonner** や **crier** のような音の発生に関する動詞；
- ・ **marcher** や **courir** のような移動の様態に関する動詞．

以上のことから，**commencer à inf.** と **se mettre à inf.** とでは，親和性が高い動詞が異なることが分かる．このような差異は **commencer à inf.** で **P** の始動アスペクトを示し，**se mettre à inf.** で **P** の起動アスペクトを示すことに関係していると考えられる．そのことを確認するために，5.2.1. では **commencer à inf.** と親和性が高い動詞を扱い，5.2.2. で **se mettre à inf.** と親和性が高い動詞を扱う．

5.2.1. commencer à inf. と親和性が高い動詞

本節では，**commencer à inf.** と親和性が高い動詞が，事行の始動アスペクトを示すのが自然な動詞であることを明らかにすることを目指す．

まず，**commencer à inf.** と親和性が高い動詞には **être** と **avoir** がある．しかし，**être** や **avoir** の **commencer à inf.** は常に容認されるわけではなく，

(5) のような場合は容認度が低い.

- (5) ?? Je suis fatigué. **J'ai commencé à être fatigué**, il y a une heure.

(5) の話し手にとって、疲労している状態という P は均質型の事行である. つまり、(5) の場合、P は時間が経過しても変化が想定されないタイプの事行であり、展開を意識するような場面は考えにくい. この場合の P は展開を意識するのが不自然な事行であると言え、そのような P については commencer à inf. の容認度が低いことになる.

しかし、être や avoir を commencer à inf. で用いても容認度が下がらない場合がある. そのような場合の発話例には (6), (7) がある.

- (6) Marcelin Grousselas souffle au téléphone : « C'est dur, je **commence à être fatigué**. Mais je tiendrai : il faut interpeller les gens sur les dangers du nucléaire, montrer que la vie a du sens, porter le message collectif. » (*Le Monde*, 2004/07/19 : 7)
- (7) (話し手は 30 年たばこを毎日一箱以上吸っている. しかし、46 歳になって、癌で一生を終えることが怖くなってきている) Fumer m'horripile. Je **commence à avoir peur de finir avec un cancer** et en plus maintenant cela coûte vraiment trop cher », raconte-t-elle à Micheline Devienne, médecin tabacologue.

(*Le Monde*, 2004/01/05 : 6)

(6) の P も (5) と同じく疲労状態であるが、話し手は S (自分自身) の状態が活動 (interpeller les gens) にともなって変化しつつある状況において P を捉えている. (6) の P は、時間の中で変化が想定される不均質型の事行であり、展開を意識することが自然であると考えられる. (6) の S の状態変化は図 3 のように示すことができる.

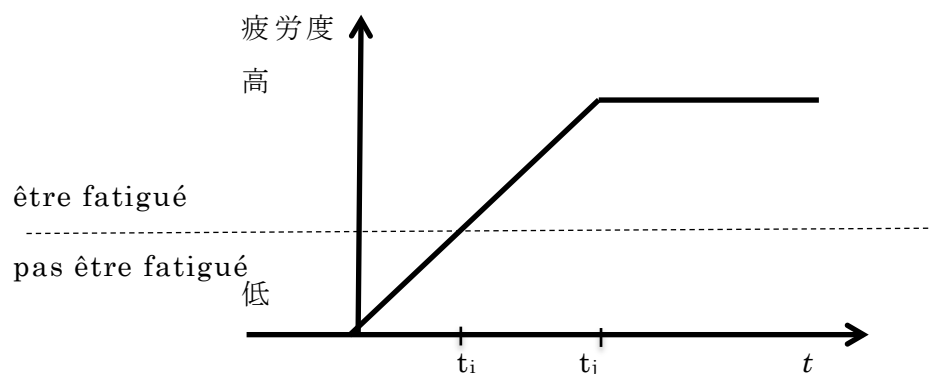


図 3 : commencer à être fatigué

図 3 では、時間の流れを横軸 (t) で、 S の疲労の度合いを縦軸で示している。また、 S が P の展開状態にあるか否かの境界を点線で示している。そして、変化の過程で P の状態にあると認められる最初の時点をも t_i で、その後高まった疲労度が一定の度合いで安定する時点をも t_j で示している。発話時点において、話し手は S が P の展開状態にあると捉えている。そして、 P のもととなる活動 (*interpeller les gens*) が継続しているために P は変化し続けている。すなわち、 P は不均質型の事行であり、話し手が展開を意識するのは自然なことである。

また、(7) の P は喫煙習慣からくる「(癌で死ぬことが) 怖い」という状態である。発話時点において、話し手は S (自分自身) が P の展開状態にあると捉えている。そして、発話時点において喫煙習慣は継続しているので、 P は変化し続けている。そのため、この場合の P は不均質型の事行であると言え、話し手が展開を意識するのは自然なことである。

このように P が変化中の段階にあり P の始動アスペクトを示すのが自然な場合は、*être* や *avoir* といった状態動詞の *commencer à inf.* が容認される³⁹。

一方、(6), (7) の場面で *être* や *avoir* を *se mettre à inf.* で用いると容認

³⁹ Franckel(1989) は、*commencer à inf.* は図 3 の t_j (*vraiment I*) を示す表現であると指摘している： (...) *commencer à P* marque le premier point d'une zone homogène (*vraiment I*) renvoyant au complémentaire ouvert du fermé correspondant à *pas vraiment I*. (Franckel, 1989 : 145)

しかし、われわれは *commencer à inf.* で示すのは *rien à voir avec I* (t_i 以前) と *vraiment I* (t_j 以降) の間の *pas vraiment I* の段階を示す形式であると考え。その根拠として、 P の変化が継続している段階に言及するために、(6) と (7) で S *commencer à inf.* を複合過去形ではなく、現在形で用いていることが挙げられる。

度が下がる.

- (6') ?? Marcelin Grousselas souffle au téléphone : « C'est dur, je **me mets à être fatigué**. Mais je tiendrai : il faut interpeller les gens sur les dangers du nucléaire, montrer que la vie a du sens, porter le message collectif. »
- (7') ?? Fumer m'horripile. Je **me mets à avoir peur de finir avec un cancer** et en plus maintenant cela coûte vraiment trop cher », raconte-t-elle à Micheline Devienne, médecin tabacologue.

上に述べたように, (6), (7) は, 話し手が S (自分自身) の状態が変化しつつあると捉えている場面であり, P (疲労している状態, 怖いと思う状態) の展開を意識するのが自然な場面である. したがって, (6'), (7') のように P に移ること (起動アспект) を表す *se mettre à inf.* を用いることは容認されないのである.

être や *avoir* の *se mettre à inf.* が容認されるのは, (8) や (9) のような場合である.

- (8) (テレビでドイツ対イランの試合を観戦した時のことを語っている)
Moi, je m'en fous de l'équipe d'Allemagne, mais à entendre les commentaires des journalistes qui espéraient tellement une victoire des Iraniens, je **me suis mis à être content** que l'Allemagne ait gagné." (*Le Monde*, 1998/06/29 : 20)
- (9) (10 年間アルツハイマー病を煩っている夫が発病した当時の様子を妻が語っている) Dans son entreprise, tout à coup, il **s'est mis à avoir peur** devant les responsabilités; en conduisant, il perdait l'itinéraire de lieux très familiers; à table, il ne participait plus aux conversations, évitait de prendre parti. (*Le Monde*, 2003/09/22 : 9)

(8) の話し手 (S) は, イランの勝利を望む実況を聞いているあいだに, 「ドイツの勝利が嬉しい」という新しいありかた (P) に移ったことを語っている. そして, (9) の話し手の夫 (S) は, ある日突然「怖い」という新しいありかた (P) に移る. いずれも S が P にない時とある時の対比を意識するのが自然な

場面である．このような場面では，P の生起が分かれば十分である．

次に，変化動詞を見る．(10)-(12) は *monter* を *commencer à inf.* または *se mettre à inf.* で用いる場合の発話例である．

- (10) Depuis le 1er juin, l'eau **a commencé à monter**. Elle se hissera vers la mi-juin autour de 135 mètres au-dessus du niveau de la mer. Mais il faudra attendre 2009 pour que le gigantesque lac - plus grand que la Suisse - atteigne son étiage définitif, à 175 mètres.

(*Le Monde*, 2003/06/18 : 15)

- (11) Au sommet de l'escalier qui dégringole vers le bas du port, Diane regarde Pierre, et **commence à descendre**. A la troisième marche, elle se retourne pour dire:

— Fais attention, ça glisse un peu.

(Clavel, B., 1966, *Hercule sur la place*)

- (12) Elle raconte le traumatisme subi par sa famille : "lorsque la rivière **s'est mise à monter très vite** et que le rez-de-chaussée de notre maison a disparu sous deux mètres d'eau, j'ai accepté d'être évacuée par un bateau pneumatique des pompiers.

(*Le Monde*, 1997/07/25 : 2)

- (13) — Allons ! fit Avan. Nous n'avons pas le temps de discuter de légendes !

Il traversa la salle à grands pas et, franchissant une porte, il **se mit à descendre** un escalier. Lorsqu'il arriva en bas, les autres l'entendirent pousser une exclamation.

(Moorcock, M., 1999, *Le navigateur sur les mers*)

(10) ではダム の注水計画がどのように進行するかを説明しており，話し手は *monter* で「水位が上昇する」という事行 (P) を表している．ダム の水位が 6 月中旬に海拔 135 メートルに達し，2009 年に 175 メートルに達すると述べていることから，話し手がダム の水位が時間の中でどのように変化していくかを意識していることが分かる．このような場合，話し手が P の展開を意識するのは自然なことである．また，(11) では Diane が港に向かって階段を降りる場面に言及している．話し手は *descendre* で「(階段を) 降りる」という事

行 (P) を表している。三段目で注意するよう忠告するために振り返ることを述べていることから、話し手が P の展開を意識していることが分かる。そして、(10), (11) のように、P の始動アスペクトを示すのが自然な場合は *commencer à inf.* を用いる。

一方、(12) では、消防署の救助に応じるきっかけが川の増水と玄関の水没だったことを説明している。話し手は *monter* で「(川が) 増水する」という事行 (P) を表している。この場合、きっかけとなる P の生起が伝われば十分である。また、(13) では *Avan* (S) が部屋を通り抜けた後、階段を降りる場面に言及している。話し手は *descendre un escalier* で、「階段を降りる」という事行 (P) を表している。先行文脈で話し手は「発言する」、「部屋を通り抜ける」といった S のありかたの推移に言及している。話し手は動詞を単純過去形で使い、それぞれの事行の完結アスペクトを示している。そして、P の開始に言及する場合も、P の生起を意識して「階段を降りる」というありかたに移ることに言及するのが自然である。そして、(12), (13) のように話し手が P の起動アスペクトを示すのが自然な場合は *se mettre à inf.* を用いる。

最後に、認知動詞の *comprendre* や *voir* を見る。*comprendre* と *voir* を *commencer à inf.* の形式で用いる発話例には(14)-(17) がある。

- (14) Selon M. Bush, les gouvernements du Proche-Orient *ont commencé à comprendre* que « la dictature militaire et la théocratie sont le plus sûr chemin vers nulle part », mais il leur reste beaucoup d'efforts à faire afin de cesser de « persister dans les erreurs passées et de blâmer les autres » pour le retard accumulé dans des pays qui bénéficient, pourtant, de riches ressources pétrolières. (*Le Monde*, 2003/08/11 : 3)
- (15) (ユーロ導入によって大手金融機関としてどのように対応するかを記者に尋ねられて、戦略部門の担当者が回答している) Nous *avons commencé à voir les Bourses européennes* et nous comparons entre elles les sociétés européennes appartenant à un même secteur. (*Le Monde*, 1998/12/30 : 12)
- (16) (王子さまがきつねとの対話を通して *apprivoiser* の意味を理解できてきた場面で) Je pense que je *commence à comprendre*, dit le petit prince. Il y a une fleur... je crois qu'elle m'a apprivoisé...

(de Saint-Exupéry, A., 1946, *Le Petit Prince*)

- (17) (Jean-Marie Straub と Danièle Huillet がどのように映画を制作するかについて, Danièle Huillet が語っている) *Durant la première phase, il(=Jean-Marie Straub) cherche, il peine, à un moment il dit : "Je **commence à voir quelque chose**." Les gens disent : "Straub travaille avec les mots", c'est faux. Il cherche les images.*

(*Le Monde*, 1999/09/15 : 34)

comprendre は「理解すること」または「理解している状態」を表し, *voir* は「見ること」または「見えている状態」を表す. (14) の *comprendre* が表す事行は「理解する」という事行で, 「理解している状態」に向かう S の状態変化である. 話し手は P の展開を意識して P の開始を *commencer à inf.* で表している. また, (15) の *voir* は「見ること」という事行である. 話し手は大手金融機関 (S) の見方の変化を時間の流れに沿って追っている. このように, 時間の流れの中での展開を意識する場合, その開始を表すために *commencer à inf.* を用いている.

一方, (16) の *comprendre* が表す事行は「理解している状態」(P) という事行で, 状態型の事行である. 発話時点において, S は *apprivoiser* の意味をぼんやりと理解しており, 話し手は S が認知行為を行っていると捉えている. しかし, *je crois qu'elle m'a apprivoisé* と述べていることから分かるように, 話し手はまだ状態の変化が継続していると見ている. また, (17) の *voir* は「(映画のイメージが) 見えている状態」(P) を表している. 映画のイメージは, Jean-Marie Straub の様々な試みによって徐々に鮮明になっていく. 発話時点において, S には作品のイメージが見えてきている. しかし, この段階はあくまで第一段階 (*première phase*) なので, 制作の過程でより鮮明に見えていくことになる. いずれの場合も, P は変化し続けている. そのため, 話し手が展開を意識して, 事行の始動アスペクトを示すのが自然である.

一方, 認知動詞を *se mettre à inf.* の形式で用いる発話例には (18) や (19) がある.

- (18) *Le message est difficile, mais il est temps que les gens **se mettent à comprendre** les données scientifiques », explique Blair Palese, porte-parole de la manifestation. (*Le Monde*, 27/10/2009 : 4)*

- (19) Je ne peux plus aller faire mes courses, dit-elle. C'est comme si les gens **s'étaient mis à voir** en moi une championne alors qu'ils ne me considéraient jusque-là que comme une bonne joueuse du Top 10. (*Le Monde*, 2004/01/19 : 18)

(18) の人々(S) は、発話時には科学データを理解していない。そして、「データを理解する」というありかたに人々に移ることを **se mettre à comprendre** で表している。また、(19) の人々 (S) は、これまで話し手をチャンピオンとして見ていなかった。そして、話し手は「チャンピオンとして見る」というありかたに人々に移ることを **se mettre à voir** 表している。いずれの場合も S の P への移行が伝わればよく、P の起動アスペクトを示せば十分である。

また、**comprendre** や **voir** で「理解している状態」や「見えている状態」を表す場合、**se mettre à inf.** の容認度が下がる。

- (16') ?? Je pense que je **me mets à comprendre**, dit le petit prince. Il y a une fleur... je crois qu'elle m'a apprivoisé...

- (17) ? Durant la première phase, il(=Jean-Marie Straub) cherche, il peine, à un moment il dit : "Je **me mets à voir quelque chose**."

(16) と (17) の話し手は「理解している状態」や「見えている状態」を S に認めている。しかし、いずれの場合も話し手は S の状態変化が継続していると見ていて、そのため、S が P に移ることに言及するだけでは不十分で、P の展開を意識する必要がある。このように、P の起動アスペクトを示すだけでは不十分な場合、**se mettre à inf.** は容認されない。

以上、**commencer à inf.** と親和性が高い動詞を用いる実例を観察した。(3) に示した **commencer à inf.** と親和性が高い動詞は、P の開始に言及する際、始動アスペクトを示すのが自然な動詞であることが分かった。このことから、**commencer à inf.** は P の始動アスペクトを示す開始アスペクトマーカであると言える。

5.2.2. **se mettre à inf.** と親和性が高い動詞

本節では、**se mettre à inf.** と親和性が高い動詞が、起動アスペクトを問題にすることが自然であるような事行を表す動詞であることを明らかにする。

まず、*se mettre à inf.* と親和性が高い動詞には *rire* や *pleurer* のような感情の表出を表す動詞がある。

rire や *pleurer* を *se mettre à inf.* で用いる発話例として (20), (21) が挙げられる。

- (20) « Il a raison, dit le couturier. C'est bien plus évocateur. — De quoi ? » dit Paule froidement. Ils la regardèrent. « De rien. De rien du tout. » Et il ***se mit à rire tout seul***, d'un rire si gai que Paule tourna la tête pour ne pas s'y mêler.

(Sagan, F., 1959, *Aimez-vous Brahms*)

- (21) (話し手はある少年が新聞を買いに行ったときの様子を語っている)
Au coin du boulevard, il a hésité très longtemps, puis il a traversé le pont pour acheter un journal du soir. En revenant, il s'est arrêté pas loin de moi, il a regardé la première page du journal et il ***s'est mis à pleurer***.

— A pleurer ? dit M. Lamy.

(Cesbron G., 1954, *Chiens perdus sans collier*)

(20) ではデザイナーが楽しそうに笑いだす場面に言及している。また、(21) では少年が新聞の 1 ページ目を見て泣きだしたことを報告している。話し手は、S が「笑う」や「泣く」といった P に移ることを *se mettre à inf.* で表している。通常、「笑う」や「泣く」といった事行の開始に言及する場合、S が抱いているのがどのような感情であるかが伝わればよく、事行の展開を意識するには至らないものである。つまり、これらの動詞は、開始に言及する際、P の起動アスペクトを示すのが自然な動詞であると言える。そして、S が P に移ることを表す場合も、「S が笑っていること」、または「S が泣いていること」が伝わればよく、展開を意識するには至らない。

次に、*sonner* や *crier* のような音の発生に関する動詞を見る。*sonner* または *crier* を *se mettre à inf.* で用いる場合の発話例には (22), (23) がある。

- (22) Alors que le joueur de tennis John McEnroe dispute un match serré, le téléphone portable d'un spectateur ***se met à sonner***. Celui-ci décroche, répond. (*Le Point*, 1996/03/09 : 76)

- (23) Vêtu d'une chemisette à manches courtes et d'un pantalon gris, le quinquagénaire transpire à grosses gouttes et, en continuant à bourrer de coups de pied les doigts, le dos des mains et les mollets du garçon, *il se met à crier* :
— Au voleur ! Au voleur ! (Maruya, S., 1991, *Rébellions solitaires*)

(22) では、テニスで接戦が繰り広げられている場面を話題にしている。このような場面では電話が鳴ることは望ましいことではない。それにもかかわらず、電話が「鳴る」というありかた (P) に移ることを *se mettre à inf.* で表している。

また、(23) では、泥棒を捕まえようとしている場面である。そして、S が周囲の注意を引くために、「叫ぶ」というありかたに移ることを *se mettre à inf.* で表している。いずれの場合も、S が P に移ることが伝われば、P がどのように展開するかを意識する必要はない。

「鳴る」や「叫ぶ」といった事行が開始するのは、周囲の人たちに注意喚起を促すためであることが多い⁴⁰。そして、そのような P の開始に言及する場合は、P の起動アスペクトを示すのが自然であると言える。

最後に、移動の様態に関する動詞である *courir* や *marcher* を扱う。*courir* や *marcher* が開始する場面について言及する場合に *se mettre à inf.* を用いる発話例には (24), (25) がある。

- (24) (話し手は伯母とともに爆撃におびえて農場にいる。そして、叔母は外出している息子を探しに行こうとしている) Elle voudrait ouvrir le portail de la ferme et partir à sa recherche, mais je la retiens.
J'aurais peur, sans elle. Mais elle *se met à courir* et monte sur le toit. J'essaie de la suivre, mais je tombe de l'échelle, mes jambes ne me soutiennent plus. (*Le Monde diplomatique*, 1988/05 : 26-27)

- (25) (Harry と Dumbledore は話しながら歩いている)

" (...) Je l'ai laissé avec Viktor Krum.

— Avec Krum ? répéta Dumbledore d'un ton brusque. Il *se mit à*

⁴⁰ ただし、*crier* は恐怖や怒りなどの感情によって叫び声をあげることを表す場合に用いることがある。しかし、その場合も、S がどのような感情を抱いているかが伝われば十分で、事行の展開を意識する必要がないことには変わりない。

marcher encore plus vite, obligeant Harry à courir pour ne pas se laisser distancer. (J.K. Rowling, 2007, *Harry Potter, tome 4 ; Harry Potter et coupe de feu*)

(24) の話し手は叔母がそばにいてくれることを望んでいる。そして、叔母 (S) がそばを離れる「走る」というありかた (P) に移ることを *se mettre à inf.* で表している。(25) では S が歩く速度を上げることに言及している。そして、S が「より早く歩く」というありかた (P) に移ることを *se mettre à inf.* で表している。いずれの場合も、話し手は S の P への移行を表そうとしている。

「歩く」や「走る」といった動詞は、S がどのように移動するかを表す動詞である。そして、事行の開始に言及する際は P の起動アスペクトが伝われば十分な場合が多い。

ところで、*se mettre à inf.* と親和性が高い動詞が表す P の始動アスペクトを示すのが自然な場合もある。(26)-(28) はそのような場合の発話例である。

- (26) On s'est tous mis à rigoler ; alors Agnan **a commencé à pleurer**, il a dit qu'on était tous des méchants, qu'on se moquait toujours de lui et qu'il se plaindrait à la maîtresse et qu'on serait tous punis et qu'il ne dirait plus rien et que ça serait bien fait pour nous.

(Goscinnny, R., 1961, *Les Récres du Petit Nicolas*)

- (27) Le téléphone **commença à sonner**. Becker avait estimé à cinq sonneries le seuil de tolérance maximum. Mais il en fallut dix-neuf pour que la secrétaire décroche.

(Brown, D., 1998, *Forteresse digitale*)

- (28) (1961 年 10 月 17 日のアルジェリア人虐殺事件についての記事で) Saad Ouazen, jeune Algérien aux moments des faits, raconte :
"Dans la soirée, on **commence à marcher à pied** de Saint-Denis jusqu'à Paris. (*Le Monde* : 1997/10/20 : 7)

(26) では、Agan が泣きながら言ったことを時間の流れに沿って述べている。また、(27) では電話の相手である秘書が何コール目で受話器を取るかを話題にしている。そして、(28) では Saint-Denis から Paris まで徒歩で向かう場面について言及している。いずれも、P の生起だけでなく、展開を意識して

開始に言及するのが自然な場面である．このように，P の始動アスペクトを示すのが自然な場合は *commencer à inf.* を用いることが分かる．

以上，*se mettre à inf.* と親和性が高い動詞を用いる実例を観察した．(4) に示した動詞は，P の開始に言及する際，起動アスペクトを意識するのが自然な動詞であることが分かった．このことから，*se mettre à inf.* は P の起動アスペクトを示す開始アスペクトマーカであると言える．

5.2.3. まとめ

本節では，5.1. でわれわれが立てた *commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使い分けに関する仮説の妥当性を示すことを目指した．そのために，*commencer à inf.* と親和性が高い動詞と *se mettre à inf.* と親和性が高い動詞の実例を分析した．

その結果，*commencer à inf.* と親和性が高い動詞は，P の展開を意識して開始に言及するのが自然な動詞であることが分かった．そして，*se mettre à inf.* と親和性が高い動詞は，P の生起のみを意識して開始に言及するのが自然な動詞であることが分かった．

以上のことから，*commencer à inf.* で P の始動アスペクトを示し，*se mettre à inf.* で起動アスペクトを示すとするわれわれの仮説の妥当であると言える．

5.3. この章のまとめ

本章では，*commencer à inf.* と *se mettre à inf.* を開始の捉え方に応じて使い分けることを明らかにした．

まず，5.1. で次の仮説を提案した．

- (29) *commencer à inf.* は P の始動アスペクトを示す場合に用いる開始アスペクトマーカである．
- (30) *se mettre à inf.* は P の起動アスペクトを示す場合に用いる開始アスペクトマーカである．

次に，この仮説の妥当性を検証するために，5.2. で各形式と親和性が高い動詞の特徴を明らかにし，その要因を探った．*commencer à inf.* と親和性が高い動詞は，P の展開を意識して開始に言及するのが自然な動詞であることが分か

った．一方，*se mettre à inf.* と親和性が高い動詞は，P の生起のみを意識して開始に言及するのが自然な動詞であることが分かった．

以上のことから，われわれの仮説が妥当であることが裏付けられた．

結論

小論では、事行の開始アスペクトマーカ― *commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使い分けを明らかにした。

第1章では、アスペクトがどのような文法範疇かを明らかにし、開始アスペクトマーカ―を定義した。アスペクトとは、事行の展開をどのように捉えているかを表す文法範疇である。そして、事行の展開の捉え方には、話し手の視点の置き方と事行の展開段階に分類できる。事行の展開段階としては、以下の五つを区別することができる。

- ①：将前アスペクト (*proximité d'avant*) … 事行が生起する直前の段階
- ②：開始アスペクト (*aspect inchoatif*) … 事行の開始段階
- ③：持続アスペクト (*aspect cursif*) … 事行の持続段階
- ④：終了アスペクト (*aspect terminatif*) … 事行の終了段階
- ⑤：結果アスペクト (*aspect résultatif*) … 事行が完了した直後の段階

そして、開始アスペクトマーカ―とは、開始アスペクトを示す表現形式である。一般に、事行の開始アスペクトは迂言法、動詞の活用形、副詞、動詞の語義によって示すとされている。しかし、われわれは *commencer à/de inf.* と *se mettre à inf.* だけが開始アスペクトマーカ―であるという立場を取ることを確認した。

第2章では、*commencer à inf.* を用いる場合に *inf.* の事行の開始アスペクトをどのように示すかを明らかにした。まず、他動詞の *commencer* は、事行の展開を意識する場合に、その開始を表すために用いることを明らかにした。そして、*commencer* の対象を不定詞句で表す場合、視点を事行の内側に置くときは前置詞 *à* を用いる *commencer à inf.* で、外側に置いて事行の全体像を捉えるときは前置詞 *de* を用いる *commencer de inf.* で表す。要するに、*commencer à inf.* は事行の展開を意識する話し手が展開の開始を表すために用いる表現形式である。

第3章では、*se mettre à inf.* が開始アスペクトマーカ―として働く仕組みを明らかにした。*mettre* は、事行対象を新しいありかたに移すことを表す動詞である。そして、事行主体と事行対象が同一の場合に用いる *se mettre à inf.* は、事行主体が「*inf.* の事行が展開中」という新しいありかたに移ることを表

す場合に用いる。新しいありかたに移るのは事行の開始時点においてである。そのため、*se mettre à inf.* を用いると事行の開始アスペクトが示される。

第4章では、日本語の開始アスペクトマーカーについて「V ハジメル」と「V ダス」の使い分けについて論じた。そして、「V ハジメル」は事行の展開を意識しつつ開始を表す場合に用い、「V ダス」は事行の生起のみを表す場合に用いるという事実を明らかにした。以上のことから、開始アスペクトは、事行の展開を意識する場合の始動アスペクトと事行の生起のみを意識する場合の起動アスペクトに下位分類されることが確認された。

第5章では、*commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使い分けについて、前者は始動アスペクトを示し、後者は起動アスペクトを示すという仮説を立てた。そして、発話例の分析から、*commencer à inf.* と親和性が高い動詞は、話し手が事行の展開を意識するのが自然な場合が多い動詞であることが確認された。一方、*se mettre à inf.* と親和性が高い動詞は、話し手が事行の生起のみを意識すれば十分な場合が多い動詞であることが確認された。

序論で紹介した(1)のように *se mettre à inf.* が容認されにくい場合や、(2)のように *commencer à inf.* が容認されにくい場合がある事実は次のように説明される。

- (1) Dessus, il y avait rangés des bols et de petites assiettes avec du mochi grillé au shôyu, sans doute le cadeau des visiteurs: ma nièce et ma femme étaient en train d'en manger avidement.
— Bonsoir Oncle, a dit Yasuko, nous {**avons commencé** / ??**nous sommes mis**} à **manger** sans vous attendre.

(Ibuse, M., 1972, *Pluie noire*)

- (2) — Évidemment ! Écoute, je ne vais pas t'apprendre la situation politique du Japon. (...) Ensuite, en tant que progressiste, j'aurais pieds et poings liés.

Arrivé là, je {**?commence** / **me mets**} à rire :

— Nous voilà en plein dans un sujet interdit pour une soirée.

(Maruya, S., 1991, *Rébellions solitaires*)

(1) では、食事中の話し手が「食べる」という事行の開始に言及している。そして、そのような場面では、事行の生起のみを意識するのではなく、事行の

内側から展開を意識するのが自然である．そのため，*se mettre à inf.* の容認度が下がる．(2) では，相手の話を聞いている最中の「笑う」という事行の開始に言及している．このような場面では，事行の生起のみを意識するのは自然だが，どのような展開になるのかを意識するとは考えにくい．そのため，*commencer à inf.* の容認度が下がる．

以上のことから，*commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使い分けは次の通りであると言える．

- (3) *commencer à inf.* は，P の始動アスペクトを示す場合に用いる開始アスペクトマーカである．
- (4) *se mettre à inf.* は，P の起動アスペクトを示す場合に用いる開始アスペクトマーカである．

小論は，*commencer à inf.* と *se mettre à inf.* の使い分けについて論じたにとどまる．両者を用いる場合の表現効果の差異をはじめ扱わなかった事象も少なくない．また，フランス語の *commencer à inf.* / *se mettre à inf.* と日本語の「V ハジメル」/「V ダス」との差異についても詳しく論じていない．実例の観察による調査をさらに進め，より精細な記述をしていくことが今後の課題である．

[主要参考文献]

- Barcelò, G. J. & Bres, J. (2006), *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Battistelli, D. & Desclés J.-P. (2002), “Modalités d'action et inférences” , *Cahier Chronos* 10, 21-40.
- Cadiot, P. (1993), “*De* et deux de ses concurrents : *avec* et *à*”, *Langages* 110, 68-106.
- (1997), *Les prépositions abstraites en français*, Armand Colin, Paris.
- Camus, R. (2004), “Quelques aspects de commencer”, *LINX*, 81-101.
- Chevelier, J.-C. et al. (1974), *Grammaire Larousse du français contemporain*, Paris.
- Comrie, B. (1980) 山田小枝 (訳) (1988), 『アスペクト』 むぎ書房.
- Franckel, J.-J. (1989), *Étude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Librairie Droz, 142-147.
- Franczak, L. (2003), “Le rôle de la présupposition dans l'emploi des prépositions *à* et *de*”, *Revue de Sémantique et pragmatique* 14-3, 71-80.
- Gosselin, L. (1996), *Sémantique de la temporalité en Français – Un modèle calculatoire et cognitif du temps et de l'aspect*, Edition Duculot.
- Hamma, B. (2004), “Commencer par et finir par, des semi-auxiliaires non élus à l'unanimité. Débuter, terminer et couronner + par, des candidats malheureux à l'“auxiliarité””, *Le verbe dans tous ses états*, Presses universitaires de Namur.

- Jayez, J. (1996), "Référence et aspectualité. Le problème des verbes dits "aspectuels"" , *cahier de linguistique française* 18, 275-298.
- Kleiber, G. (1999), *Problèmes de sémantique*, Septentrion.
- Laveaux, J.-C. (1822), *Dictionnaire raisonné des difficultés de la langue française*, Hachette.
- Lavieu, B. & Ounis, H. (1987), "Il manque des semi-auxiliaires à l'appel ! ", *Le verbe dans tous ses états*, Presses universitaires de Namur.
- Lebas, F.(1997), "L'indexicalité du sens et l'opposition "en intension" / "en extension". Autour de commencer", *Sémiotiques* 13, 163-176.
- Lowe, R.(1996), "L'analyse des prépositions " à " et " de " dans le cadre d'une syntaxe opérative", *Revue Kalimat* 3, Université Al-Balamand, 65-82.
- Peeters, B. (1993), "Commencer et se mettre à : une description axiologico-conceptuelle ", *langue française* 98, 24-27.
- (2002) , "Les constructions du type commencer un livre : état de la question et nouvelles perspectives", *Représentations du sens linguistique*, Lincom Europa, 167-186.
- (2003), "Commencer à + infinitif : les leçons de la métonymie intégrée et de la piste métaphorique ", *Preprint* 203, Katholieke Universiteit Leuven, 1-26.
- (2004), "Commencer : la suite, mais pas encore la fin ", *French Language Studies* 14, 149-168.
- Pottier, B., (1992), *Théorie et Analyse en Linguistique*, Hachette.
- Riegel, M. et al. (2006), *Grammaire méthodique du français*, PUF.
- Saunier, E. (1996), *Identité lexicale et régulation de la variation*

sémantique. Contribution à l'étude des emplois de mettre, prendre passer et tenir, Thèse de Doctorat, Université de Paris X-Nanterre.

— (1999), “Contribution à une étude d'inchoation : se mettre à + inf. Contraintes d'emploi, effet de sens et propriétés du verbe mettre”, *Cahiers Chronos* 4, 259-288.

Shibatani, Masayoshi (2003), “Directional Verbs in Japanese”
Motion, Direction and Location in Languages, 259-286.

Trubert-Ouvrard, T.(1994), “A et DE après COMMENCER dans le schéma V1 à/de V2”, 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』 30, 149-161.

Verroens, F. (2004), “Le verbe commencer et ses prépositions”,
Círculo de lingüística aplicada a la comunicación (online journal) 19.

Vendler, Z. (1967), “Verbs and Times”, *Linguistics in Philosophy*,
Cornell University Press, 97-121.

青木三郎 (1985)「現代フランス語のアスペクトと発話構造」『フランス語学研究』 19, 62-70.

朝倉季雄 (2002)『新フランス語文法事典』白水社.

安達博明 (2004)「commencer à P.について」『人文論究』 54-2, 関西学院大学人文学会, 87-96.

岩崎修 (1988)「局面動詞の性格—局面動詞の役割分担—」『武蔵大学人文学会』 20-1, 武蔵大学人文学会, 81-104.

池上嘉彦 (2006)「<主観的把握>とは何か」『言語』 35(5), 20-27.

市川保子 (2007)『中級日本語文法と考え方のポイント』スリーエーネットワーク.

- 今井忍 (1993)「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ : 「～出す」の起動の意味を中心にして」『言語学研究』京都大学.
- 井元秀剛 (2010)『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.
- 小田由美 (1986)「局面動詞「～しはじめる」について」『横浜国大言語研究』4, 横浜国立大学, 12-21.
- 大鹿薫久 (1983)「未完了・完了・未来・過去」『山邊道』26, 天理大学国文学研究室, 87-102.
- 大橋保夫 (1993)「フランス語は明晰な言語か?」『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社, 63-65.
- 奥田靖雄 (1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房, 85-104.
- 小熊和郎 (2009)「Mettre の柔軟性と制約」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』52, 西南学院大学学術研究所, 1-26.
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房.
- 神尾昭雄 (1992)『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店.
- 川口順二 (2006)「モダリティ動詞 aller」『芸文研究』91-3, 328-310.
- 金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『金田一春彦著作集 第3巻 : 日本語のしくみ』玉川大学出版部, 279-302.
- (1955)「日本語のテンスとアスペクト」『金田一春彦著作集 第3巻 : 日本語のしくみ』玉川大学出版部, 368-407.
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- 桑原文代 (1998)「変化の開始を表す「～はじめる」」『日本語教育』99, 1-11.

古石 篤子 (1987) 「"Depuis" を含む現在形否定文の問題―

「Depuis "déictique" の分析」追記―」, 『フランス語学研究』 20, 44-52.

近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』 ひつじ書房.

坂原茂 (1995) 『複合動詞「V テクル形」』, 『言語・情報・テキスト』 2, 109-143.

佐々木幸太 (2011) 「補助動詞「ハジメル」と「ダス」に関する考察 ― 動詞の質と量を中心に―」, 京都外国語大学大学院, 修士論文.

―― (2011) 「commencer à Inf. と se mettre à Inf. の意味的差異に関する考察」『年報・フランス研究』 45, 43-55.

―― (2012) 「空間移動動詞 mettre と始動表現 se mettre à Inf.」『年報・フランス研究』 46, 97-109.

―― (2013a) 「commencer のあとの à Inf. と de Inf.」『人文論究』 63, 261-280.

―― (2013b) 「se mettre à inf. 再考: 先行研究の検証と仮説の提案」『年報・フランス研究』 47, 1-11.

―― (2014a) 「se mettre à inf. と現在形」『関西フランス語フランス文学』 20, 15-25.

―― (2014b) 「主体変化動詞・状態動詞・天候動詞の「V テイク形」・「V テクル形」」『日本文藝研究』 66, 1-21.

佐治圭三 (1992) 『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』 ひつじ書房.

佐藤淳一 (1994) 「se mettre à / commencer à の意味価値について」『フランス語研究』 28, 日本フランス語学会, 30-36.

佐野由紀子 (1998) 「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』 3, 7-21.

- ―― (2009)「あり方に関わる副詞としての「よく」について」『日本語文法の新地平』157-177, くろしお出版.
- 澤田淳 (2008)「「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性――タ形「テキタ」と「テイッタ」の非対称的な文法に注目して――」『日本語の教育』4(4), 63-69.
- 清水啓子 (2010)「日本語「動詞＋てくる」構文の逆行態用法について」『熊本県立大学文学部紀要』16.
- 白川博之監修 (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 砂川有里子 (2009)『教師と学習者のための日本語文法辞典』くろしお出版.
- 染谷聡 (2005)「フランス語 *mettre* の意味構造 (semantic structure of *mettre* in French)」『早稲田大学大学院教育学研究紀要 別冊』13-1, 317 - 325.
- 曾我祐典 (1992)『フランス語における状況の表現法―構文・動詞叙法の選択―』白水社.
- 高橋太郎 (1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版.
- ―― (2003)『動詞九章』ひつじ書房.
- ―― (2005)『日本語の動詞』ひつじ書房.
- 田窪行則 (2008)「日本語のテンス・アスペクト―参照点を表すトコロダを中心に―」『日本文化研究』25, 5-20.
- 田中衛子 (2003)「類義複合動詞の用法一考―日本語教育の視点から―」『言語と文化』10, 愛知大学語学教育研究室, 63-79.
- 谷口千賀子 (1991)「commencer à と se mettre à の意味的差異」『人文論究』41-3, 関西学院大学人文学会, 140-148.
- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.

- ―― (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.
- 中谷健太郎 (2008)「テクル・テイクの動詞共起制限の派生」『レキシ
コンフォーラム』4, ひつじ書房, 63-89.
- 朴敏瑛 (2005)「始動を表す局面動詞と局面の捉え
方」『일본연구』29, 219-240.
- 白以然 (2005)「複合動詞「～出す」・「～始める」の習得―韓国語を母
語と刷る学習者の意識を中心に―」『人間文化論叢』8, お茶の水女子
大学大学院人間文化研究科, 307-315.
- 姫野晶子 (1977)「複合動詞「～でる」と「～だす」」『日本語学校論集』
4, 72-95, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- ―― (1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- ―― (2001)「複合動詞の性質」『日本語学』20, 6-15.
- 福田嘉一郎 (2009)「日本語動詞のアスペクトと寺村文法」『言語』38-1,
42-49.
- 三宅知宏 (1995)「～ナガラと～タママと～テ」『類義下』くろしお出
版.
- 宮崎信 (2004)「連続動作の局面と意味」『筑波日本語研究』9, 筑波大
学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室, 36-55.
- 森田良行 (1968)「「行く・来る」の用法」, 『国語学』75, 75-87.
- ―― (1977)『基礎日本語・意味と使い方』角川書店.
- ―― (1998)『日本人の発想、日本語の表現「私」の立場がことばを
決める』中公親書.
- 森山卓郎 (1984)「アスペクトの意味の決まり方について」, 『日本語
学』3-12, 70-116.
- ―― (1986)「日本語アスペクトの時定項分析」, 『論集日本語研
究(1)現代編』, 明治書院, 78-116.

―― (1988) 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院.

山本裕子 (2000) 「「くる」の多義構造-「くる」と「～てくる」の意味のつながり」, 『日本語教育』 105, 11-20.

由井喜久子 (1996) 「日本語動詞の意味の抽象化過程-イク・クル・ミルの意味分析を中心に-」, 『大阪大学文学部紀要』 36, 1-29.

吉永尚 (1997) 「付帯状況を表すテ形動詞と意味分類」, 『日本語教育』 95, 73-83.

山田小枝 (1984) 『アスペクト論』 三修社.

六鹿豊 (2005) 「アスペクト特性に基づく動詞の分類――Recanati & Recanati による Vendler の再解釈をめぐって――」 『フランス語学研究の現在』 136-155, 白水社.

Grand Larousse de la langue française

Le Grand Robert

Trésor de la langue française informatisé

あとがき

私がフランス語学の研究を本格的に始めた 2011 年から小論を完成させるまでの 5 年間に多くの方々のご指導、ご協力をあおぐことができました。この場をお借りして感謝の意を表したく存じます。

曾我祐典先生からは、私が入学してからご退官される 2013 年までの 3 年間、指導教授としてさまざまな形でご指導ご叱正をたまわりました。また、ご退官されてからも今日までそれまでと変わらぬ指導で導いてくださいました。Olivier Birmann 先生は、入学してから 3 年間はインフォーマントとしてご協力をいただき、議論に多くの時間を割いていただきました。また、2013 年から今日まで、指導教官としてご指導をたまわりました。大鹿薫久先生からは、日本語学のゼミナールで日本語学の知見からさまざまなコメントやアドバイスをたまわりました。伊藤了子先生からは、興味深いデータを提供していただき、論文提出の際には貴重なご意見をたまわりました。小田涼先生は、拙論の内容や方向性に深い理解を示してくださりながら重要なご助言をくださいました。また、院生発表会の際には、東浦弘樹先生、中谷拓士先生、水野尚先生、久保昭博先生から多岐にわたる貴重なご教示をたまわりました。そして、フランス文学フランス語学専修の友人たちからは、多くの刺激と励ましをいただきました。

最後に、私が研究に取り組むことができたのも、家族の理解と支えがあったことです。

これまでの研究活動を見守ってくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

2015 年 2 月

佐々木幸太